

# 平安京左京三条三坊十一町

平安京跡研究調査報告

第14輯

財團法人 古代學協會

昭和59年

## 目 次

はじめに	1
第1章 調査の経過	4
第1節 屢序	4
第2節 A区の調査	6
第3節 B区の調査	7
第4節 C区の調査	7
第2章 造構と遺物	9
第1節 門跡と鳥丸小路の側溝	9
第2節 墓	13
第3節 その他の造構・遺物	34
第3章 文献的考察	53
第1節 高階邸の位置	53
第2節 墓地の規制	54
第3節 姉小路との関連	56
第4節 桃山期以降	58
第4章 まとめ	59
第1節 門跡とその周辺の造構	59
第2節 墓 城	60
おわりに	62

## 図版目次

- |       |                                                                                                     |       |                                                    |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|----------------------------------------------------|
| 図版第1  | 上：調査地遠景<br>下：A区第1検出面全景                                                                              | 図版第17 | 上：S K 175遺物検出状態<br>下：S X 118集石検出状態                 |
| 図版第2  | 上：S B 26・27・28 下：S B 27                                                                             | 図版第18 | B区全景                                               |
| 図版第3  | 1 : S E 1 2 : S E 30<br>3 : S E 7 4 : S E 3                                                         | 図版第19 | 上：S B 207 下：S K 256                                |
| 図版第4  | 1 : S E 6 2 : S E 36<br>3 : S E 41 4 : S E 33                                                       | 図版第20 | 1 : S E 230 2 : S E 204<br>3 : S E 205 4 : S E 206 |
| 図版第5  | 1 : S E 48 2 : S E 24<br>3 : S E 40 4 : S E 29                                                      | 図版第21 | 1 : S E 255 2 : S E 203<br>3 : S E 222 4 : S E 254 |
| 図版第6  | 1 : S E 39 2 : S E 47<br>3 : S E 43 4 : S E 50                                                      | 図版第22 | 1 : S E 209 2 : S E 214<br>3 : S E 262 4 : S E 204 |
| 図版第7  | 上：A区第2検出面全景<br>下：S E 196                                                                            | 図版第23 | 上：C区全景 下：S D 382                                   |
| 図版第8  | 上：門跡検出状態<br>下：同 碓石露出状況                                                                              | 図版第24 | 溝状造構(S X 339)集石                                    |
| 図版第9  | 上：門跡検出状態<br>下：同 碓石取り外し後                                                                             | 図版第25 | 上：S K 347・364 下：S K 363                            |
| 図版第10 | 上：門跡(S B 65-a)礎石<br>検出状態<br>下：同 根石検出状態                                                              | 図版第26 | 上：S K 396 下：S K 353・354                            |
| 図版第11 | 上：門跡(S B 65-b)礎石<br>検出状態<br>下：同 碓石露出状況                                                              | 図版第27 | S E 347 上：全景 下：細部                                  |
| 図版第12 | 上：新薬師寺東門<br>下：法隆寺西園院上土門                                                                             | 図版第28 | 1 : S E 309 2 : S E 365<br>3 : S E 306 4 : S K 375 |
| 図版第13 | 上：十輪院四脚門<br>下：法隆寺宗源寺四脚門                                                                             | 図版第29 | 1 : S E 401 2 : S E 330<br>3 : S E 371 4 : S E 305 |
| 図版第14 | 1. 西獄舎<br>『平治物語絵詞(信西巻)』<br>2. 鳥羽殿『西行物語絵巻』<br>3. 大宮内府寒宗邸<br>『法然上人絵詞(巻二)』<br>4. 押小路御所<br>『法然上人絵詞(巻九)』 | 図版第30 | 上：A区墓域全景 下：S D 45溝                                 |
| 図版第15 | 上：S K 79遺物検出状態<br>下：S K 114遺物検出状態                                                                   | 図版第31 | 集石墓 上：S X 13 下：S X 14                              |
| 図版第16 | 上：S K 70上層遺物検出状態<br>下：同 下層遺物検出状態                                                                    | 図版第32 | 集石墓 上：S X 19断面<br>下：S X 19人骨                       |
|       |                                                                                                     | 図版第33 | 集石墓 上：S X 15平面<br>下：S X 15断面                       |
|       |                                                                                                     | 図版第34 | 集石墓 上：S X 322<br>下：S X 337                         |
|       |                                                                                                     | 図版第35 | 土壤墓 S X 54                                         |
|       |                                                                                                     | 図版第36 | 土壤墓 上：S X 80 下：S X 82                              |
|       |                                                                                                     | 図版第37 | 土壤墓 上：S X 88 下：S X 90                              |
|       |                                                                                                     | 図版第38 | 土壤墓 上：S X 131<br>下：S X 138                         |
|       |                                                                                                     | 図版第39 | 土壤墓 上：S X 183<br>下：竹製敷物                            |
|       |                                                                                                     | 図版第40 | 土壤墓 上：S X 140<br>下：S X 311                         |
|       |                                                                                                     | 図版第41 | 土壤墓 上：S X 312<br>下：S X 315                         |

- 図版第42 土壙墓 上：S X319  
下：S X321
- 図版第43 土壙墓 上：S X319 + 321  
下：S X324
- 図版第44 土壙墓 上：S X325  
下：S X315 + 325
- 図版第45 土壙墓 上：S X326  
下：S X332
- 図版第46 土壙墓 上：S X356  
下：S X359
- 図版第47 土壙墓 上：S X360  
下：S X315 + 360
- 図版第48 土壙墓 上：S X370  
下：S X384
- 図版第49 土壙墓 上：S X387  
下：S X399
- 図版第50 上：火葬墓 S X372  
下：二次堆積の人骨 S D45中
- 図版第51 二次堆積の人骨 上：S X336  
下：S X81
- 図版第52 上：二次堆積の人骨 S X334  
下：犬の骨 S X188
- 図版第53 S X54 人骨取上げ作業

- 図版第54 上：五輪石出土状態  
1 + 2 : S X399 出土竹製敷物  
3 : S X183 出土珠數玉  
4 : S X356 出土ビーズ玉
- 図版第55 S B68 + 69, S B65 - b 出土遺物
- 図版第56 左：S X171 出土遺物  
右：縄釉陶器・須恵器・青白磁
- 図版第57 S K71, S K79 出土遺物
- 図版第58 S K71出土遺物
- 図版第59 S K101, S X188 出土遺物
- 図版第60 S K70 出土遺物
- 図版第61 S E196 出土遺物・磁灶窯陶器
- 図版第62 S K327 出土木製品
- 図版第63 S E374 出土木製品・陶器
- 図版第64 出土軒丸瓦(1)
- 図版第65 出土軒丸瓦(2)  
• S K85出土軒瓦
- 図版第66 出土軒平瓦(1)
- 図版第67 出土軒平瓦(2)
- 図版第68 出土軒平瓦(2)  
• 五輪石・板碑
- 図版第69 出土六文錢(1)
- 図版第70 出土六文錢(2)

## 挿 図 目 次

第1図 発掘調査地位置図	1	第33図 SX399 土壙墓出土竹製敷物 実測図・模式図	24
第2図 調査区トレント設定図	2	第34図 SX372 火葬墓	25
第3図 SB65-a, SB65-b 出土遺物実測図	10	第35図 SX188 大の骨	29
第4図 SB69 出土遺物実測図	10	第36図 SX386・370 出土人骨	27
第5図 SB186 出土遺物実測図	10	第37図 SX344 二次堆積の人骨	27
第6図 SD83 出土遺物実測図	10	第38図 SX315・325 土壙墓	28
第7図 SD66 出土遺物実測図	10	第39図 SE196 井戸	34
第8図 SD99 出土遺物実測図	11	第40図 SE196 出土遺物実測図	35
第9図 SD98 出土遺物実測図	11	第41図 SB374 井戸	35
第10図 SD100 出土遺物実測図	12	第42図 SE374 出土遺物実測図	36
第11図 SX19 集石墓 人骨出土状態	折込	第43図 SK85 出土軒丸瓦 実測図・拓影	36
第12図 SX15 集石墓	14	第44図 出土軒丸瓦実測図・拓影	37
第13図 SX322 集石墓	14	第45図 出土軒平瓦	
第14図 SX54 土壙墓 人骨及び抱石	18	第46図 出土軒平瓦 実測図・拓影(1)	38
第15図 SX80 土壙墓	18	第47図 SD395 出土遺物実測図	39
第16図 SX82 土壙墓	19	第48図 SD45 出土遺物実測図	40
第17図 SX90 土壙墓	19	第49図 SK396 出土遺物実測図	41
第18図 SX131 土壙墓	20	第50図 SK79 出土遺物実測図	41
第19図 SX183 土壙墓	20	第51図 SK70 出土遺物実測図	
第20図 SX183 出土珠数玉 実測図	20	第52図 SK327・S E374 木製品実測図	43
第21図 SX311 土壙墓	21	第53図 その他の平安時代の 遺物実測図	42
第22図 SX312 土壙墓	21	第54図 A区墓域内出土遺物実測図	44
第23図 SX319 土壙墓	21	第55図 五輪石・板碑実測図	44
第24図 SX321 土壙墓	22	第56図 SX90 出土六文銭	45
第25図 SX387 集石墓	22	第57図 SX97 出土六文銭	45
第26図 SX140 土壙墓	23	第58図 SX131 出土六文銭	45
第27図 SX324 土壙墓	23	第59図 SX140 出土六文銭	45
第28図 SX326 土壙墓	23	第60図 SX311 出土六文銭	45
第29図 SX332 土壙墓	23	第61図 SX313 出土六文銭	45
第30図 SX356 土壙墓	24	第62図 SX315 出土六文銭	46
第31図 SX356 出土ビーズ玉 実測図	24	第63図 SX320 出土六文銭	46
第32図 SX399 土壙墓	24	第64図 SX324 出土六文銭	46

第65図	SX327 出土六文銭	… … … 46	第78図	SD98 出土土師器皿	
第66図	SX336 出土六文銭	… … … 46		法量図表	… … 49
第67図	SX356 出土六文銭	… … … 46	第79図	SD99 出土土師器皿	
第68図	SX359 出土六文銭	… … … 47		法量図表	… … 50
第69図	SX362 出土六文銭	… … … 47	第80図	SK114 出土土師器皿	
第70図	SX376 出土六文銭	… … … 47		法量図表	… … 50
第71図	SX387 出土六文銭	… … … 47	第81図	SK116 出土土師器皿	
第72図	SX399 出土六文銭	… … … 47		法量図表	… … 51
第73図	3 A15区第1検出面 出土六文銭	… … … 47	第82図	SK79 出土土師器皿	
				法量図表	… … 51
第74図	A区墓域出土の その他の古銭	… … … 48	第83図	SK70 出土土師器皿	
第75図	C区墓域出土の その他の古銭	… … … 48		法量図表	… … 52
第76図	出土古銭統計図表	… … … 48	第84図	戦国期京都都市図	… … … 55
第77図	SD83 出土土師器皿		第85図	「僧永舜・氏女日吉十禪師社 燈油下地寄進状」	… … … 57
		法量図表	… … 49		

## 付 図 目 次

1. A区第1検出面実測図
2. A区第2検出面実測図・断面図
3. B区平面実測図
4. C区平面実測図・断面図
5. 門跡・溝実測図
6. 調査地周辺の遺構検出状況

## 例　　言

1. 本書は、平安博物館が、日本リクルートセンターと明治生命保険相互会社の委託を受けて実施した、ビル新築敷地内の発掘調査報告書である。
2. 執筆分担は下記の通りである。

はじめに、第1章、第2章第1節・第3節、

第4章、おわりに

寺島孝一（平安博物館考古学第4研究室）

第2章第2節

山下秀樹（平安博物館考古学第1研究室）

第3章

藤本孝一（平安博物館文献学研究室）

3. 出土した人骨の鑑定は、京都大学理学部池田次郎教授に依頼した。
4. 写真撮影は主として藤本が担当したが、現像・焼付  
は、平安博物館技術室の水口　薰氏の協力を得た。
5. 本書の編集は寺島が行った。

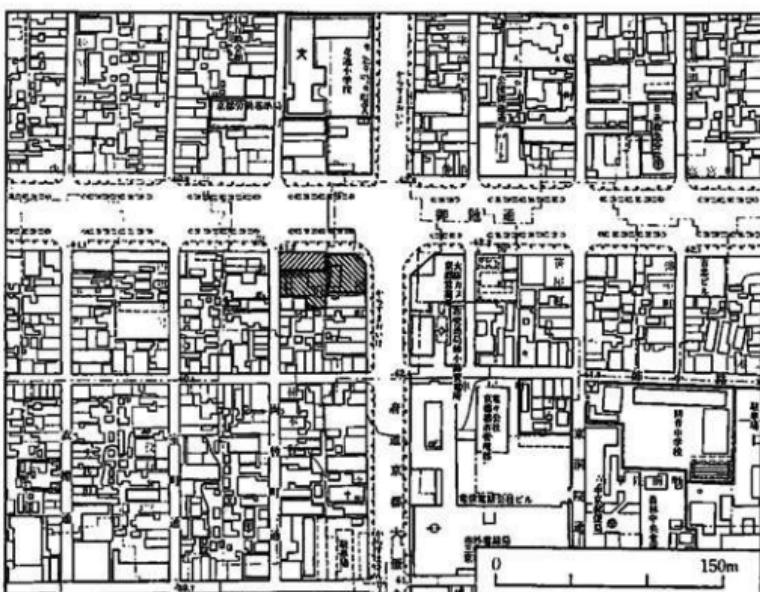
## はじめに

日本リクルートセンターと、明治生命保険相互会社は、烏丸通御池西南角地に合同テナントビルの建設を計画した(第1図)。

この地は平安京左京三条三坊十一町にあたり、平安時代後期に高階為清(正五位下、備中守・佐渡守などを歴任した受領)の邸宅があったと文献に見える<sup>1)</sup>。また、北には押小路殿、南には三条西殿など、平安時代後期・院政期の主要な邸宅が立ちならんでおり、これらに伴う遺構の存在が予想された。

また、南に隣接する明治生命用地<sup>2)</sup>、および更に南に続く中井商店ビル建設用地<sup>3)</sup>の調査では、平安時代の烏丸小路の東側溝と推定される溝が発見されている。

このため、京都市埋蔵文化財センターは、ビル建設工事前に試掘調査を行う必要を認め、日本リクルートセンター、長谷川工務店、平安博物館の立合いのもと重機による試掘調査を行った。その結果現地表下約2mで鎌倉～室町時代の遺物包含層を、3mほどの地山直上では、平



第1図 発掘調査地位図 右下り斜線部分：A, B区 左下り斜線部分：C区

安時代の遺物の発見もあったため本調査を行うことが決定された。

事業主が2社に亘るため、各々所有する土地ごとに発掘調査委託契約を結び、第1次調査として日本リクルートセンター所有地(A・B区)、第2次調査として明治生命保険相互会社の所有地(C区)の試掘調査を実施した。

調査地の現在の地番は次の通りである。

#### 日本リクルートセンター

京都市中京区島丸通御池下ル虎屋町565-1・568・570・572番地

京都市中京区両替町通り姉小路上ル龍池町426・424-2・424-3番地

#### 明治生命保険相互会社

京都市中京区両替町通り姉小路上ル龍池町431番地

調査体制は以下の通りであった。

#### 調査依頼者

株式会社日本リクルートセンター

代表取締役 江副浩正

明治生命保険相互会社

代表取締役 土田晃透

#### 調査主体

平安博物館 館長 角田文衛

調査担当者 平安博物館 寺島孝一(主任)・藤本孝一・山下秀樹

また調査補助員として次の諸氏の参加を得た。

山浦 修, 藤平 寧(以上関西大学), 酒井彰子, 須原久美子, 和田絵美, 石原みゆき, 吉田美由紀, 大西敦子(以上京都女子大学), 上杉英世(京都大学), 小宮康之, 木村弘之(以上奈良大学), 田畑文明, 相水公夫(以上同志社大学), 鈴木弘二, 石本 勝, 妻島万紀, 中村仁美, 山村恵美(立命館大学), 藤本幸男(京都産業大学), 小山知佐子(大谷大学), 竹田善久, 梅田敏彦, 石倉正裕, 北島かおり, 横浜二三子(以上京都コンピューター学院), 清滝龍, 津田美貴子, 宇野克美, 出口瑞鳥

作業員としては向日市を中心とする下記の方々の手をわざらわせた。また全京都建設共同組合を通じ、明輝建設の作業員の協力を得た。

橋本庄次, 橋本俊夫, 安田秀男, 吉田竜太郎, 五十嵐章男, 木村謙治, 山中貞男, 三浦信一, 長谷川秀実, 田中義春, 五十嵐治男, 古前健次, 福田文次, 赤沢俊夫

発掘作業は昭和58年9月中旬に重機による表土掘削を行い、9月19日~11月19日の2ヶ月をA区の調査にあて、B区は11月21日から12月10日の約20日間で実施した。

C区の調査は12月27日から開始し昭和56年2月4日に終了した。

調査終了後の整理補助員としては、以下の諸氏の参加を得た。

山浦 修, 藤平 寧(以上関西大学), 須原久美子, 酒井彰子, 大西敦子(以上京都女子大

学), 小山知佐子, 兵頭弥生, 富成純子(以上大谷大学), 妻島万紀, 中村仁美, 山村恵美, 湯浅久美子, 宮田明美, 夏井環, 片桐且裕(以上立命館大学), 上杉英世, 川口浩一, 梅田和貴, 朴貞子(以上京都大学), 小宮康之, 谷英治(奈良大学), 田畠文明(同志社大学), 北島かおり(京都コンピューター学院), 岸本伸子, 津田美貴子, 出口瑞鳥, 鈴木とも子

尚, 発掘調査の準備段階から全調査期間に亘り, 長谷川工務店の木下俊一, 山本進一, 石榑芳久, 山口真治の各氏に, 機器の調達, プレハブ設営, 重機による掘削, 安全管理等多岐にわたってお世話になった。厚く謝意を表する次第である。また京都市埋蔵文化財センター所長浪貝毅氏, 同技官北田栄造氏には調査の斡旋から試掘調査を経て終了に至るまで, 指導・協力を賜わった。更に(財)京都市埋蔵文化財研究所には, 敷地内への国土座標の移設の労をとっていただいた。これらの方々の協力の下で発掘が行われたことを記し, 感謝の意を表するものである。

## 註

- 1) 第3章参照
- 2) 寺島孝一編『平安京跡研究調査報告第12輯 平安京押小路殿跡・左京三条三坊十一町』(京都, 昭和59年)第3部参照。この調査地も合同テナントビル用地である。
- 3) 京都市埋蔵文化財研究所昭和57年度調査による。同研究所永田信一氏の御教示による。

## 第1章 調査の経過

本調査に先だって実施した試掘調査の結果、表土下2mほどまでが最近世～江戸時代の堆積層で、表土下2～3mに室町時代～平安時代の遺物の包含が認められた。この層序観察の結果と、調査期間等の諸条件を勘案して、表土下約2mまでを重機によって掘削し、以下を手作業で掘り進めることとした。

重機による掘削はまず日本リクリートセンター所有地のA区、B区について、昭和58年9月9日から17日まで、雨天による中断があったものの、ほぼ1週間で実施した。掘削にあたっては、敷地の周囲が、鳥丸通、御池通、隣接するビル、民家にとり囲まれており、また3m以上の掘削が見込まれることもあり安全確保のため、約2mの法をつけ、更にその地点から約60度の傾斜をつけて掘り下げた。

ただし、敷地(A区)東端部分については、過去に実施された周辺地域の発掘調査などから、鳥丸小路の西側溝が検出される可能性が極めて高いため、敷地いっぱいのラインにH鋼を打ち込み矢板で補強して、調査の万全を期した。

A区の調査は9月19日から、11月19日の2ヶ月に亘って実施し、東端部分で鳥丸小路の側溝と推定される溝、門跡と推定される遺構を検出した。また、A区中央部に東西に走る溝を検出し、溝の北側では多数の土壙墓、集石墓を検出した。これ以外の遺構としては、井戸、室などが発見されている。

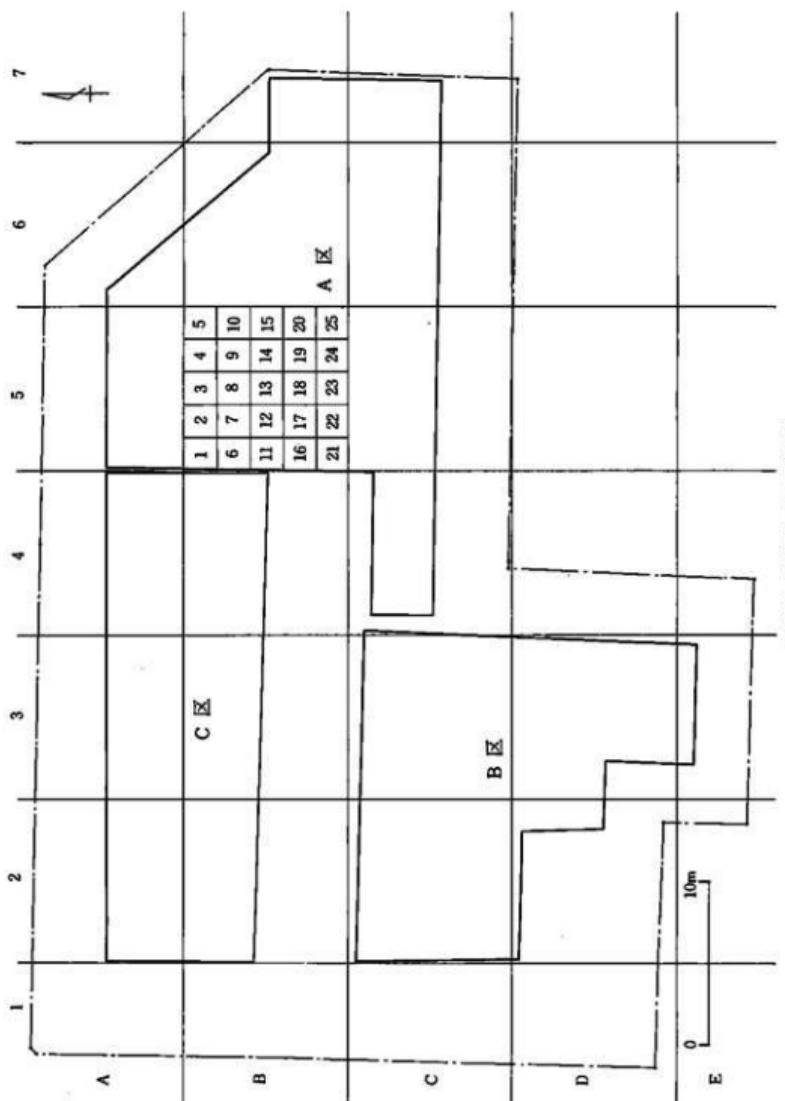
B区の調査は11月21日から12月10日の約20日間で完了したが、ここでは江戸期における粘土の掘削の跡が著しく、顕著な遺構は検出されなかった。

C区の重機による掘削は12月中旬から実施し、12月27日から翌昭和59年2月4日に終了した。C区では、A区で検出された墓の続きが発見され、50体を越える人骨や、五輪石などが検出されている。

尚、A～C区の敷地全体に10m方眼のグリッドを組んだ。西から東に向って順に1～7の番号を付し、北から南に向ってA～Dの記号を付した(第2図参照)。更に各グリッドに2mの方眼を組み1～25の番号を付し、遺物等の取り上げはこれによっている。

### 第1節 層 序

調査地全体の地表のレヴェルが一定していない(西に向って傾斜している)ため、ユンボによる掘削の深さは一定ではないが、およそ1.5～2mを機械掘りしている。この部分は近世以降の堆積層で、一部には明治以降の大量の砂質土による整地層も認められた。また江戸末の元治元年の大火によると考えられる焼土層及び、焼土・瓦を埋めた土壙も確認されている。



第2図 調査区トレシチ設定図

## 6 第2節 A区の調査

重機による掘削以下の土層は、A～C区ともに13～16世紀の堆積層が主として認められ。平安時代の層としては、A区南壁、B区北壁、C区北壁に僅かに認められるのみであった。それもいすれも11世紀～12世紀のもので、平安時代前期～中期の土層は観察できなかった。また、後述する鳥丸小路の側溝の部分については、溝に直交する南北両壁面とも、近世の窓や土壤による攪乱のため、良好な状況での断面観察は行えなかった。

鎌倉、室町時代の層についても、多くの切り合が認められ、一定の安定した層序は確認できなかった。ただし、墓壙の集中して発見されたC区では、14～15世紀の遺物を包含する、鉄分をやや多く含む層を掘り込んで墓壙が形成されており、墓の成立年代を知る上で一つの手がかりとなった。

C区の西半とB区については、鎌倉～室町期の堆積層も、近世の様々な掘り込みによって破壊されており、良好な堆積状況は認められない。

### 第2節 A区の調査(付図1・2)

重機による掘削後、30cmほど掘り下げた段階で検出した造構を、第1検出面発見の造構とした。この段階で発見されているものは、近世の井戸がほとんどで、他にA区中央を東西に走る溝(S D45)の輪郭をつかんだ(付図1)。

井戸はこの段階で29基が確認されたが、ほとんど全てが、江戸時代以降のものであった。このうちには、素掘りのもの(S E08・09・17・42・48・31)と切石を積んだもの(S E01・05・06・07・29・30・32・60など)がある。これらの井戸がいずれも掘り方の直径1.5～1.8m、石組内径0.8～1mであるのに対し、S E34・50は、石組内径50cmと極めて小さな井戸であった。

A区東側では室跡と推定される造構が検出されている(S X26～28)。このうちS X26・28はそれぞれ南端・北端を僅かに検出したのみであった。全体を検出したS X27では、南北2m、東西1.8mの規模で、花崗岩の切石を回らし、床面と内壁に漆喰を塗ったものである。

A区西側張り出し部分には、人頭大～拳大の礫を配した造構が検出されたが、性格等は不明であった。

S D45の北側では、近世の井戸による破壊が著しいものの、相当数の集石が検出された。これらの集石は直径1m程度に集中するものから、数mの範囲に比較的粗に分布するものまで、様々な様相を呈していたが、この集石検出面以下の調査で、埋葬された人骨が多数発見されたことから、墓の上部構造に関連するものと考えた。

第1検出面では顕著な造構として集石墓を検出し、この部分(S D45の北側)については、墓壙と人骨の調査を続けて行った。S D45の南側については、次第に掘り下げていったものの顕著な生活面は認められず、最終的に地山に掘り込まれた造構を検出した段階を第2検出面とした。この面に至るまでの主要な造構としては、13世紀後半の土師器を主体とした土器を大量に含んだS K70などがある。

A区の東端部分では、当初予想した通り、烏丸小路の側溝と考えられる溝が数本と、烏丸小路に面した門の礎石と考える造構が検出された点が大きな成果と言える。

また墓域の下層からは平安末～鎌倉期と考えられる方形の木枠を持つ井戸が検出された。

更に中央部やや西側では、礎盤として用いられたかと思われる状態で、奈良時代の軒丸瓦、軒平瓦のセットが円形の土壙から検出されている。

### 第3節 B区の調査（付図3）

B区は、そのほとんど全てが江戸時代後半の粘土採集跡と推定される土壙で占められていた。この土壙には方形のもの、円形のもの、不定形のものなど様々な形態が認められる。これらの土壙を粘土採集跡とした根拠は、

- 1) 相互に重複しないように、しかも壁を接して掘られていること。これはSK 219, 212, 217, 216などの互いに接した土壙で顕著に認められる。
- 2) 井戸などの障害物がある場合はそれをさけており、必ずしも円形または方形にこだわっていないこと。これはSK 245, 227などに顕著に認められる。
- 3) いずれの土壙も、掘り方の下端が、粘土層の終る深さ、すなわち砂礫層の直上で終わっていること。

の3点である。

この数多くの粘土採集跡の間げきをぬって井戸が検出されているが、いずれも近世のものである。構造としては石組を持つもの(S E 222, 230, 208, 205など)と素掘りと考えられるもの(S E 262, 209, 234)がある。

B区中央部には、粘土採集をまぬがれて、土蔵跡と推定される造構が検出された(S E 207)。検出されたのは漆喰敷きの床と、壁に用いたと推定される切石の裏込と考えられる花崗岩のみであったが、床面の漆喰の壁へ続くわずかな立上りの痕跡から、内径は東西3m、南北3.5mほどと推定された。またこの床面中央には、蔵の心柱の礎石と考えられる花崗岩の切石が置かれていた。この床面下では、粘土採集跡は検出されなかったことから、粘土を採集した時期以前に建造されたと考えられる。

### 第4節 C区の調査（付図4）

西側の5分の2ほどはB区と同様に近世の搅乱が著しく顕著な造構は検出できなかった。

東側はA区で検出された墓域に続き、多数の墓壙が確認された。

墓以外の造構としては、C区北側で鎌倉期の溝が検出されている。この溝は幅が約1.2mで、両端は近世の土壙によって破壊されているものの、東西にはぼ15mにわたって検出された。

井戸もA・B区同様近世のものが多数検出されているが、鎌倉期のものも1基検出した(S

8 第4節 C区の調査

E374)。

S K364は、隅丸方形の石組を持つ井戸状造構であるが、底部にも礫を敷きつめている。また、深さも他の井戸を比較して浅く、特殊な用途のものであると思われる(図版第25)。

また、この近くで礫を敷きつめた中に橋状のものを配したと考えられる造構が検出されている(S X339)。木質はほぼ完全に腐食していたが、幅は約10cmと考えられる。長さは東西に約3mにわたって確認した(図版第24)。周辺には酸化鉄の付着が認められ水に関係した造構と考えられる。

## 第2章 遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構・遺物で、最も注目すべき成果として、1) A区東端で検出した鳥丸小路の溝及び門跡と考えられる礎石、2) A区北側からC区にかけて検出した墓壙群があげられる。

本章ではこの2者を第1・2節でとりあげ他の遺構と遺物については、第3節にまとめることした。

### 第1節 門跡と鳥丸小路の側溝 (付図5)

A区東端で、門跡と思われる一対の礎石と対にはならないもののいくつかの礎石ないしその抜き跡、そして南北にのびる溝を数本検出した。

#### 1) 門跡(S E65)(図版第8~11)

S B65-bは1.1×1.2mの方形の掘り方を持ち、そのほぼ中央に東西40cm、南北60cm、厚さ25cmの花崗岩をすえている。S B65-aは、東側に後の時期に置かれたと考えられるやや小形の礎石を置くものの、ほぼ方形の掘り方を持ち、東西60cm、南北70cmほどの、やはり花崗岩の礎石を置いている。厚さは前者よりやや薄く、23cmほどであるが、両者の上面のレベルは、絶対高さ39m強とほぼ一致している。礎石上面の水平を保つためS B65-bでは東側に、S B65-aでは南~西側に根石を配している。この2つの礎石の芯一芯の距離は3.2mであった。用いられている石材の種類、形態及び上面のレヴェルの一一致すること、また掘り方の形態の一一致することから、この両者が一対となり、門の礎石となることは確実と考えられる。

この門が、2本の親柱のみによる棟門であるのか、あるいは前後に支柱を配する四脚門であるのかま不明であるが、少くとも調査地の範囲内では四脚門の痕跡は認められなかった。

両者の掘り方の埋土からはごく少量の遺物のみの頭出にとどまった(第3図)。土師皿(1~3、5~6・8)の形態からみて10C代の年代を想定できる。

他にもS B69の礎石、S B68の根石など、門の遺構を推定できるものが認められたが、いずれも一対になるものは認められなかった。

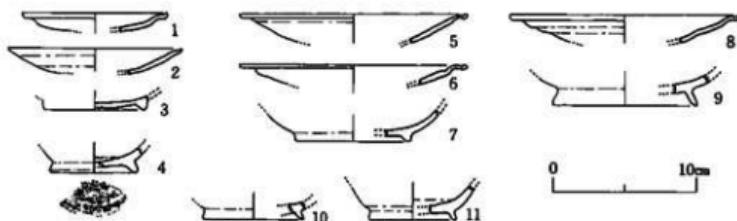
#### 2) 溝

S D83・86・98・99・130など5本以上の溝が重複して検出された。

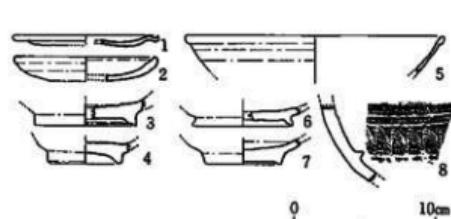
S D83は東端部でわずかに検出されたのみで、東側の検出は敷地外のため不可能であった。

11世紀代の土師皿を多く検出している(第6図)。

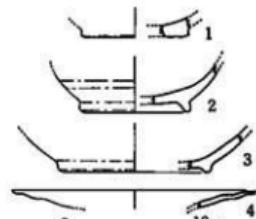
10 第1節 門跡と鳥丸小路の側溝



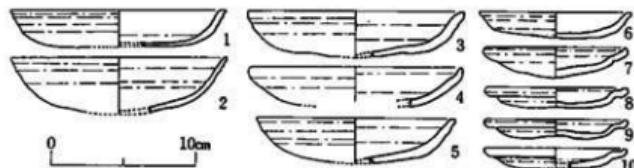
第3図 SB65-a(1~9)・SB65-b(10~11) 出土造物実測図



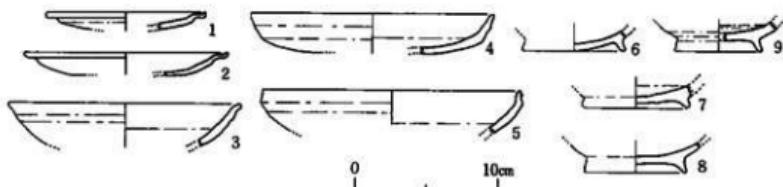
第4図 SB60 出土造物実測図



第5図 SB186 出土造物実測図



第6図 SD83 出土造物実測図



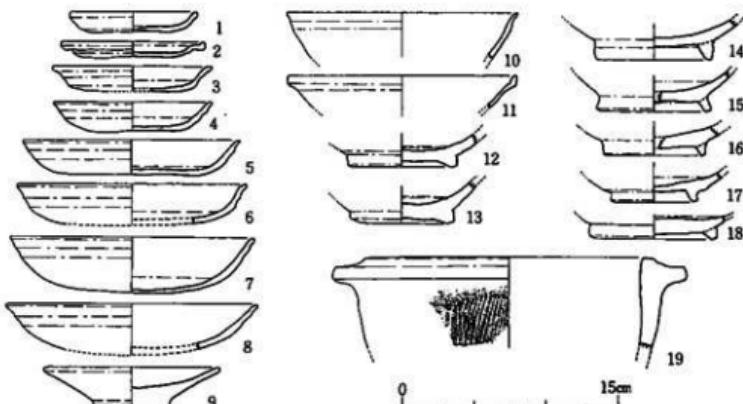
第7図 SD66 出土造物実測図

S D66はS B66の北側から掘削が始まり、調査地北端まで約2.2mを確認した。幅は検出面の上端で約1mであった。出土した遺物(第7図)は土師皿が多いが、施釉陶器も少量発見されている。年代は11世紀代を比定できる。

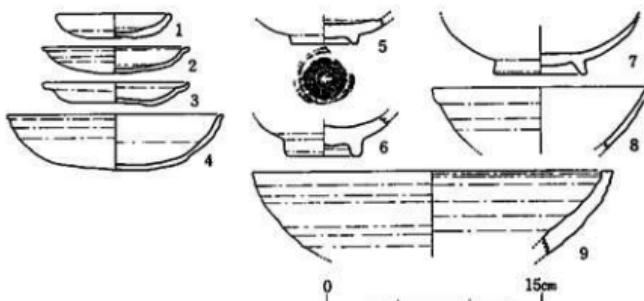
S D98は門跡より内側で、礎石のはば中央部分から北側にのびている。幅はやはり1m程で、北端部は後世の土壤によって破壊をうけている。遺物(第9図)から11世紀代のものであると推定できる。

S D99はS D98のすぐ西側に掘られた溝で、やや不整形をなしている。土師皿の形態から12世紀代のものと考えられよう。

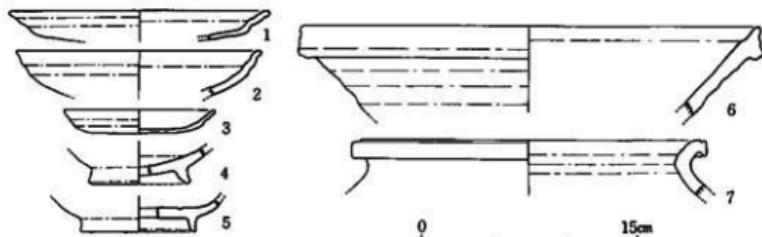
門跡の南側では多数の溝が重複して検出された(S D130, S K144, 143も溝の可能性が大きいと考えられる)。これらの溝からは13~14世代の土師皿が検出されている。また、S D98・99が埋められた段階で、この部分がごく残い溝になっていた様子で、13~14世紀の遺物及び礎が堆積していた(S D100)。



第8図 S D99 出土遺物実測図



第9図 S D98 出土遺物実測図



第10図 S D100 出土遺物実測図

### 3) 門跡と溝の方位と重複関係

これら検出された礎石の芯一芯、溝の方位は、いずれも東に約5度傾いています。これまでの他の調査の検出例では、多少の方向の不同はあるものの、今回の調査例のように大きく方位がずれた例は認められない点が注目されるところである。

また、今回の調査で対として検出した礎石はS B65の一対のみであったが、他にもいくつかの礎石が、近接して検出されている。これに対応するかのように、発見された溝が、いずれも礎石部分をさけて掘られているのは注目すべき点であろう。

この地点は、これまでの調査例による条坊復元によれば(付図6参照)、左京三条三坊十一町の中心線よりやや北側に位置している。平安時代中期から鎌倉時代に至る礎石や溝が、いずれもこの地点を意識して配されていることは明らかで、長い期間に亘って、この場所が出入口として用いられてきたと考えられるのである。

5度にも及ぶ方位のずれと、敷地中央部よりやや北に位置する門の位置は、貴族の邸宅のあり方の一つの例として興味深い史料となるものであろう。

また、関連資料として絵図に見られる棟門・四脚門(図版第14)の他に、現存する門のうち主要なものを掲げた。

図版第12-上は奈良市にある新楽寺東門である。平安末～鎌倉初期に建立されたもので、本来親柱2本のみの棟門であったものが、後に支柱をつけ四脚門になったといい。柱の芯一芯の距離は約4.5mである。

図版第12-下は法隆寺西園院の上土門で、鎌倉時代に建立された(重要文化財)。柱の芯一芯の距離は2.5mである。

図版第13-上は奈良市十輪院の四脚門で、鎌倉時代の建立。柱の芯一芯は3.15mである。

図版第13-下は法隆寺宗源寺四脚門で鎌倉時代の建立である。柱の芯一芯距離は約3.3mである。門の幅という点からみると今回検出した造構は図版第13に示した2つの門に近い数値を持っている。

## 第2節 墓

発見された墓は、土葬墓と火葬墓に大別できる。土葬墓はさらに構造の違いによって、集石墓と土壙墓の二つに分けられる。

### 1) 集石墓

合計17基発見されている。人骨検出の有無に係わらず、礫が集中した状態で発見されたもの全てをこの範疇に入れた。多くの場合、径50~100cmの範囲に10~100個の拳大の礫が集中している(付図1, 図版第31~34)。礫には完形の円礫が多いが、一部を欠損するものも含まれる。石材では砂岩に次いで珪岩が多く、両者でほぼ全てを占める。

集石墓は、さらに下部構造の差によって三つに分けられる。

第一は、集石下に人骨を伴う墓壙を持つ例である。これにはS X 19(第11図、図版第32)のみが含まれる。

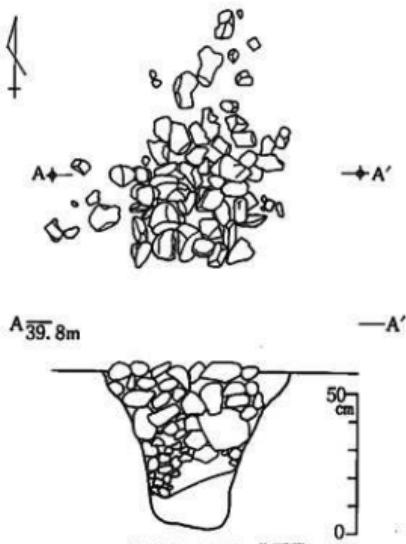
S X 19は、本調査で発見された墓の中では最も秩序だった手順に従って構築されたと思われる。

近世の井戸に切られてはいるが、平面形では径約1mの範囲に拳大の礫が集中する。集石の下には、深さ約60cmの墓壙が認められる。墓壙底面は平坦面とはならず、下方にかなり強く突出した曲面をなす。墓壙内の堆積は3層に分かれる。最下層には墓壙底を覆うように灰色砂質土が薄く堆積し、その上に径20cmを越えるような大きな礫が厚さ30cm近く積まれる。礫間を充填する土は、灰褐色の細粒シルトで粘性が強い。この上に遺体を安置した様で、人骨の多くが礫層上の暗褐色土中で発見されている。一部には、下の礫層中に落ち込んだ人骨もある。遺体を安置した上にさらに礫を配することで墓の構造が完結しているようである。このように、S X 19に見る墓の構造は単に死体を埋めるというに留まらず、埋葬方法において秩序だった手順を踏んでいふと言える。

一方、繁雑な埋葬手順に反し、副葬品の出土は皆無である。また棺等の痕跡も全く留めておらず、直葬であった可能性が高い。墓壙内の人骨の分布には若干の乱れが認められるが、北端から歯が、南半から骨盤が出土し、南北方向に大腿骨が延びる事から考えて、頭位を北にした屈葬が行なわれたと思われる。頭骨のはほとんどは井戸を作る際に取り去られている。

第二は集石の下に明瞭な墓壙を伴う例である。S X 15が本例に含まれる。

S X 15は、径50cm程の範囲に礫の密集した、最もコンパクトな集石である(第12図、図版第33)。集石下に、深さ約60cmのほぼ円形の墓壙を持つ。集石を構成する礫は墓壙深く落ち込んでおり、上面からおよそ45cmにまで達する。墓壙内と上面で、礫の大きさにはS X 19のような著しい差は認められない。墓壙底には、黒褐色土が堆積する。底径は約25cmである。人骨・副葬品は全く出土していない。



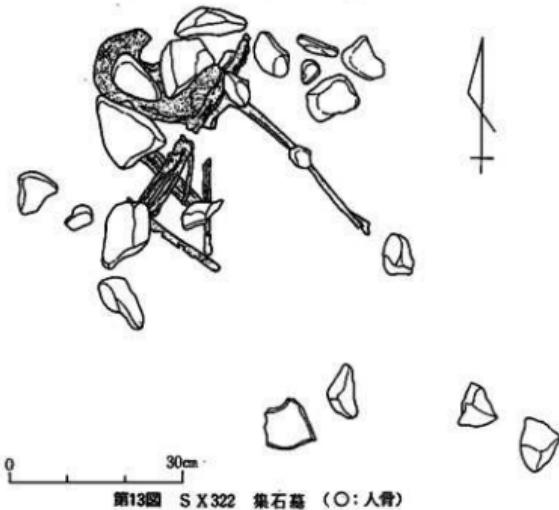
第12図 S X 15 集石墓

本例は、集石と墓壇の規模から判断して、小児の墓であった可能性がある。

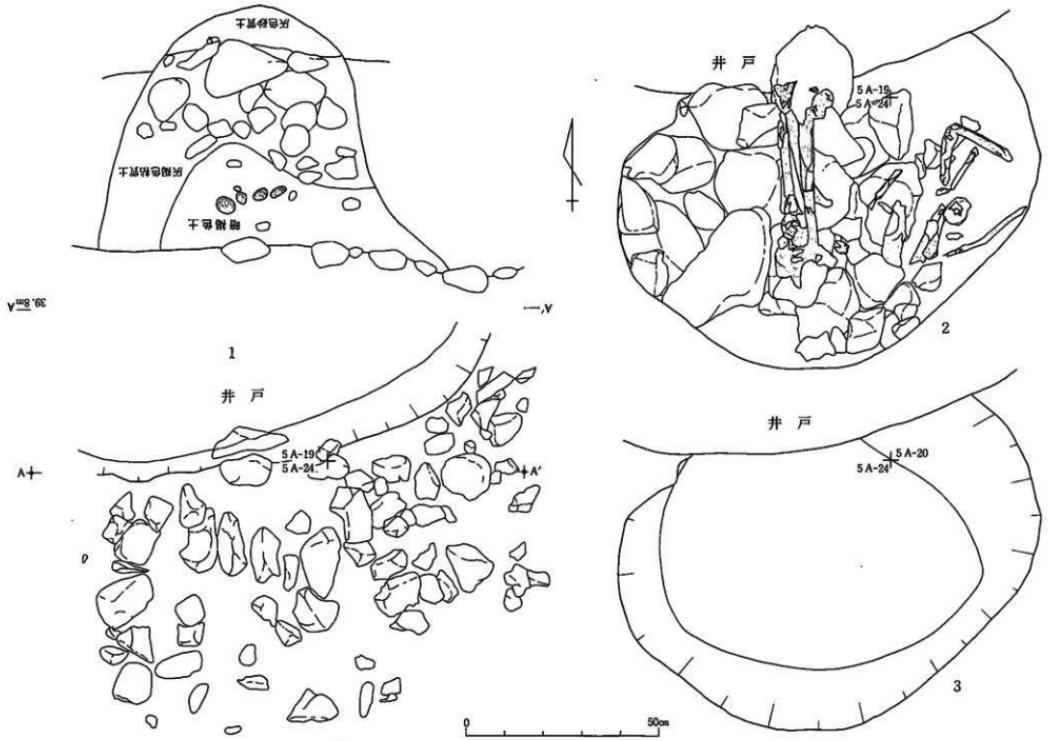
第三は集石のみ発見され、他に何等の遺構をも伴わないものである。この中に、墓壇は未確認であるが人骨が集石下から発見されているものも含んでいる。S X 118・119・322が人骨を伴うものである。

S X 322は、径1mの範囲に20点の礫が散っており、ようやく集石として認定しうるものである(第13図、図版第34一上)。礫の一部には骨片の付着も認められ、集石墓壇の可能性が強かったが、他の例に違わずやはり墓壇の確認はできなかつた。集石下の人骨は残りが悪く、頭骨、上・下肢骨の一部のみが検出された。

六文銭が副葬されていた。本例の集石と人骨が確実に伴うものと判断されるものであれば、未検出ながら土壇の存在は確実視されるべきものであり、第2の例の範疇で把えるべきかもしれない。



第13図 S X 322 集石墓 (○:人骨)



第11図 S X19 集石墓 人骨出土状態 1: 基壇上面集石検出状況及び断面図 2: 墓壇中段人骨・櫛出土状況 3: 墓壇完掘状況  
(◎: 人骨)

S X 118は、人骨を伴うとは言え集石を構成する礫の間に3~5cm位の断片が10点余混入している状態である。従って、集石下から人骨がまとまって出土するような通常の状態とは異なっており、むしろ再堆積を示唆するものである。集石の礫も広範囲に散在し、上下のレベル差も大きく、人骨に認められる傾向と符合する。

他のS X 13・14・16・20・21・22・35・49・174・337・338・389では、いずれも集石のみが発見されている。

この中で、S X 174のみは径20cmからそれ以上の礫で構成されており、また集石下が直ちに地山に接しているという点で、他と性格を異にする。広がりは、他と同様径60~70cm程である。他に類例がないことから判断すると、本来はS X 19と同じ構造であったものの、人骨を含む上半部が取り去られ、人骨下の大きな礫の部分のみ残された可能性もある。副葬品はない。

S X 337・338も若干他と様相を異なる。

S X 337は、集石中最大規模で、約150×50cmの中に100点以上の礫が密集している。集石上面が、他に較べ強く上方に突出した曲面を呈しており、下面は直ちに地山と接している。すなわち、礫は盛り上がった地山の上に乗っているだけで、下部構造の存在には全く否定的な在り方を示している。

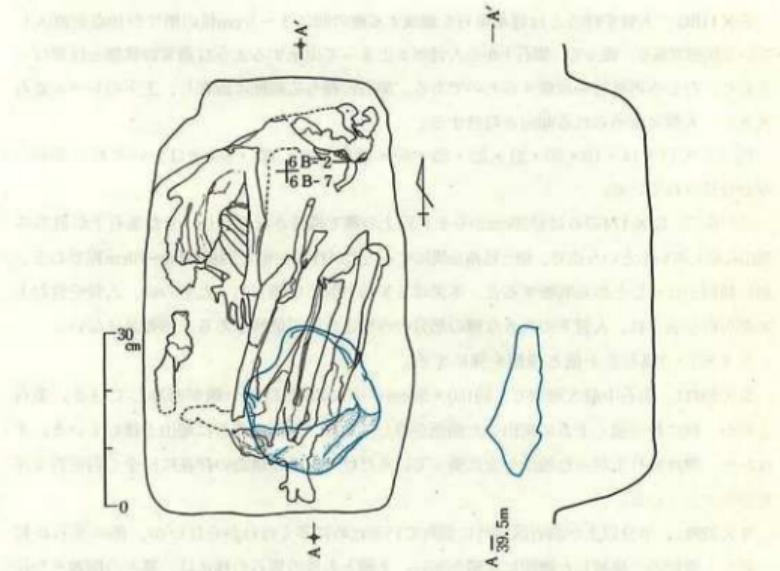
S X 338は、半分以上が調査区域外に隠れているために多くはわからないが、他の集石に較べ著しく重層的で集積した礫間に空隙が多い。2例とも他の集石の様には、墓との関連を想起し得ないものである。

残る9例の集石は、S X 14を除くと概して礫の密集度は低い。墓壙はおろか副葬品と思われる伴出遺物も皆無で、本来ならば墓としての確認そのものにも一考を要するものである。ここでは、人骨の出土範囲と集石の分布域がほぼ重なる事と、数例とは言え集石と人骨が伴出と判断される状態で認められた事から、拡大解釈して、集石のみの例についても一応墓の一形態として取り扱った。

## 2) 土 壙 墓

集石を伴わず、原位置を保って出土したと思われる人骨は全てこれに含めた。総数41体に上るが、S X 54・80・82・90・131・183・311・312・319・321・387の11例では墓壙が検出されている。墓壙を検出し得なかった例でも、埋葬行為の存在から判断して墓壙を穿ったことは確実視される。度重なる埋葬による土層搅乱の結果、墓壙覆土と周囲の土質が均質になり両者の識別が困難になったと考えられる。以下、墓壙が検出された墓全てと、未検出のものでも特徴的な例について、出土状態を詳述する。

S X 54は、墓壙内の覆土が周囲と明瞭な差を持つ唯一の例である(第14図、図版第35)。墓壙は南北に長く、75×45cmを測る。確認面が低かったために、深さはわからない。人骨は、底面からその上方45cm位の間で発見されている。頭位を北にし、体を東に向けた横臥屈葬である。抱くように折り曲げた右大腿骨の直上から、人骨に接して径25cm、厚さ10cm位で部分的に欠損



第14図 SX54 土壙墓人骨及び抱石

した砂岩の大きな円礫が発見されている。出土状態から、埋葬行程に関連する意図的な行為の一環とも考えられるが、他に類例を見ない。墓には石を伴うものが多く、本来墓壙上面にあつた石が墓壙内に落ちた状態で発掘される例も多い事を考慮すると、本例もこうした墓壙と一連のものと考えた方が妥当かとも思われる。副葬品の伴出はない。

SX80は、80×50cm程の南北に長い墓壙を持つ(第15図、図版第36一上)。他と同様、人骨が検出された後に墓壙が判明したため、深さはわからない。頭骨の位置と下肢骨の状態から、体を西へ向けた横臥屈葬と考えられるが、左上肢骨が脊椎骨の左に位置する点と、不明瞭ながら脊椎骨が北東から南西方向に延びているように認められる点から、座棺と同じように座った状態で埋葬されたものが、上からの土圧で変形した可能性も否定しきれない。副葬品は出



第15図 SX80 土壙墓

土していない。

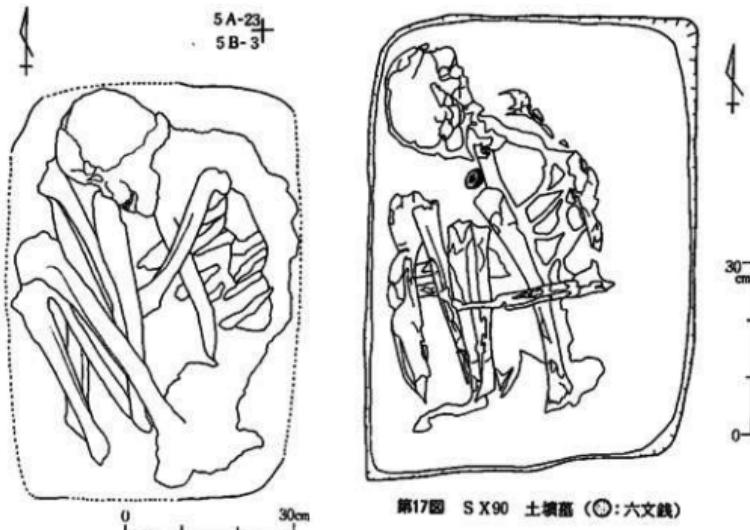
S X82は、今回の調査で出土した人骨中、最も完全な形を留めていたものの一つである(第16図、図版第36一上)。南北に長い、75×50cmの墓壙を持つ。頭位を北に、体を西に向かって横臥屈葬である。副葬品の出土はない。本人骨は、葬法の具体例を示すものとして、現地から切りとり、平安博物館において保管している。

S X90は、上層の集石墓 S X13を半割して墓壙の有無を調べる際に出土したものである(第17図、図版第37一下)。このため、他の土壙墓に較べ、早くから存在が知られており、墓壙の深さも少なくとも50cm以上あることがわかっている。平面形は80×55cmと南北に長い。遺体は、墓壙のやや西寄りに、頭を北に体を西に向かって横臥屈葬されていた。墓壙の東縁、中央底面近くからは、径10cm程の砂岩円礫が3個発見されている。丁度、人骨と墓壙東壁の遺物空白部に位置したことから考えて、埋葬時から意図的に置かれた石と考えたい。

副葬品としては、六文銭が頭骨のそばから出土しているのみである(第58図)。埋葬時には、紐を通して首に掛けられていたものと推察できる。6枚とも北宋銭である。

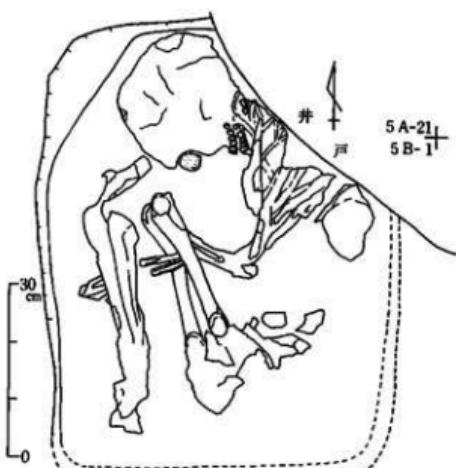
S X131は、井戸の断面観察で発見されたもので、この墓壙も50cm以上の深さを持つ。平面形は80×60cmと南北に長い。頭位を北に体を西に向かって横臥屈葬である。井戸に切られているのは、後頭部から頸骨・脊椎骨の一部にかけてである。

副葬品としては、六文銭と漆碗が出土している。出土位置は、丁度眼窩の瘤みと一致するが、やはり首に掛けられていたものと考えて矛盾しない。銭の名称がわかるのは、2点のみである。



第16図 S X82 土壙墓

第17図 S X90 土壙墓 (○:六文銭)

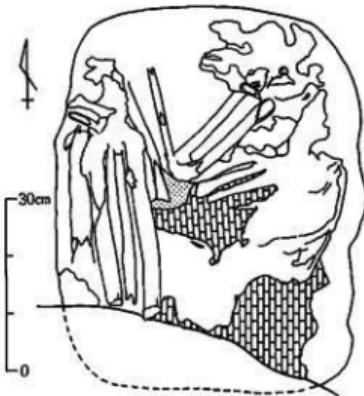


第18図 S X 131 土壙墓 (○:六文鏡)

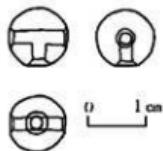
で、T字形に穿孔され3つの穴が口を開けている。3つの穴を比較すると、房の垂下する穴に較べ相対する2つの穴の口縁部に、より損耗が顕著である。珠数玉は頸骨の上から発見されており、近年の珠数を手首に掛ける葬法から推定できる遺存位置とは異なるようである。椀は胸

と折り曲げた膝の間から出土している。黒漆と赤漆が共伴するが、木質部は既に朽ち果てており、漆椀の製作技術・文様等について不明である。

本墓壙底からは、さらに遺体の下に敷いたと思われる敷物が発見されている。分布範囲は胸部から腰・下肢の部分に限られる。素材の分析はしていないが、後述するS X 399の例から考えて竹である可能性が高い。



第19図 S X 183 土壙墓 (○:椀 ○:玉 HH:敷物)



第20図 S X 183 出土珠数玉実測図

2枚の初跡年には100年程の開きがある(第18図、第58図、図版第38一上)。

S X 183は、南北に長い70×50cmの墓壙を持つ(第19図、図版第39)。深さはわからない。頭位を北にし体を西に向かした横臥屈葬である。頭骨と腰骨・下肢骨下端を欠く。腰骨と下肢骨下端は、井戸掘りの際に取り去られたものである。

副葬品としては、珠数玉と椀が出士している。珠数そのものはわからないが、三ツ穴の止め玉が1点出土している(第20図、図版第54—3)。X線回折の結果ガラス玉であることが判明した<sup>1)</sup>。玉は径9.5mmの球形

縦材と横材を交互に編み込んでいる。洛南の鳥羽離宮跡で、16世紀のものと思われる竹籠に遺体を入れて埋葬した墓壙が報告されている。図で比較する限り本遺跡のものと似ており、敷物と考えた編み物が籠であった可能性もある。

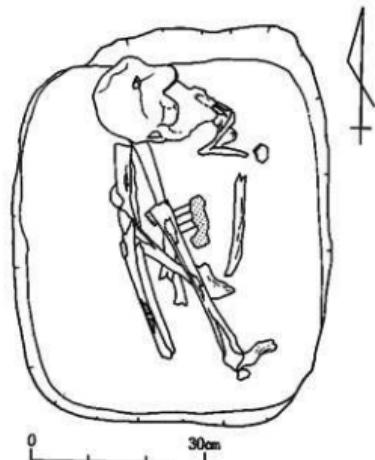
S X 311は、80×60cm程の墓壙を持つ(第21図、図版第40一下)。頭骨は機械による削平作業中に取られたと思われる。地山に掘られた墓壙であったために、平面形は比較的明瞭であったが、墓壙底近くまで削られていたために人骨の残りは必ずしも良くなかった。腰骨と下肢骨の位置から考えて、他と同様に頭位を北にした西向きの横臥屈葬と思われる。

副葬品としては漆椀と六文銭が出土している。

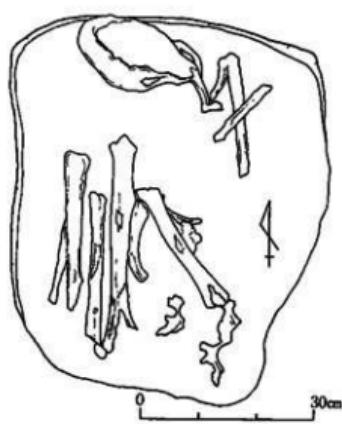
S X 312・319はともに65×55cm程の南北に長い墓壙を持つ(等22・23図、図版第41一上、42一上)。深さは、発見時で少なくとも20cm以上である。S X 312では、東・西の両側にやや広いゆとりがある。とともに



第21図 S X 311 土壙墓 (○: 梗)



第22図 S X 312 土壙墓 (○: 梗)



第23図 S X 319 土壙墓

頭位を北にした西向きの横臥屈葬である。S X 312では、漆椀が墓壙の丁度中央、胸と膝の間から出土している。

S X 321・387では他と違いほぼ円形の墓壙が認められた。

S X 321は、径50cm程の墓壙を持つ(第24図、図版第42一下)。墓壙と骨の位置関係を見ると、頭骨は北縁に、折り曲げた下肢骨は西縁に、上腕骨は東縁にあり中央部は空白である。脊椎骨は、北東一南西方向に延びていたと思われる。この骨の分布から推察すると、当初円形と考えた墓壙も、主軸を45°程東へ振った長方形のものである可能性もある。墓壙中央には漆椀が副葬されている。

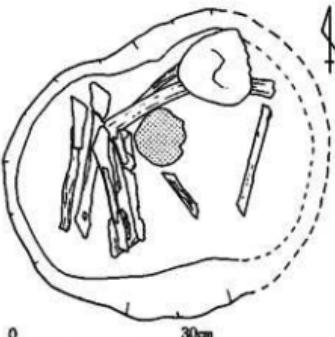
S X 387は、座った状態で埋葬されたと考えてほぼ間違いない例である(第25図、図版第49一上)。墓壙底面は、径約50cmのほぼ円形を呈する。墓壙は、14世紀前半のものと判断されるS K 381の覆土に穿たれている。S K 381東半の覆土中層部には、径10cm程の躰が一面に分布するが、丁度墓壙の範囲だけはこれが取り去られている。木質が未発見であるため座墊の使用については定かでない。

人骨の出土状態を見ると、多くの骨が立って発見されている。特に墓壙西縁部に分布する膝を曲げた状態の下肢骨は、膝頭の部分が最も高く腰骨との比高は20~25cmを測る。まさに埋葬されたままの出土状態を示していると言える。本来はこの上部にあったと思われる頭骨は、下肢骨の東に落し顎面を下に向かた状態で発見されている。上肢骨の一部が墓壙東縁で出土している。

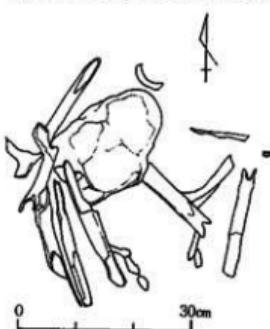
副葬品として、東端から六文銭が出土している。4枚しか発見されていないが、いずれも北宋錢である。最も古い皇宋通宝の初鋤が1039年、新しい熙寧元宝が1068年である(第71図、図版第70)。

以上の他に墓壙は不分明ながら、人骨がまとまって出土しているものは合計30体に上る。このうち六文銭が伴出したのは10体、漆椀は3体である。六文銭は、全てが6枚描っている訳ではなく、むしろ6枚以下の場合が多い。出土人骨にも後世の攢乱や新しい墓壙の掘削等により欠損したものが多くある。以下、S X 140・324・326・332・356・399の6例について詳述する。

S X 140・324は、いずれも残存骨の華奢なことから



第24図 S X 321 土壙墓 (○: 梵)



第25図 S X 387 集石墓 (○: 六文銭)

小児骨と考えられたものである。

S X 140は頭骨以外には、かすかに骨の痕跡を留めるのみである(第26図、図版第40—上)。それでも、頭骨と歯の出土位置から判断すると、西向きの横臥屈葬であったと考えられる。六文銭と漆碗が副葬されていた。六文銭は5枚で、全て北宋銭である。最も古い天聖元宝(初鋤1023年)が3枚まとめて出土している(第59図、図版第60)。碗には、黒漆に赤漆の斑点文様が入っていた。碗を六文銭にかぶせたような状態で出土している。



第26図 S X 140 土壙墓  
(◎:六文銭 ○:碗)



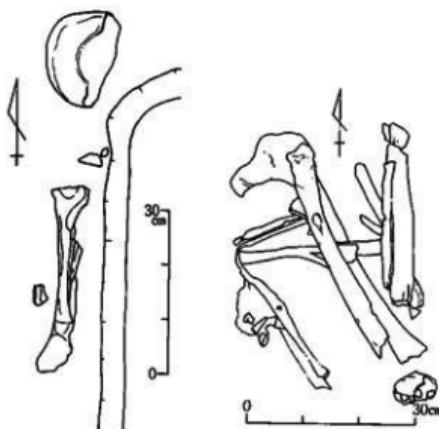
第27図 S X 324 土壙墓  
(○:六文銭)

S X 324も非常に残りが悪く、20×30cm位の範囲に骨片が分布すると言う出土状態である(第27図、図版第43—下)。副葬品として六文銭が出土している。6枚とも異なる貨幣で、最古の開元通宝(初鋤621年)から最新の永楽通宝(初鋤1408年)まで初鋤年代に787年の開きがある(第64図、図版第70)。永楽通宝は今回の調査で発見された最も新しい貨幣で、この墓地の下限を考える一つの指標となる。

S X 326は、江戸時代の造構であるS K 343によって、体半分が削り取られている(第28図、図版第45—上)。他の人骨から類推すると、頭骨下半から頸椎・脊椎・骨盤・大腿骨・上肢骨が取り去られたと考えられる。少なくとも江戸時代になると、当地が墓所として意識されなくなっていることをよく示している。

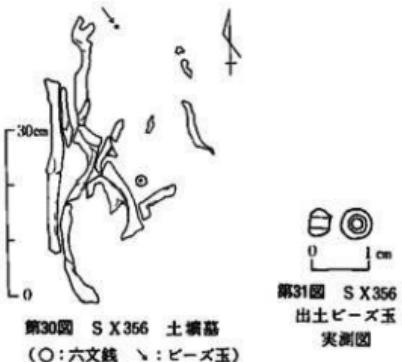
S X 332は、今回の調査で出土した人骨のうち、唯一頭位を南にして発見されている例である(第29図、図版第45—下)。しかし本例では、左右の下肢と骨盤が東西に別れて分布し、上腕も東西に聞いた状態で発見されている。こうした出土状態から推察すると、頭位を南にした横臥屈葬とするよりも、むしろ本来は坐位で埋葬されたものが南に倒れ込んだ状態で発見されたと考えた方が妥当のようにも考えられる。副葬品はない。

S X 356は、非常に残りの悪い人骨である(第30図、図版第46—上)。上・下肢骨の一部が残っていると考えられる。本人骨の直上



第28図 S X 326 土壙墓

第29図 S X 332 土壙墓

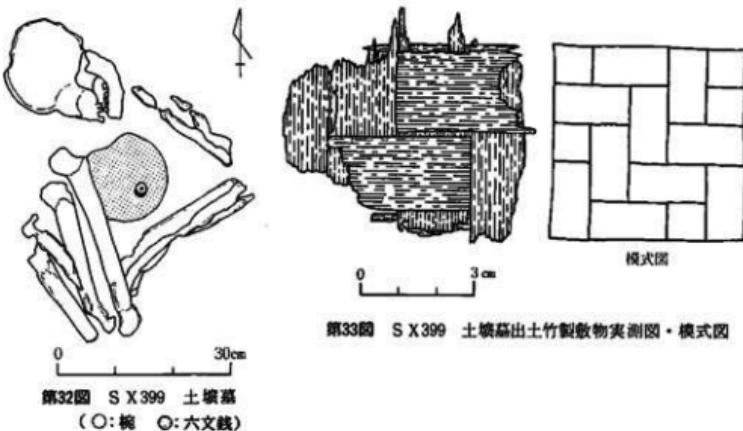


第31図 S X 356  
出土ビーズ玉  
実測図

たと考えることができる。青緑色のガラス製と考えられる。六文銭は5枚出土している。最古の祥符通宝(初鑄1009年)と最新の淳熙元宝(初鑄1174年)との間には165年の開きがある。いずれも北宋錢である(第67図、図版第70)。

S X 399も、他の人骨同様、椎骨を除くと比較的よく残っている(第32図、図版第49一下)。頭位を北にした西向きの横臥屈葬である。胸と膝の間に漆椀と六文銭が副葬されている。椀には黒と赤の漆が利用されており、木質部も一部残っている。他と同様、六文銭にかぶせるような出土状況を示している。六文銭には開元通宝(初鑄621年)が3枚含まれるが、他はいずれも北宋錢である(第72図)。

六文銭の下、20cm程の範囲から竹で編んだ敷物が出土している(第33図、図版第54—1・2)。剥がす時にバリバリと音がする程に残りが良いが、六文銭から周囲に離れるに従って急速に腐朽消滅する。これは六文銭についた綠青の持つ殺菌力に由来する現象と思われる。使用



には江戸時代の室が、東方に接してビルの基礎が打たれており、それらによって搅乱を受けたと思われる。ここからはビーズ玉1個と六文銭が伴出している。ビーズ玉は、径5mm・厚さ3.5mmで、中央に径1.8mm程度の真直な穴が穿たれている(第31図、図版第54—4)。側面図でわかるように、穴の上端が歪んでおり十分な整形は為されていない。この歪みは、穴の周囲を取り巻くように残っており、これを積極的に評価すると、玉を作った段階にはすでに穴も穿たれてい

たと考えることができる。青緑色のガラス製と考えられる。六文銭は5枚出土している。最古の祥符通宝(初鑄1009年)と最新の淳熙元宝(初鑄1174年)との間には165年の開きがある。いずれも北宋錢である(第67図、図版第70)。

S X 399も、他の人骨同様、椎骨を除くと比較的よく残っている(第32図、図版第49一下)。頭位を北にした西向きの横臥屈葬である。胸と膝の間に漆椀と六文銭が副葬されている。椀には黒と赤の漆が利用されており、木質部も一部残っている。他と同様、六文銭にかぶせるような出土状況を示している。六文銭には開元通宝(初鑄621年)が3枚含まれるが、他はいずれも北宋錢である(第72図)。

六文銭の下、20cm程の範囲から竹で編んだ敷物が出土している(第33図、図版第54—1・2)。剥がす時にバリバリと音がする程に残りが良いが、六文銭から周囲に離れるに従って急速に腐朽消滅する。これは六文銭についた綠青の持つ殺菌力に由来する現象と思われる。使用

第33図 S X 399 土壙墓出土竹製敷物実測図・模式図

している竹材は、巾18~20mm、厚さ0.1~0.3mm位に削り込んだものである。一部には竹の表皮を留めており、最も硬い部分を利用していることがよくわかる。この竹材を1段ずつずらしながら、2段跳びで表裏に編み込んでいる。

### 3) 火葬墓

焼骨の出土が確認されたのはS X 372のみである(第34図、図版第50一上)。親指の頭位、約3×2cmの小片であるため、部位その他詳細はわからない。

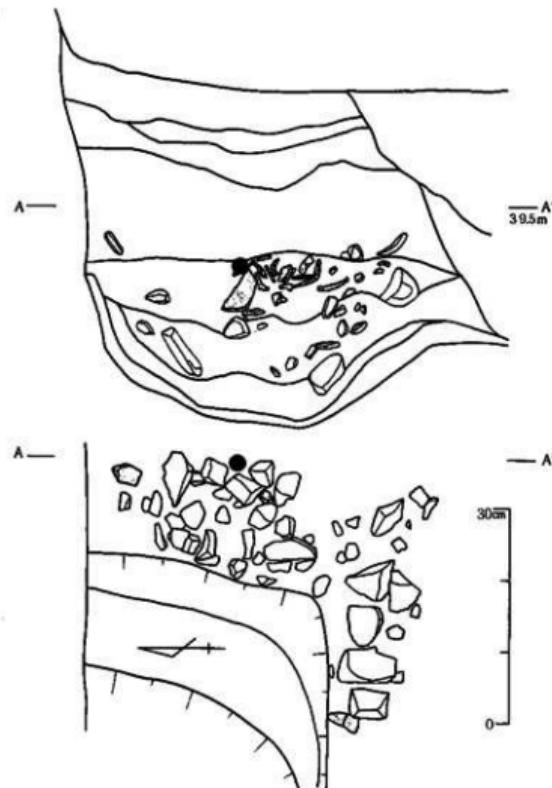
墓の構造は、土葬墓とは大きく異なるようである。掘り込み面は擾乱により定かでないが、少なくとも断面図の海拔39.3mライン以深は未擾乱である。この土層断面から判断すると、掘り塗めた墓壙の底にまず粘性の強い漆黒色の土を敷く。次いで、径2~5cmの小礫を多く含む砂質土を詰め、径10cm

以上の礫を集石状に重ねる。その上に接して、羽釜を藏骨器として利用し、焼骨を安置したようである。羽釜を含む埋土も、砂をかなり含んでいる。

羽釜と人骨の関係について、ここでも確実に焼骨が羽釜に埋納された状態で出土した訳ではない。しかし、破損した羽釜に接して焼骨が出土している点と、京都周辺の墓と思われる羽釜の出土状態を勘案すると、本来は焼骨は羽釜に納められていたと考えて大過ないようと思われる。

### 4) 再堆積の人骨

度々述べたように、本遺跡に限らず京城は



第34図 S X 372 火葬墓 (○:土器 ●:焼骨)

継続的な人間の居住のために、後世の擾乱行為の非常に激しい所である。重複して墓を営む場合はもとより、当地が墓所としての機能を失った後には、より擾乱の機会が多くなる。江戸時代にはかつての墓地は完全に忘れられ、全く無頓着に芥溜・井戸を穿ち、室を建築している。

これらのために避難した人骨が、38ヶ所から発見されている。S K349は芥溜であるが、ここからは流れ込んだ人骨が、10点以上出土している。またS D45の溝やS E374の井戸表層からは、頭骨が単独で発見されている(図版第50一下)。この他、ほとんどのものが骨格のわずかな部分のみで構成されている。そのような中にあっても、S X81・313・320・336の4体からは副葬品と思われる六文銭が出土している。S X81は、径30cm位の範囲に团塊状に骨が集積して検出された。S X313は近世の散石の間に挟まれて出土しており、上肢骨の一部のみである。S X320・336はいずれも近世の芥溜に大部分が切り取られており、残りがあまりに不完全であるために原位置を保つか否かの判定が難しいものである。副葬品の出土という点では、人骨が原位置を保つと考えた方が妥当のようであるが、あまりに入骨の出土部位が限定されるために、ここでは擾乱されたものとして取り扱った。ほぼ全身骨格を残す墓に較べ、再堆積とした人骨の分布が広がることからも、これを擾乱とすることが首肯される。再堆積とした人骨の多くが前項まで述べた墓と分布域が重なってはいるが、一部は確実に南方に広がっているのである。

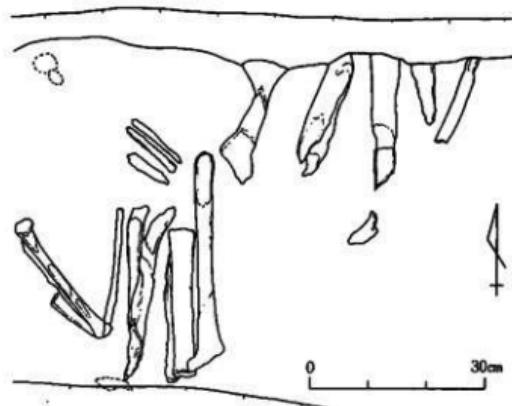
### 5) 墓域

今回の発掘調査範囲から、最終的には合計98単位の人骨・集石が出土した。既に述べたように、人骨にはほぼ全身骨格を留めるものから、断片が発見されたに止まるものまである。また、集石の様に直接的に埋葬との関係を問うことが難しい材料についても、出土状況から墓の一形態と判断した。次に、これらの分布範囲と関連遺構の検討から、墓所の範囲を考えてみたい。

集石はA区に13基と多く、C区からは4基発見されたのみである。疊の密集するS X14・15・19・20は、A区北半にまとまって分布する。疊の密度度が低いS X13・16・21・22・35・49・174・322・389も、A区からC区の北半に分布する。A区では、集石の有無という点から見るならば、調査区中央部を東西に走るS D45を南限にしている。概してS D45に近い集石は密集度が低い。東・西・北方へは調査区の壁に近づくと、集石は分布しなくなる。C区ではA区より若干北寄りに分布するが、数が少ないために一定の傾向は見出せない。A区で南方に隔れて分布するS X118と、C区の南半に分布するS X337・338が、他の集石と異質な属性を備えている点は前述した通りである。結果として、S X118は集石・人骨とも再堆積したもの、S X337・338は成因はわからないが墓としての集石とは分離して考えたい。

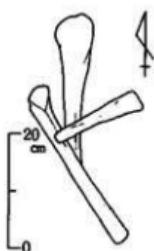
土壤層の分布も集石と似るが、やや北に片寄るようである。最も南に位置するのがS X54で、6B-6・7グリッドにかけて分布する。集石の分布の南限を画するかに見えたS D45から、2m余り北に寄っている。全体としては、グリッドA・B列境から南に2m程寄ったラインから北と見ることができる。東はやはりS X54が限界となっている。北は調査区北壁の中にまで

人骨が入っており、さらに墓域は拡がると思われる。西方はC区に続くが、A・C区境で分布が大幅に減少する。これは近世の芥滴であるSK 327・343に大きく削り取られているためである。この搅乱にもかかわらず、巾50~100cm程に残された土手上からSX 320や372が検出されているということは、逆にそれだけ多くの人骨がかつては埋もれていたことを示唆すると



第36図 SX 386・370 出土人骨

考えられる。C区でも調査区北壁に滅込んで発見された人骨が数体(第36図)あり、墓域の北方への拡がりを彷彿とさせる。西方への広がりは、3A17・22区を限界とする。しかし、3A16・21区以西は、近世以降の搅乱が広く入っており、土壤基の欠陥がどの程度墓域の広がりと対応するか判断が難しい。南方へは、グリッドA・B列の境界がほぼ分布の限界となっている。南限がA区に較べ2m程北に寄っている。



第37図 SX 344 二次堆積の人骨

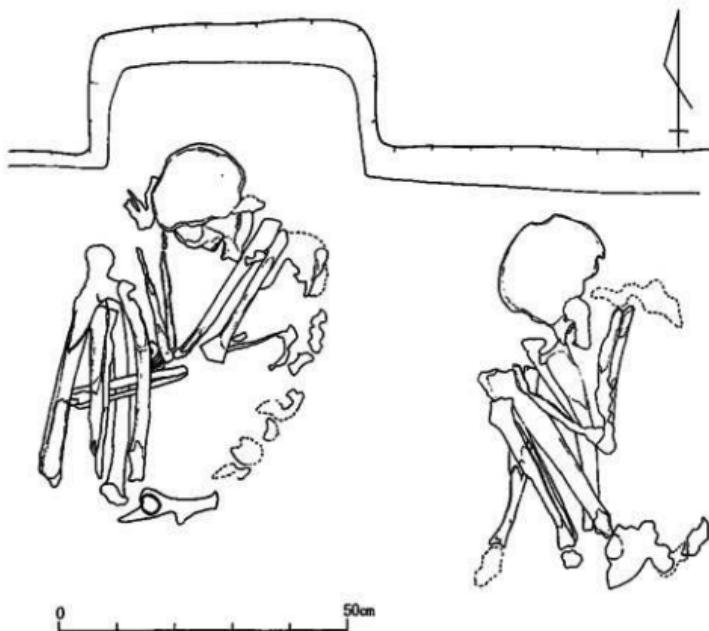
再堆積と考えた人骨は、土壤基に較べ分布範囲が格段に広くなる。多くの例で土壤基と分布域が重なるが、遠く離れるものが数例ある。A区ではSD45の頭骨とSX 118の人骨片がそれである。SX 118は、土壤基分布域の南縁からさらに12m以上南に離れている。C区では、SX 300・334(第37図)・348等が土壤基群と遠く離れており、5~10m余りを測る。またSK 349中から発見された10点以上の骨は、土堆中への流れ込みを示す好例である。

以上、墓の形態別分布と人骨の分布域を個別に見て来た。これらを総合するに当って、特に問題となるのは、A区における集石墓と土壤基の分布のずれであろう。両者の整合しない所に分布する集石が、他に較べ礫の密集度が低い点も留意される。しかしいずれにしても、確かに集石墓か単なる礫の集中かの決定的要素には欠けている。そこで、より厳密に墓域を推定しようとする立場から、ここでは土壤基の分布域外に出るSX 35・49集石を除いて考えてみたい。

すると墓域の東縁は6A22、6B2・7グリッドになる。このすぐ東側には調査区の北東壁が迫っているが、SX 54人骨と壁の間約3mに搅乱は少ない。もしその間に他と同じ密度で埋葬が行なわれたとすれば、何等かの手かがりが残されているはずである。西縁は、前述した

如く不確定要素を含みながらも、3 A17・22グリッドと考えて大過ないであろう。南縁は6 B7と3 A22グリッドを結んだ線とはば符合すると思われる。北方へは調査区外に延びていることが確実である。以上から、当地がかつて東西30m余りの幅を持った墓地であったことが推定されるのである。

この墓地が何等かの構築物で周囲から隔絶した状態にあったのかどうかはわからない。しかし少なくとも、ここを墓地として利用しようとする人々にとっては、墓域はかなり限定されたものとして意識されていたようである。これは何組かの重複したり非常に近接して出土した人骨(第38図、図版第44下、47下)の、一つの解釈である。もちろん、ここがおそらく100年以上にわたって墓地として利用されていたであろう事や、大多数が副葬品をほとんど持たない庶民の墓と考えられる事とも関連する可能性がある。



第38図 S X315(西)・325(東) 土壙墓 (○:六文銭)

#### 6) 埋葬形態

墓の形態については、構造的特徴に従って集石墓・土壙墓・火葬墓に分類記載したので、ここでは遺体の処し方、副葬品についてのまとめをしておく。

埋葬姿勢は、圧倒的多数が頭位を北にし、体を西に向かって横臥屈葬である。これらの人骨では、ほとんどが両腕で膝を抱える様にしている。確實にこの枠から外れるのは、S X 332と87の2例のみである。S X 332は、通常と異なり坐位で埋葬された可能性が高い。S X 387は素掘りの穴に座った状態で埋葬されている。座棺を利用した埋葬から棺を取り去った状態を想像すれば良い。

埋葬に当たっての器とでも言うべき棺は、全く見つかっていない。墓域全体からは、10本に余る釘の出土が認められるが、いずれも墓蓋、人骨と密接な係わりを持った状態で発見されてもいる。このため、現段階では棺の使用については否定的である。

棺に代わる可能性のあるものとして、S X 183・399の二ヶ所から竹で編んだ敷物が出土している。S X 183で600㎠、S X 399で20㎠程と非常に限られた検出状態であるため多くはわからないが、いずれの場合も少なくとも人骨の下から出土したと判断される。類例は鳥羽離宮跡にあり3例発見されている。鳥羽離宮跡の例では、竹製編物の残りは良いが、逆に人骨はほとんど発見されていない。それによると、竹製編物は一部折り重なって発見されており、何かを包み込む様に埋められていた可能性が高い。従って敷物と考えるよりも、むしろ一種の籠の可能性を考えた方が妥当である。この類推が当を得たものであるとすれば、本遺跡での人骨の出土状態との検討から、一部では棺の様に竹籠で亡骸を包んで埋葬したことも考えられよう。

副葬品では六文銭と漆碗が一般的である。六文銭は19ヶ所、漆碗は8ヶ所から出土している。S X 140の六文銭には、一部に布の痕跡が残っており、布袋に入れられて埋納された可能性がある。六文銭・漆碗の両者が共伴するのは4ヶ所である。共伴例のうち、S X 140・311・399の3ヶ所では、六文銭の上に漆碗を被せた状態で出土している。埋葬位置は、共伴例・六文銭・漆碗を問わず、胸と膝の間がほとんどを占める。六文銭には、時として首や頭骨のそばに位置するものがある。遊離したものを除けば、六文銭は例外なく複数枚が重なって出土しており、S X 140の様に袋に入れるか穴に紐を通して納められたと考えられる。また、頭骨や首のそばから、出土する例については、紐で首に掛けていた可能性も考えられよう。

これらの他には珠数玉とビーズ玉が各1点出土している。

### 7) その他・犬

A区5B3・4グリッドから、犬の骨が一体発見されている(第35図、図版第52一下)。頭を北にして、脊椎骨は北東—南西の方向に延びている。体は西を向いている。S K 188土壇の東壁に貼り付いたように、壁の傾斜に添って東を高く西を低くして出土している。

S K 188は13世紀のもので、この上層には後世の墓域が広がっているが、人間のための墓所に犬を埋葬する可能性は乏しかろう。またS K 188の覆土にも、犬を埋め



第35図 S X 188 犬の骨

第1章 埋葬形態別出土骨器相對表

	96	頭蓋骨、寰骨、四肢長骨 椎骨、肋骨、右上腕骨、尺骨、左右掌骨	人	坐	左下側臥屈位 右下側臥屈位	北	六文鏡・楕	○
	131	全身骨格	人	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡・楕	○
	138	ほぼ全身骨格	人	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡・楕	○
	139	頭蓋の大部分と下肢長骨なし	人	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡・楕	○
	140	頭蓋、脊椎、肋骨、大顎骨、肥骨	人	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡・楕	○
	183	ほぼ全身骨格	人	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡・楕	○
	311	頭蓋・肺骨を除く全身骨格	人	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡・楕	○
	312	ほぼ全身骨格	人	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡・楕	○
	314	左右下肢骨	人	坐	右下側臥屈位	北?	六文鏡	○
	315	全身骨格	人	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡	○
	318	頭蓋、左上腕骨、左右下肢骨	人	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡	○
	319	頭蓋、四肢長骨	人	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡	○
	321	頭蓋、四肢長骨	人	坐	右下側臥屈位?	北	六文鏡	○
	324	上腕骨切片						
	325	肺骨を除くほぼ全身骨格	女?	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡	○
	326	脛頭蓋右半分、胸骨、右下腕骨	男?	坐	右下側臥屈位?	北	六文鏡	○
	327	頭蓋、左上肢骨、左右下肢骨	男?	坐	右下側臥屈位?	北	六文鏡	○
	350	肋骨、寰骨、四肢長骨	女?	坐	右下側臥屈位?	北	六文鏡	○
	351	頭蓋、右上肢骨、左右下肢骨	男?	坐	右下側臥屈位?	北	六文鏡	○
	356	脊椎、右上肢長骨、左下肢長骨	女?	坐	右下側臥屈位?	北	六文鏡	○
	359	ほぼ全身骨格	男?	坐	右下側臥屈位?	北?	六文鏡	○
	360	頭蓋、上腕骨、下肢骨	男?	坐	右下側臥屈位?	北	六文鏡	○
	362	下肢骨	男?	坐	右下側臥屈位?	北	六文鏡	○
	369	頭蓋、胸椎、肋骨、肩甲骨、左右上肢骨	男	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡	○
	370	左上肢長骨、左対骨、左右下肢長骨	女?	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡	○
	376	ほぼ全身骨格	男?	坐	右下側臥屈位	北?	六文鏡	○
	384	頭蓋、肋骨、四肢長骨	男?	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡	○
	386	左右下肢骨	男	坐	右下側臥屈位	北	六文鏡	○
	387	ほぼ全身骨格	男	坐	右下側臥屈位	西	六文鏡	○
	390	全身骨格	男	坐	右下側臥屈位	西	六文鏡	○

布片出土

珠數玉・竹製飾物出土

赤漆出土、楕か?

六文鏡

ヒース玉出土

埋葬 様式	No.	人骨			性	年齢 <sup>2)</sup>	姿勢	頭位	副葬品	墓 主 <sup>3)</sup>	備 考
		残存部	部位	性							
土壙窓	399 400	はね全身骨格 頭蓋、四肢長骨	S D 45 頭蓋骨破片と齒4本 頭蓋骨、胸椎、肋骨、左上腕骨 大腸骨破片	男?	女?	老 年	右下側臥屈位	北	六文鏡・鏡	竹製敷物出土	
火葬窓	S X 372	骨片	S X 81 頭蓋骨破片 大腸骨破片	男	成 人	人 人	右下側臥屈位	北	六文鏡		
	87	頭蓋骨破片	89	頭蓋骨破片	成 人	人 人					
	93	頭蓋骨、齒、長骨	95	頭蓋骨、齒、長骨	成 人	兒 人					
	132	大腸骨破片	132	大腸骨破片	幼 成	兒 人					
	185	肋骨、鎖骨、左上腕骨、左脛骨	185	肋骨、鎖骨、左上腕骨、左脛骨	幼 成	散乱					
	190		191		成 人	人 人					
	197		197		成 人	年					
	300	頭蓋片、左大腸骨 上腕骨、左右大腸骨 骨粉	301	頭蓋片、左大腸骨 上腕骨、左右大腸骨 骨粉	成 人	年					
	302		303		成 人	年					
	310		310		成 人	年					
	313	上肢長骨破片	313	上肢長骨破片	成 人	年					
	316	右側頸骨、上顎骨、下顎骨	316	右側頸骨、上顎骨、下顎骨	成 人	年					
	317		317		成 人	年					
	320	上腕骨、下肢長骨 頭蓋右半分	320	上腕骨、下肢長骨 頭蓋右半分	成 人	年					
	323		323		成 人	年					
	334	大腸骨	334	大腸骨	成 人	年					
	335	右頭頂骨破片	335	右頭頂骨破片	成 人	年					
	336	左上腕骨、右大腸骨破片	336	左上腕骨、右大腸骨破片	成 人	年					

再 堆 積 の 人 骨	348	大腿骨骨体破片							
	SK 349	頭蓋、上腕骨、大腸骨、脛骨、腓骨							
	S X 352	下腕骨、大腸骨、脛骨							
	355	下肢骨							
	357	下肢骨							
	358	頭蓋の左半分							
	377	脛頭蓋							
	378	頭蓋、四肢長骨							
	379	頭蓋骨小破片							
	380								
動物骨	383	上腕骨破片							
	398								
S X 188		大頭骨一體分							
S X 393									

- 1) 人骨に関する所見：人骨の表面には特徴色を呈する塗飾紋が付着していて、これらの骨が長期間、水分の多い土中に埋蔵されていたことがわかる。このような埋藏状況は、人骨の保存に役立ったと思われるが、一方ではそのために骨は伸しつぶされてしまいし、骨の計測・觀察はもちろん部位の同定さえ困難なものが多く、また骨質は脆弱で、発掘時にかなり個形をとどめていた骨でも、取り上げ後は崩壊して細片になるなど、保存状態は極めて悪い。
- 性・年齢の判定に有効な部位が残存するものがほとんどないので、2～3の例外を除き性判定は四肢長骨もしくは頭蓋骨によっては年齢推定では徹底程度を基準として行なったので、それらの信頼度はそれほど高いとはいえない。(京都大学理学部自然人類学教室・池田次郎教授による。)
- 2) ~6才 = 幼児、6~12才 = 小児、12~20才 = 若年、20~40才 = 壮年、40~60才 = 老年、60才以上 = 成人。
- 3) 頭蓋骨の丸印は、基盤の右側ではなく、基盤を検出し得たか否かを示している。

るための特別の掘り込みは検出されていない。さらに人骨群に較べ犬は一段深い位置から発見されている。これら発見された時の骨の位置や、周囲の状況を勘案すると、この犬は土壤に落ちて死んだか、屍を土壤に捨てられたか、いずれにしても人為的に埋葬されたものではないと判断される。

## 註

- 分析は、上田健夫氏(花園大学教授)に依頼し、京都大学工学部資源工学教室のNorelco X-ray diffractometer を利用させていただいた。

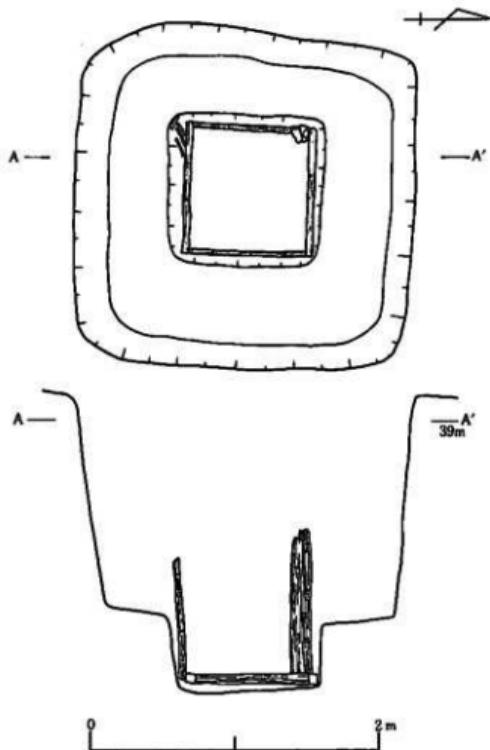
## 第3節 その他の遺構・遺物

## 1) 井 戸

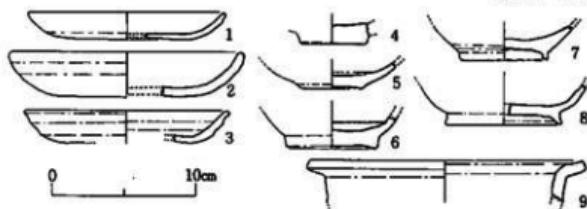
S E 196(第39図、図版第7-1上) A区の北部で検出された。掘り方は隅丸の方形で、検出した面での規模は南北2.4m、東西2.3mであった。木材を用いているか、残存状況は極めて悪く、桿木はわずかに最下段を残すのみであった。横桿木の長さは周辺とも90cmで幅6cm、厚さ4~5cm程度であった。縦板は東北と東南の隅の部分に残存していただけで、最も長く残っていたもので1.1mであった。

出土遺物には土師皿、青磁、土鍋等があり土器の形態からこの井戸の埋没年代を12世紀代に求めることが出来る(第40図)。

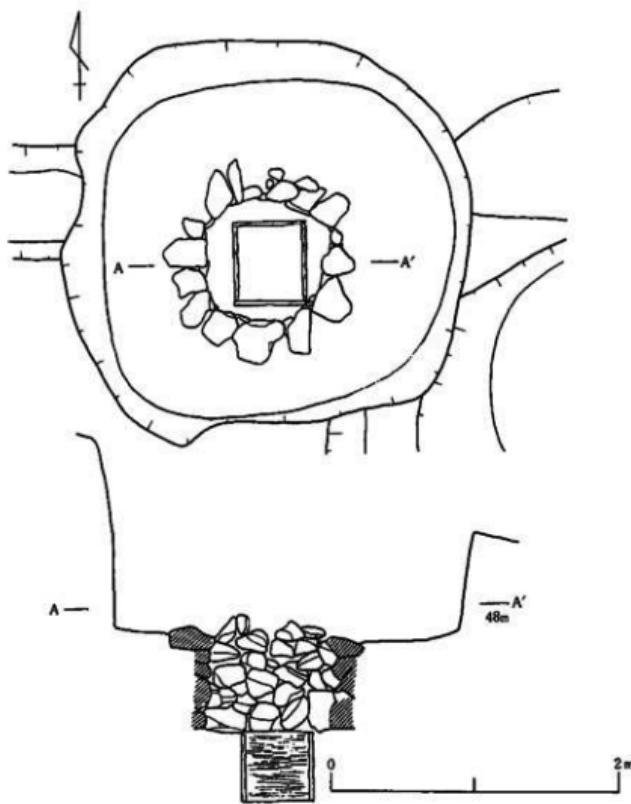
S E 374(第41図、図版第27) C区の東側で検出された。掘り方はほぼ円形を



第39図 S E 196 井戸



第40図 SE196 出土遺物実測図



第41図 SE 374 井戸

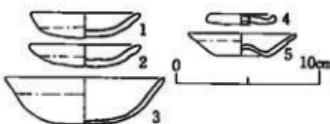
呈し直徑約2.7mであった。掘り方の検出面からほぼ1.5m下方からは、井筒の石組が残存していた。石組に用いた石材は20~25cm角ほどの比較的大きな石が多く、これをほぼ円形に数段重ねた状況が確認されている。井戸の最下部は、1枚板を4枚、横位に四方に廻らせたもので、

深さは約50cmであった。この板の組み合わせには、特別な加工は施されていなかった。

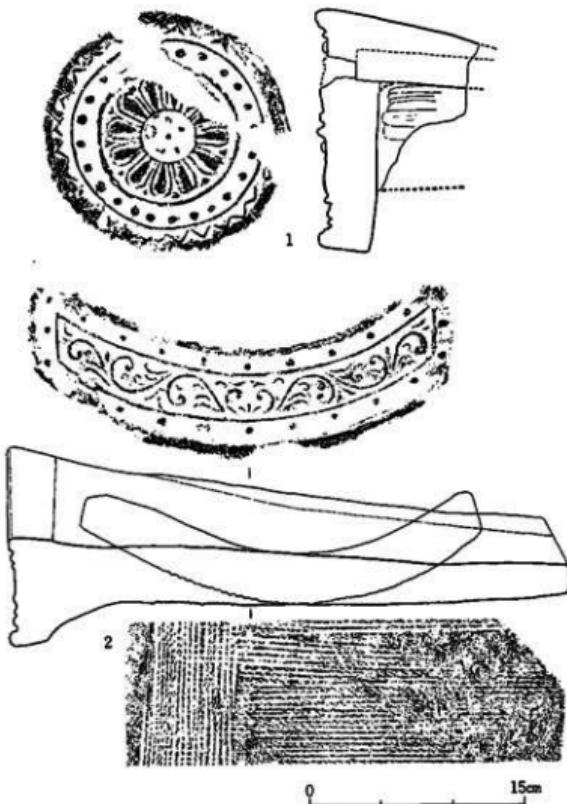
出土した遺物は極めて少ないが、白色系の土師皿、ヘソ皿、小皿、コースター型の皿などがあり、14世紀中葉～後半の年代を考えることが出来る（第42図）。

## 2) 瓦類

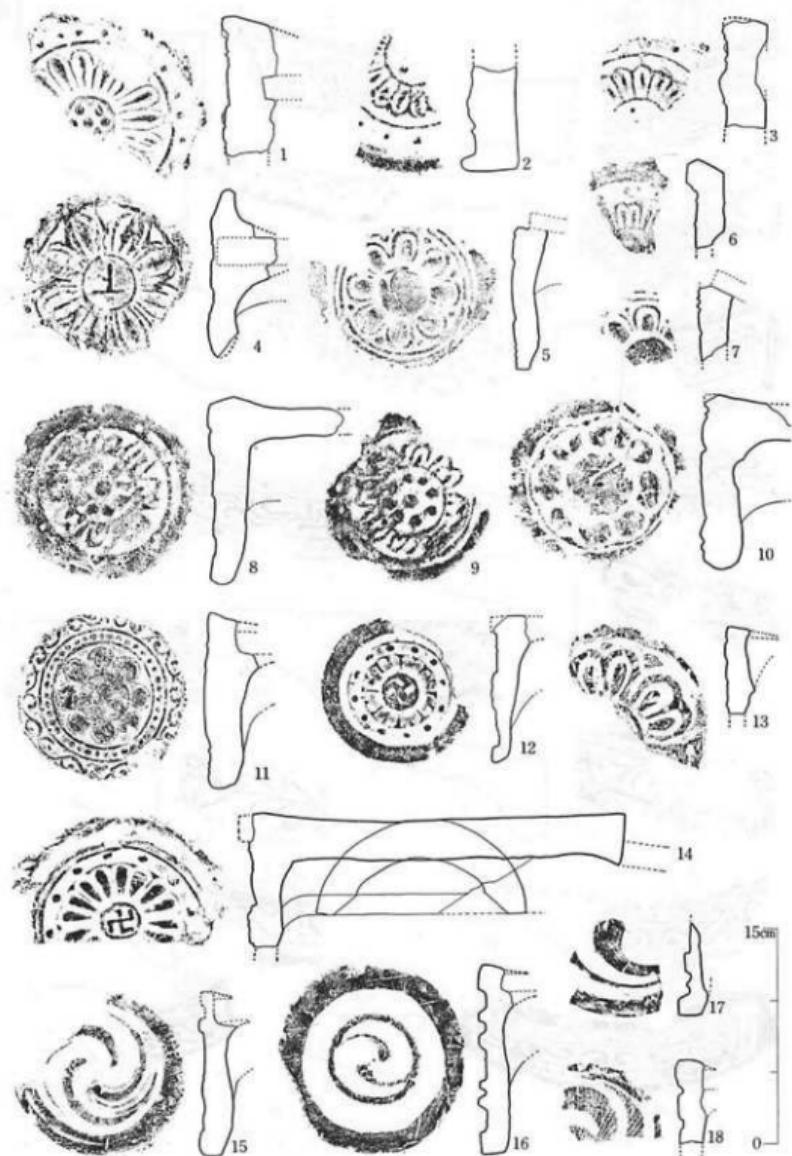
S K 85からは奈良時代の軒丸瓦・軒平瓦のセットが、他の若干の平瓦片と共に出土した（第43図）。



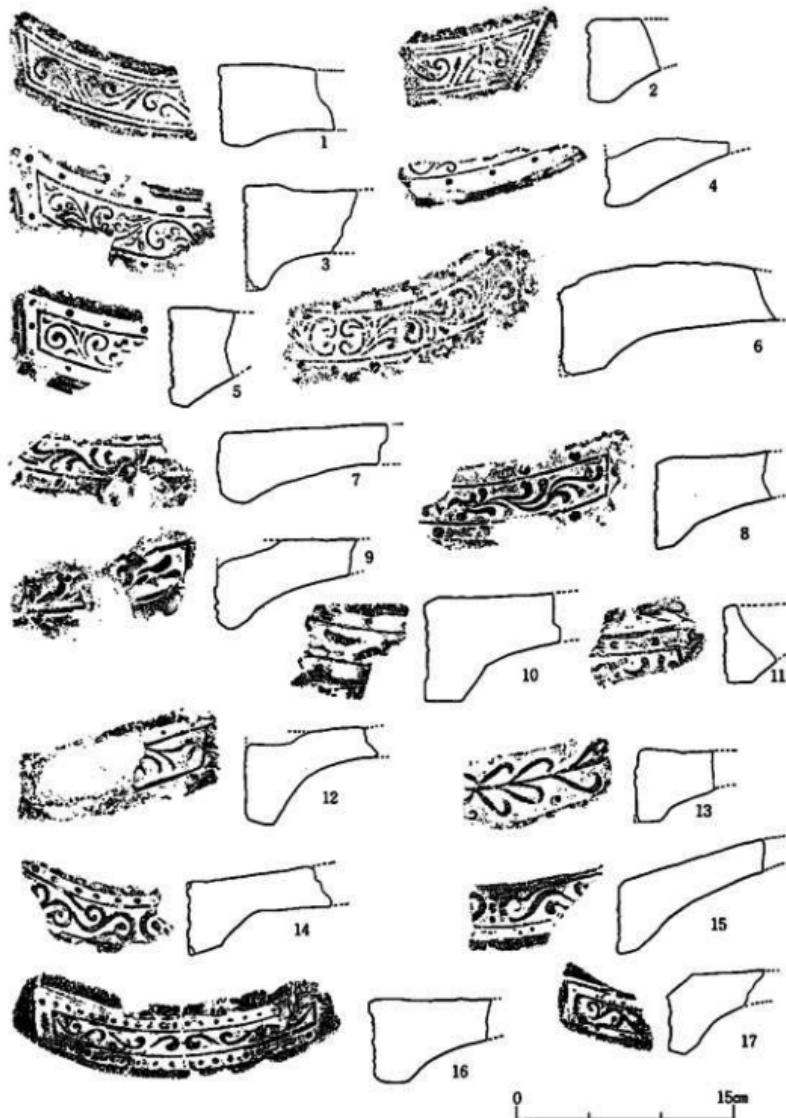
第42図 S E 374 出土遺物実測図



第43図 S K 85 出土軒丸瓦実測図・拓影

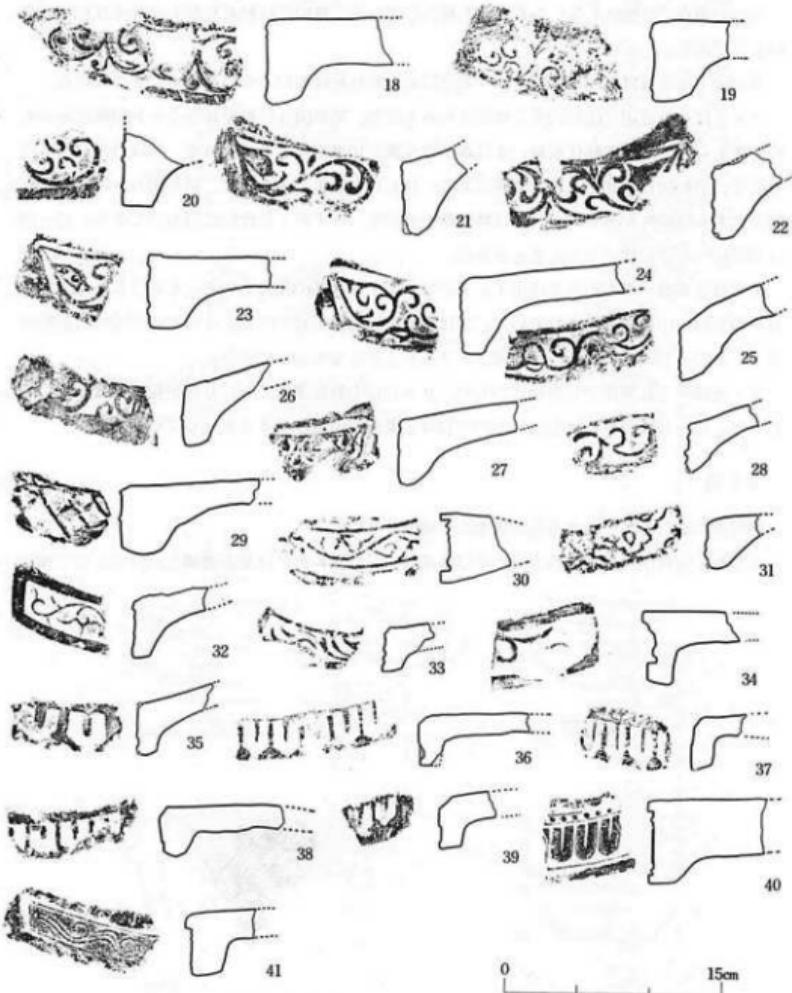


第44図 出土軒瓦実測図・拓影



第46図 出土軒平瓦実割図・拓影(1)

43図、図版第65一下)。この土壙は直径50cmほどの円形を呈し、埋めていた土もきわめて緻密なものであった。軒平瓦が水平に、そのすぐ横に軒丸瓦が瓦当面を下向きに垂直に埋まっており、あるいは礎盤的な性格をもつものかとも考えられる。軒丸瓦は外縁に線鋸歯文を配する単弁蓮花文で、同瓦が奈良県の法華寺阿弥陀浄土院(天平宝宮三年、光明皇后発願)所用瓦を



第46図 出土軒平瓦実測図・拓影(2)

焼いたと考えられる京都府音如ヶ谷瓦窯で発見されている。軒平瓦は東大寺式のもので、繪前寺、法隆寺で出土している(軒丸瓦・平城宮6138B型式、軒平瓦・平城宮6732型式)。

他にも、瓦を含み、同様に緻密な埋土を持つ土壙をいくつか検出しているが、必ずしも柱列状に並ぶものではなく、性格は推定できなかった。

今回の調査では他にも多くの軒瓦類を検出している。量的には軒丸瓦が少く軒平瓦がやや多いようである。

第44図1は平城宮6113系の瓦で、平安京以前の軒丸瓦は前記のものを含めて2点になる。

2・3はこの近辺で比較的多く検出されるもので、第45図5の軒平瓦とセット関係にあるものと考えられる。平安時代前期。4は森ヶ東瓦窯で10世紀代と考えられる。10は11世紀後半のもので、第45図14~16とセット関係にある。11も11世紀後半のもので、第46図21~23とセット関係にある可能性がある。5~7は幡枝座のもので、いずれも12世紀代のものである。13~18は12世紀~13世紀代のものと考えられる。

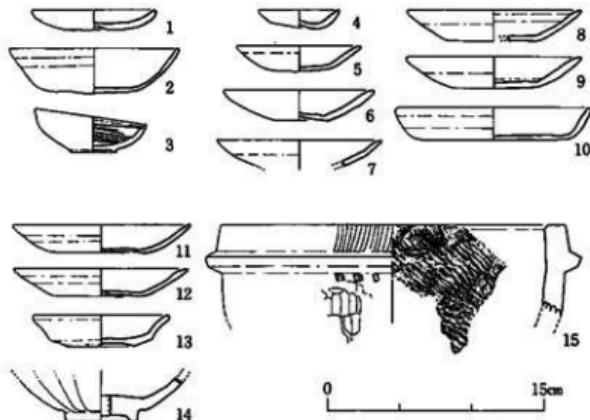
軒平瓦は平城京のものが3点出土している。1・2は6663系のもので、このうち1は近世の井戸の石組の中に組み込まれていた。3は平城宮6732系の瓦である。4~6は平安時代前期の瓦で、このうち5は軒丸瓦の第44図2・3とセットになるものである。

7・8は河上瓦窯産で10世紀代のもの、9・10は小野瓦窯系でやはり10世紀代に入るものであろう。13~17は11~12世紀代のもので14は三条西殿の溝跡で多く出土している。

### 3) 溝

門周辺の溝以外に、東西方向の溝を2本検出している。

S D46 A区中央部に東西方向にのびる溝で、レヴェル的には集石造構とほぼ同じ面で検出



第48図 SD45 出土遺物実測図



第47図 S D395 出土遺物実測図

いを見せていました。この溝はC区東側まで続き全長約20mほどが確認された。門周辺の溝との切合関係は、丁度交点に相当する部分に近世の井戸が掘り込まれていたため不明である。遺物から見て16世紀代に用いられた溝と考えられる。

S D 382・395 やはり東西にのびる溝で、検出面での幅が90cm～1mである。S D 382から395にかけては段がつき、395がやや深くなっている。この溝の埋土の上に墓壙が作られており墓域が形成される以前の溝であったことがわかる(付図4、図版第23一下、第47図)。出土した遺物は少量であるが鎌倉期のものと考えられる。

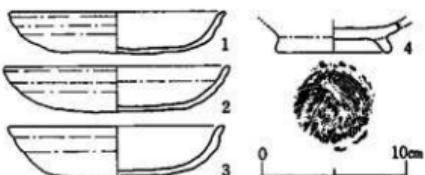
#### 4) 土 壤

S K 396 S D 382の溝の肩部分に僅かに残った土壤である(第49図、図版第26一上)。平安時代後期の土師皿が整然とならべたようく検出されている。

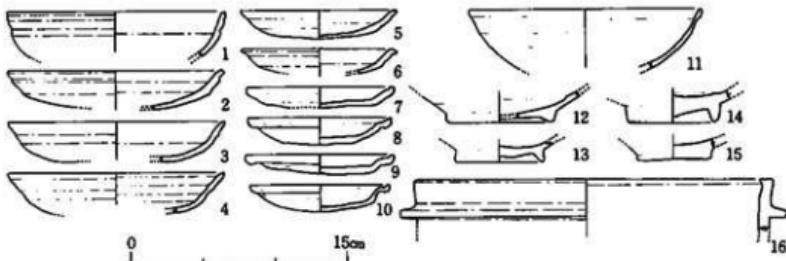
S X79 A区S D46の北側に発見された土壤である。平面形は両

端のやや尖る楕円形で、大量の土師皿と共に、羽釜・中国陶磁などが検出されている(第50図、図版第15一上)。いわゆる「て」字状口縁を持つ皿が多く11世紀代の土壤と考えられる。

S X70 A区中央南寄りで発見された隅丸方形の土壤である。東西約1.5m、南北約70cmであった。13世紀後半の土師器皿と共に、東播系の櫛鉢が、大小セットで発見された(第51図、図版

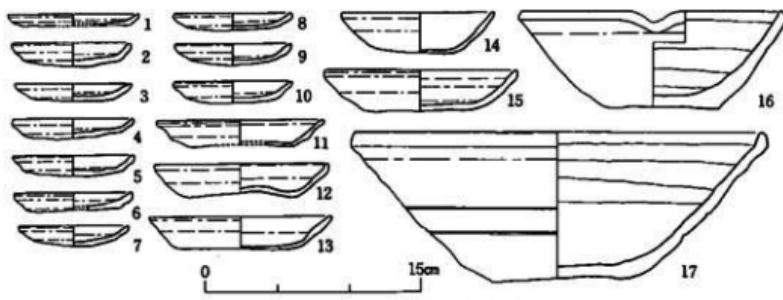


第49図 S K396 出土遺物実測図



第50図 S K79 出土遺物実測図

第16)。



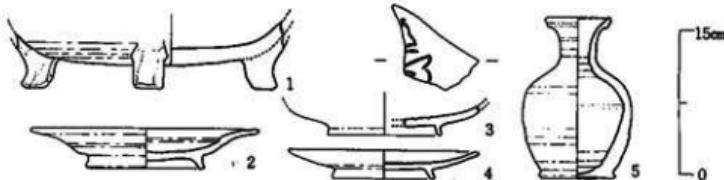
第51図 S K70 出土遺物実測図

### 5) その他の造物

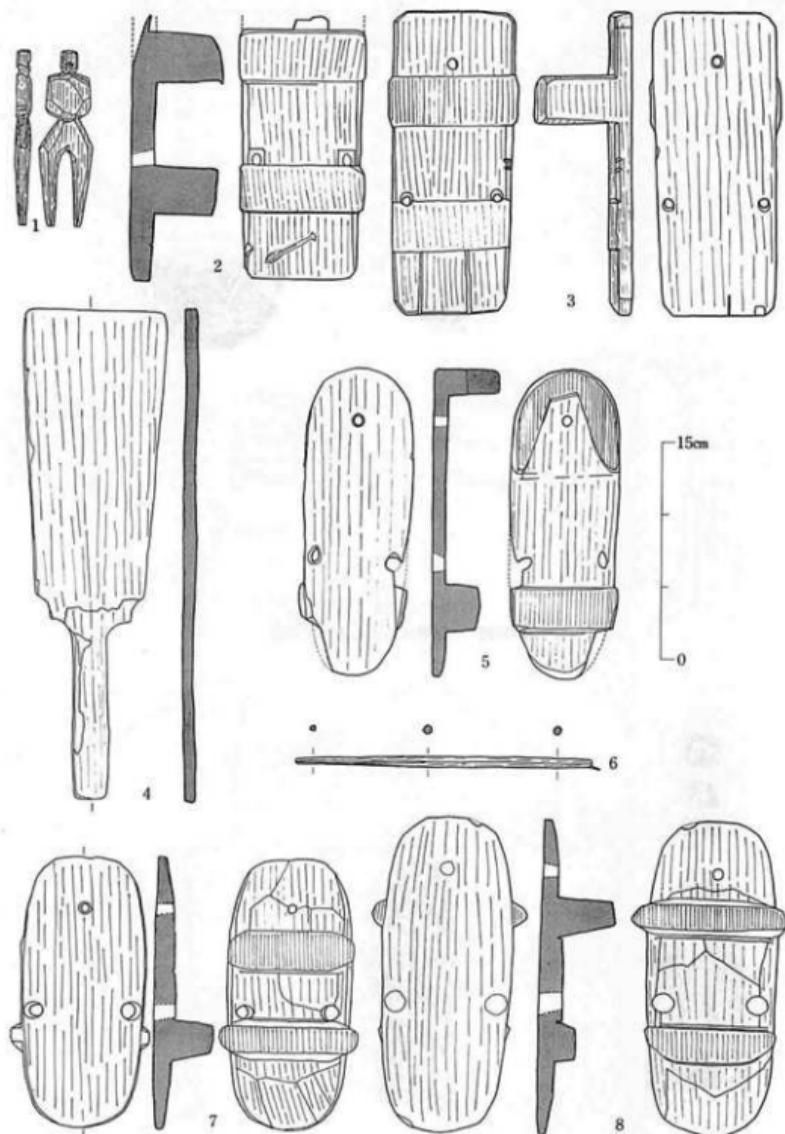
S K327・S E374出土の木製品 S E374からは第42図に示した土器以外に何点かの木製品が出土している(第52図6～8)。またS K327からは桃山期の陶器類と共に多數の木製品が出土した(第52図1～5)。下駄が多いが、人形や羽子板も出土しているのが注目される。

人形は長さ12.2cm、最大幅3.5cm、厚さ1cmで、顔の部分には口を削り込んで表現している。両手は作られていないようである。羽子板は現在用いられているものとほぼ同形で全長は約33cm、最大幅約10cm、厚さ約1cmであった。

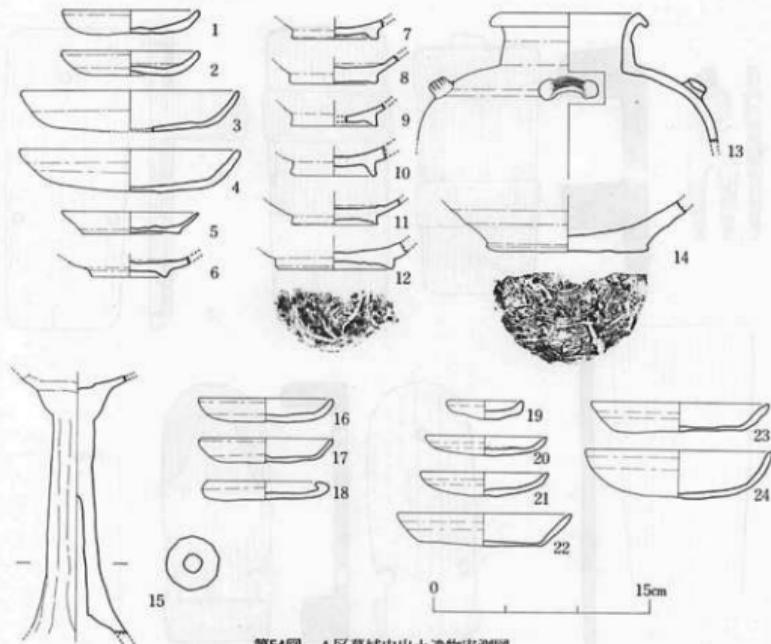
その他の主要な造物としては緑釉の四足盤(第53図1)や、白磁の四耳壺(第54図13)などが出土している。



第53図 その他の平安時代の造物実測図



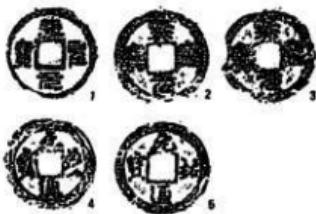
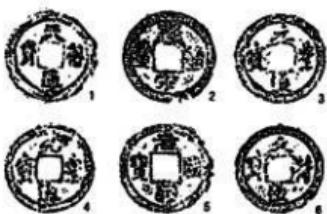
第52図 SK 327・SE 374 出土木製品実測図



第54図 A区墓域内出土遺物実測図



第55図 五輪石・板碑実測図

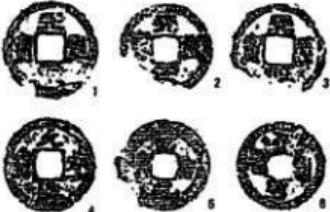
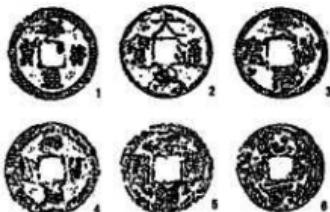


	名 称	初 銀	(西夏)
1	天禧通宝	天 禧 年	間 (1017)
2	皇宋通宝	皇 宋 元	2 年 (1039)
3	元豐通宝	元 豐 元	年 (1078)
4	元祐通宝	元 祐 元	年 (1086)
5	元符通宝	元 符 元	年 (1098)
6	元符通宝	元 符 元	年 (1098)

	名 称	初 銀	(西夏)
1	天聖元宝	天 聖 元	年 (1023)
2	熙寧元宝	熙 寧 元	年 (1068)
3	熙寧元宝	熙 寧 元	年 (1068)
4	元豐通寶	元 豐 元	年 (1078)
5	元祐通寶	元 祐 元	年 (1086)

第57図 S X97 出土六文銭

第56図 S X90 出土六文銭

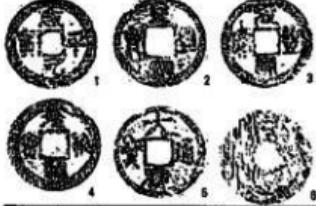
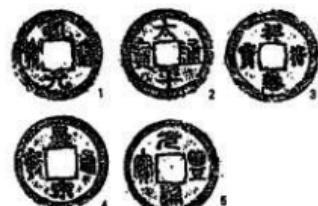


	名 称	初 銀	(西夏)
1	祥符通宝	大 中 祥 符	2 年 (1009)
2	景德元宝	景德 元	年 (1034)
3	大觀通宝	大 觀 元	年 (1107)
4	?	?	
5	?	?	
6	?	?	

	名 称	初 銀	(西夏)
1	天聖元宝	天 聖 元	年 (1023)
2	天聖元宝	天 聖 元	年 (1023)
3	天聖元宝	天 聖 元	年 (1023)
4	元豐通寶	元 豐 元	年 (1078)
5	紹聖元宝	紹 聖 元	年 (1094)
6	?	?	

第58図 S X131 出土六文銭

第59図 S X140 出土六文銭

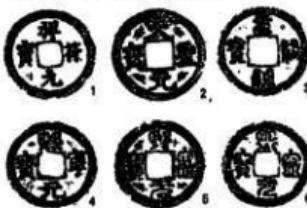


	名 称	初 銀	(西夏)
1	乾元重宝	乾 元 2 年	(759)
2	太平通宝	太平興國元年	(976)
3	祥符通宝	大中祥符 2 年	(1009)
4	皇宋通宝	皇 宋 元 2 年	(1039)
5	元豐通宝	元 豐 元 年	(1078)

	名 称	初 銀	(西夏)
1	咸平通宝	咸 平 元	年 (998)
2	皇宋通宝	皇 宋 2 年	(1039)
3	元豐通宝	元 豐 元	年 (1078)
4	元祐通宝	元 祐 元	年 (1086)
5	大觀通寶	大 觀 元	年 (1107)
6	?	?	

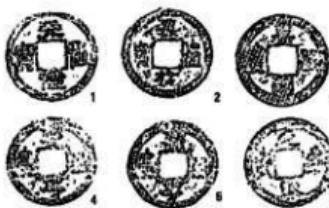
第60図 S X311 出土六文銭

第61図 S X313 出土六文銭



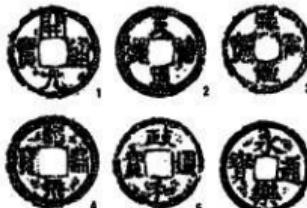
名 称		初 銅	(西夏)
1	祥符元宝	大中祥符元年(1008)	
2	天聖元宝	天聖元年(1023)	
3	嘉祐通寶	嘉祐元年(1056)	
4	熙寧元宝	熙寧元年(1068)	
5	熙寧元宝	熙寧元年(1068)	
6	熙寧元宝	熙寧元年(1068)	

第62図 S X315 出土六文銭



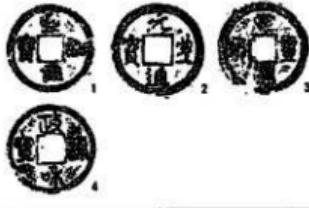
名 称		初 銅	(西夏)
1	天聖元宝	天聖元年(1023)	
2	嘉祐通寶	嘉祐元年(1056)	
3	嘉祐通寶	嘉祐元年(1056)	
4	治平通寶	治平元年(1064)	
5	熙寧元宝	熙寧元年(1068)	
6	元豐通寶	元豐元年(1078)	

第63図 S X320 出土六文銭



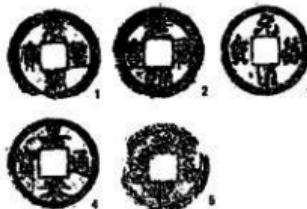
名 称		初 銅	(西夏)
1	開元通寶	武德4年(621)	
2	天祐通寶	天祐年間(1017~)	
3	天聖元宝	天聖元年(1023)	
4	治平通寶	治平元年(1064)	
5	政和通寶	政和元年(1111)	
6	永樂通寶	永樂6年(1408)	

第64図 S X324 出土六文銭



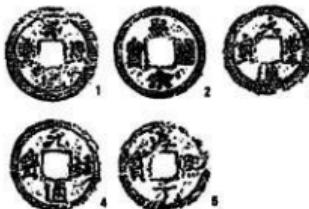
名 称		初 銅	(西夏)
1	至和元宝	至和元年(1054)	
2	元豐通寶	元豐元年(1078)	
3	元豐通寶	元豐元年(1078)	
4	政和通寶	政和元年(1111)	

第65図 S X327 出土六文銭



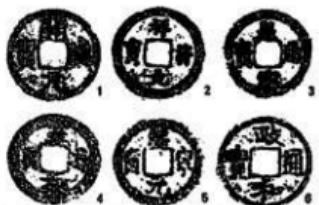
名 称		初 銅	(西夏)
1	元豐通寶	元豐元年(1078)	
2	元祐通寶	元祐元年(1086)	
3	元符通寶	元符元年(1098)	
4	嘉泰通寶	嘉泰元年~(1201~)	
5	?	?	

第66図 S X336 出土六文銭



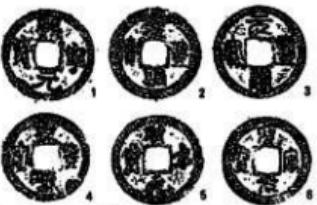
名 称		初 銅	(西夏)
1	祥符通寶	大中祥符2年(1009)	
2	皇宋通寶	皇宋元年(1039)	
3	元豐通寶	元豐元年(1078)	
4	元祐通寶	元祐元年(1086)	
5	淳熙元寶	淳熙元年(1174)	

第67図 S X356 出土六文銭



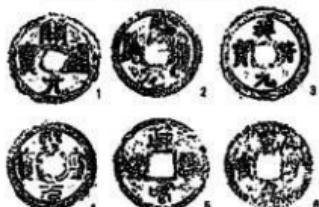
名 称 初 銅 (西暦)	
1 開元通宝	武德4年(621)
2 祥符通宝	大中祥符元年(1008)
3 皇宋通宝	宝元2年(1039)
4 至和通宝	至和元年(1054)
5 熙寧元宝	熙寧元年(1068)
6 政和通宝	政和元年(1111)

第68図 S X359 出土六文銭



名 称 初 銅 (西暦)	
1 熙寧元宝	熙寧元年(1068)
2 元豐通宝	元豐元年(1078)
3 元豐通宝	元豐元年(1078)
4 元豐通宝	元豐元年(1078)
5 聖宋元宝	建中靖國元年(1101)
6 聖宋元宝	建中靖國元年(1101)

第69図 S X362 出土六文銭



名 称 初 銅 (西暦)	
1 開元通宝	武德4年(621)
2 開元通宝	武德4年(621)
3 祥符元宝	大中祥符元年(1008)
4 熙寧元宝	熙寧元年(1068)
5 政和通宝	政和元年(1111)
6 ?	?

第70図 S X376 出土六文銭



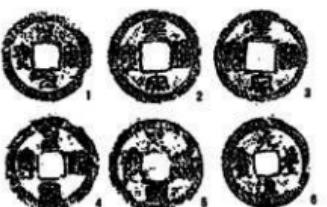
名 称 初 銅 (西暦)	
1 皇宋通宝	寶元2年(1039)
2 至和元寶	至和元年(1054)
3 嘉祐通寶	嘉祐元年(1066)
4 熙寧元宝	熙寧元年(1068)

第71図 S X387 出土六文銭



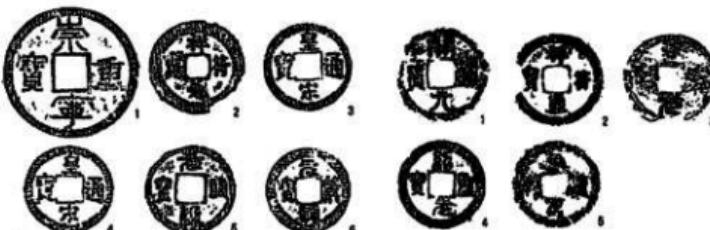
名 称 初 銅 (西暦)	
1 開元通宝	武德4年(621)
2 開元通宝	武德4年(621)
3 開元通宝	武德4年(621)
4 祥符元宝	大中祥符元年(1008)
5 天禧通宝	天禧年間(1017~)
6 元祐通宝	元祐元年(1086)

第72図 S X399 出土六文銭



名 称 初 銅 (西暦)	
1 聖宋元宝	建中靖國元年(1101)
2 皇宋通宝	寶元2年(1039)
3 皇宋通宝	寶元2年(1039)
4 皇宋通宝	寶元2年(1039)
5 皇宋通宝	寶元2年(1039)
6 元豐通宝	元豐元年(1078)

第73図 3 A15区第1検出面出土六文銭



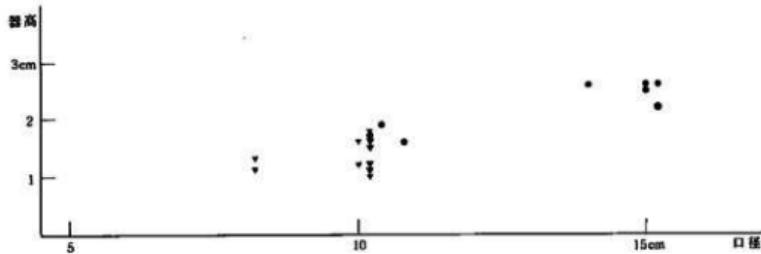
	名 称	初	鑄	(西曆)
1	崇寧重宝	崇寧	元	(1102)
2	祥符元宝	大中祥符	元	(1008)
3	皇宋通寶	宝	元	(1039)
4	皇宋通寶	宝	元	(1039)
5	元符通寶	元	元	(1096)
6	元符通寶	元	元	(1096)

第75図 C区墓域出土のその他の古鏡

	名 称	初 铸	(西曆)
1	開元通宝	武 穗	4 年 (621)
2	祥符通宝	大中祥符	2 年 (1009)
3	熙寧元宝	熙 寧	元 年 (1068)
4	紹聖元宝	紹 聖	元 年 (1094)

第74図 A区墓域出土のその他の古鏡

第76圖 出土古錢統計圖表

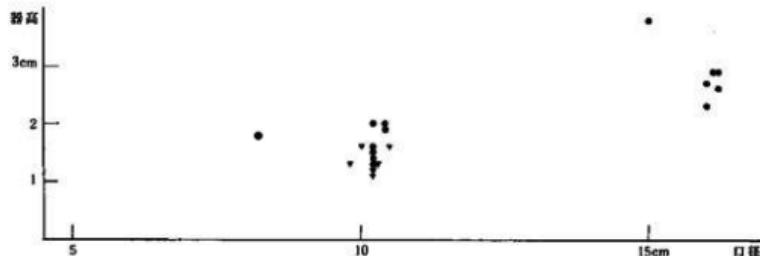


第77図 SD83 出土土師器皿法量図表

SD83

種類	口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16
		個体数								
褐色系	個体数	0	—	2.4	0.2	—	0.2	0.6	1.1	—
	比率	0 %	—	42 %	100%	—	100%	100%	100%	—
'て'字状	個体数	0.6	—	3.3	0	—	0	0	0	—
	比率	100%	—	58 %	0 %	—	0 %	0 %	0 %	—

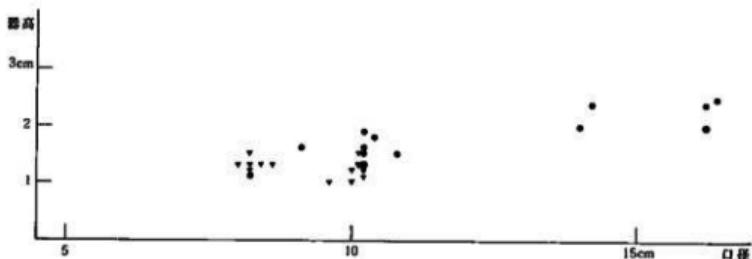
●：褐色系土師器皿、▼：「て」字状口縁土師器皿、■：白色系土師器皿（以下第83図まで同じ）



第78図 SD98 出土土師器皿法量図表

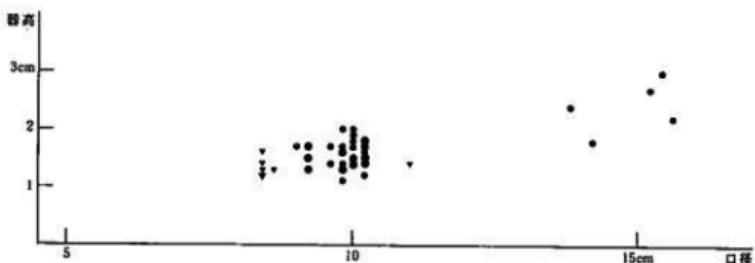
SD98

種類	口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16
		個体数								
褐色系	個体数	0.7	—	2.7	0	0.2	—	—	0.8	1.5
	比率	100%	—	52 %	0 %	100%	—	—	100%	100%
'て'字状	個体数	0	—	2.5	1.0	0	—	—	0	0
	比率	0 %	—	48 %	100%	0 %	—	—	0 %	0 %



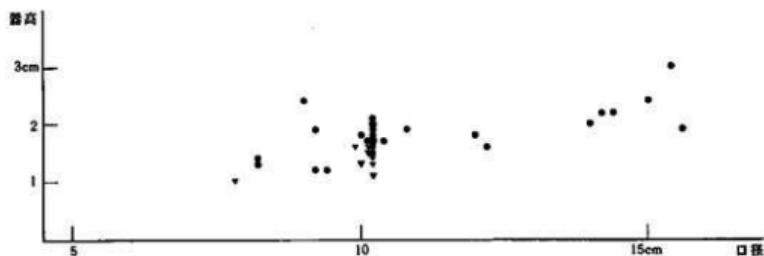
第79図 SD99 出土土師器皿法量図表

種類	口径	8cm	9	10	11	12	13	14	15	16
		個体数								
褐色系	8cm	0.3	1.0	1.3	0.3	—	—	1.3	0.2	1.1
	比 率	17%	85%	42%	100%	—	—	100%	100%	100%
「て」字状	8cm	1.3	0.2	1.9	0	—	—	0	0	0
	比 率	83%	15%	58%	0%	—	—	0%	0%	0%



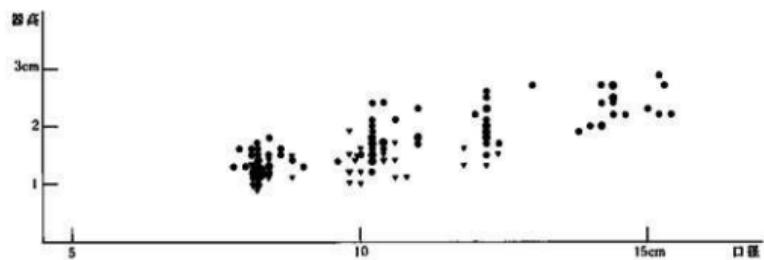
第80図 SK114 出土土師器皿法量図表

種類	口径	8cm	9	10	11	12	13	14	15	16
		個体数								
褐色系	8cm	0	2.1	10.1	0	—	—	0.7	0.7	0.2
	比 率	0%	72%	100%	0%	—	—	100%	100%	100%
「て」字状	8cm	1.4	0.8	0	0.5	—	—	0	0	0
	比 率	100%	28%	0%	100%	—	—	0%	0%	0%



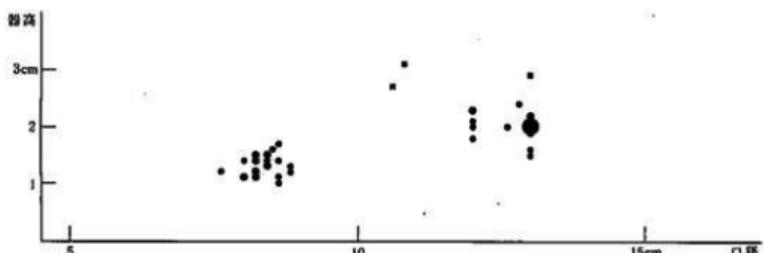
第81図 SK116 出土土師器皿法量図表

種類	口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16
		個体数								
褐色系		0.4	1.0	3.5	0.2	0.6	—	0.9	0.7	0.8
	比 率	72 %	100 %	59 %	100 %	100 %	—	100 %	100 %	100 %
「て」字状		0.2	0	2.5	0	0	—	0	0	0
	比 率	28 %	0 %	41 %	0 %	0 %	—	0 %	0 %	0 %



第82図 SK79 出土土師器皿法量図表

種類	口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16
		個体数								
褐色系		14.0	1.3	6.6	1.5	4.3	0.4	3.4	3.3	0.2
	比 率	88 %	74 %	36 %	58 %	83 %	100 %	100 %	100 %	100 %
「て」字状		2.0	0.5	11.8	1.1	0.9	0	0	0	0
	比 率	12 %	26 %	64 %	42 %	17 %	0 %	0 %	0 %	0 %



第83図 SK70 出土土器皿法量図表

SK70		8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16
種類	口径	個体数								
褐色系	比 率	7.7 100%	1.8 100%	—	0 0 %	2.6 100%	4.5 93 %	0.2 100%	—	—
白色系	比 率	0 0 %	0 0 %	—	1.8 100%	0 0 %	0.3 7 %	0 0 %	—	—

### 第3章 文献的考察

発掘地は、左京三条三坊十一町に当り、東側は烏丸小路に面し、南北の真中は、ほぼ北の三条坊門小路と南の姉小路の中央に当る。造構検出状態でも中央部から南北二つに分けられる。桃山時代以降、町屋として統一されるまで、即ち室町時代までを考察してゆく。

#### 第1節 高階邸の位置

まず、北側の地点を明確にしえるのは、『山機記』応保元年(1161)7月8日条である。

丑終刻許有火、内裏裏<sup>裏三</sup>近々之由下人来告、仍着直衣駆參、三条坊門南、烏丸西備中守為清宅云々、仰藏人等直官人并所衆誰口等見參、無風火消、禁裏無怖畏、仍退出。

この焼亡記事によると「備中守為清宅」とある。備中守として高階為清の邸宅が十一町内に領有する敷地は如何なる面積を領有していたであろうか。

平安京造営における宅地の班給についての史料は伝えられていないが、『日本紀略』延暦12年(793)9月2日条に

遣菅野真道・藤原葛野唐等、班給新京宅地。

とある。新京宅地を班給するにあたり、何らかの規範がもうけられていたと思われる。遷都以後、200年以後の史料であるが、『日本紀略』長元3年(1030)4月23日条に、

仗職、諸國吏居處不可過四分一宅、近來多造営一町家、不濟公事、又六位以下築垣并桧皮葺宅可停止者。

とあり、諸国吏(多くは正六位以下の相当官)は四分の一町を限度とするとある。三位以上は一町以下、五位以上半町以下、六位下四分の一町以下とする難波京に倣ったものという<sup>1)</sup>。『小右記』<sup>2)</sup>はこの障壁の後に、関連した事件を伝えている。それは同日記の長元3年6月23日条で、

廿三日、乙巳着為時并隨身信式等 令施行東山、相高宅從去夜聞之壙之間、未明使官人等馳向彼宅破却、  
(度)(X)(度)(度)(度)

とある。檢非違使高階為時が東山にあった源相高宅を破壊した理由として、

從五位下源相高宅新制官符新出之後、構高大屋、□葺桧皮、檢非違使等破却件屋、須令法家勘申相高罪名者。  
(度)

とあり、邸宅破棄は新制官符にのっとったものであった。その新制は5月28日<sup>3)</sup>に発布され、同日記は全文を伝えている<sup>4)</sup>。

太政官 符彈正・左右京職・檢非違使御内

## 応禁制非參議四位以下造作壹町舍宅事

右、検案内、式云、大路建門屋三位以上及參議職之者、式条所存、門屋依人乃職、舍宅須有等着、而近年以来人忌品秩、好營舍墟租、式龍濱町棟守、或構大廈、故雖位貴者無一錢則步三經、雖品賤者富浮華則開高門、俗之風吹、因之敗弊、職此之由、理不尙然、右大臣宣、奉勅、宣仰彼職合禁制、若不憚制止猶致逸犯之輩、其有官者、解却見任、永不數用、其無官者、科連勅罷、得以決斷、但無居宅者可營作者、古四分一以下之地先申請官、待其裁報、又出木致功、既雖結構、未及造了、早從却、營作業了、不可必制、春暦且承知、依宣行之、符致奉行、

同年6月28日<sup>④</sup>の明法博士令宗道成勅文によると、この法令によって源相高は散位であっても見任解却に准じて贋罰を徵すべし、とある。不法造宅之制により実際に打ち壙されたわけである。この時、源相高は從五位下であった。

下ってこの造宅規制が平安末期まで有効性があったか確証はないが、やはり何らかの束縛があったと思われるため、高階為清邸が十一町全体を領していたとは考えにくい。

為清の経歴は、仁平2年(1152)6月27日條『兵範記』に「佐渡守」とみえるのを始めとして、久寿2年(1155)2月25日<sup>⑤</sup>に2年の延任が認められている。先の焼亡記事の応保元年(1161)に備中守になり、治承3年(1179)12月12日<sup>⑥</sup>には近江国守に任命されている。為清は佐渡守の時代、法成寺の西塔を造進<sup>⑦</sup>するほどの財力を有していたが、五位<sup>⑧</sup>としての地位からして、一町の半分を越えてはいなかったのではなかろうか。そうすると、「三条坊門南烏丸西」の指点標示は、それぞれの小路に面した一町の北部の半分以下を領有していたと考える。烏丸小路に面して門の基礎が出土し、平安期の井戸も検出された。これにより発掘地の北側半分が、為清邸に当ると思われる。

天武天皇—高市親王—長屋王—桑田王—磯部王—峯緒—茂範—篠尚—  
良臣—敏忠—業遠—成章—為家—為遠一家—為清—行清—有清

## 『高階氏系図』(『尊卑分脉』より作製)

上記の系図では、為清から行清、有清へと伝えるが、鎌倉時代全般にわる國司制度の崩壊にともない、富豪を究めた受領は衰退をみた。為清邸宅は子孫に伝領して行くわけであるが、その史料もなく、そのまま領有していたとは考えられない。鎌倉時代には退転し、南北朝以降は墓域となっていました。

## 第2節 墓地の規制

埋葬された人骨約80余体を検出した。ほぼ体形として確認出来るものは、多く頭を北向とし、六文銭と漆碗とをともなっている。墓域として室町時代全般、さらに安土期まで利用されていたことが土師器皿等の遺物から判断される。

三条坊門小路には足利将軍家の御所があり、この墓地の前を行粧している。洛中の真中に墓域が公的に許されていたのであろうか。

平安遷都後、朝廷は京の周辺の愛宕・葛野両郡の人々が自宅の近くに埋葬することを禁止<sup>10)</sup>している。この例からも、平安時代の京内に墓域はなかったと考えられている<sup>11)</sup>。造制として、ほぼ鎌倉朝も踏襲していたと思われる。

室町後期の文献ではあるが、墓地に関する「室町幕府奉行人連署奉書」<sup>12)</sup>が阿弥陀寺に出されている。

阿弥陀寺事、依為無縫所、於境内成立墓、或植那之輩土葬等儀、為結縁令執行之上者、向後不可有相違之由、所被仰下也、仍執達如件、

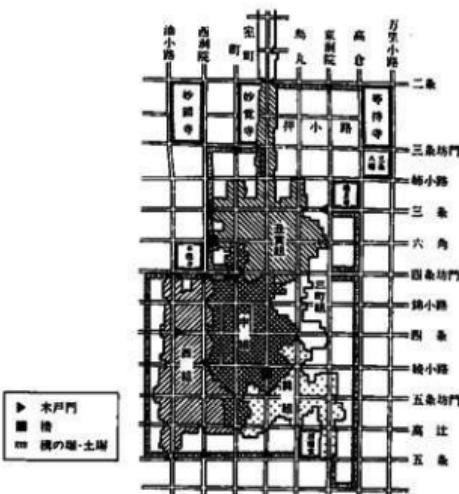
永禄元年十月廿七日 左近大夫将監(花押)

左衛門尉(花押)

当寺住持

この奉書によると境内において立墓と擅那衆の土葬とが認められている。これは洛中において無断で立墓と土葬とが禁止されていたことを物語る、あるいは反対に、土葬等が多くみられたので取り締っていたとも考えられる。これらのことから発掘地の墓域の性格として、2通り検討される。A) ある寺院の領域内にあったこと。B) この地が慣習的な附近の民衆の墓地であったこと。

A) 西側に現在円福寺町と地名のみ残っている寺が室町後期にあった。この寺以外には、墓域に隣接する寺院はみいだせない。円福寺は『京都坊目誌』によると、後深草天皇の勅願より建長3年(1251)に僧立信が深草に建立し、浄土宗深草派の本寺となつたが、のち立条坊門猪熊に移り、さらに室町小路に移転し、天正13年(1585)京極四条坊門へ転居したと記述する。中原康富は、日記<sup>13)</sup>の中で「予代々墳墓在五条坊門猪熊円福寺」と記す。室町中期頃には五条坊門猪熊にあり、円福寺より埋葬の方が先に存在したことになる。



第84図 戦国期京都都市図

(高橋康夫「京都中世都市史研究」  
第30図「戦国期京都都市図」より  
下京区の部分を転載。)

さらに、円福寺がいつ室町小路西側の地に移ったか不明である。が、戦国時代の洛中は上京と下京が防禦施設としての土塹・堀で囲ぐらされており、三条坊門と姉小路の間は、室町小路を中心として東西にその領域を分かっていた<sup>14)</sup>。また「南無妙法蓮華經」を彫る板碑一基が出土している。円福寺は浄土宗でもあり、法華宗系の墓石を如何に考えるべきであろうか。

B) 妙号の板碑・永禄元年(1558)の五輪塔、六文銭・漆碗等の簡素な副葬品、さらに埋葬において重層的に、あるいは密度濃く長期にわたって墓域を使用していることなどから、民衆の共同的に利用していた可能性が強い。特に高橋康夫氏の復元した洛中の図から推量すると、下京の「構」の中にあり、丑寅組の北に位置し、空閑地となっている(第84図)。

これらのことからBの方と考えたい。しかし発掘地の北側断面から人骨が検出されていることから、現在のお池通(旧三条坊門小路)の面まで発掘が行なわれ、どの範囲の墓域であったか、また新しい銘文とともに追跡の検出を見るまで、決定を留保したい。

### 第3節 姉小路との関連

南側の地は墓域ではない。また西側の面は江戸時代の粘土採取により、それ以前の造構は検出できなかった。さらに東側の南隣りの土地は、当博物館が昭和55年11月26日から翌年1月13日まで発掘を行い、その報告書(『平安京跡研究調査報告第12報』)が刊行された。この中に記されている論述とほぼ重り合うため、その論にそって述べて行く。

先に述べたように、平安時代において高階為清邸がこの東側まで延びていなかったと思われる。そうすると、この地が文献上明確にあらわされるのは鎌倉初期からである。

まず建保3年(1215)の文書<sup>15)</sup>にみえる。

(略語)  
「□進姉小路烏丸地券案 (花押)」

奉女房四条臺福之新券案此候、伴券承久乱逆之時紛失之由、息女中納言局被申、以之仍為御所望、件案文進覽之、

寛喜四年三月十四日 (花押)

奉渡 地壇処事

合貳戸主余貳拾陸丈者

東西添丈 南北拾捌丈

在左京姉小路以北、烏丸以西、姉小路西

右件地、元者御二位家領也、而被相博大炊御門烏丸地舉、今彼地内貳戸主余貳拾陸丈所奉  
(附書)「妙号四名目」  
渡七条院女房治部卿殿御臺福也、於本券者、有類地之間、不令相副、仍為後日証拠、立新券之状如件、

建保三年十月十八日 在判

上記の文書は承久の乱のとき、建保3年の譲状を紛失したため、小将の姉妹の中納言局が寛喜4年(1232)3月14日に申請して、この地を安堵してもらった紛失状である。

この文書によると、姉小路に面した北側と烏丸小路の西側で示される土地を舞二位家が所有していた。それを建保3年になって、大炊御門烏丸地と相博して、七条院女房治部卿殿御臺福(のちに四条局と号す)に渡した。さらに翌年3月12日附<sup>16)</sup>の譲状によると、四条局の子息小将に譲与されている。

弘安9年(1286)7月26日附「敷地放券文」<sup>17)</sup>によると、同地を明教と性蓮の私領として、直銭175貫文で尼内心に売却している。その際、手縫文書10通を相副えてとあるので、この年まで約10件もの所有権の移転がくりかえされたことがわかる。

南北朝期に入ると、次の寄進状<sup>18)</sup>にみえる。

寄進 日吉十禅師社燈油下地事

合貳戸主余貳拾陸丈

在左京姉少路烏丸以西姉少路面北頃地事

右地者、永舜領掌年尚、而有神物借用之子細之上、為現當悉地成就、相副証文等、永代ト取令奉寄十禅師社、然者納受敬神之誠、満足所願、仍狀如件、

貞治六年六月一日 僧永舜(花押)

氏女(花押)

貞治6年(1367)に僧永舜と氏女とが、日吉十禅師社の燈油料地として永代寄進をしたとある。これに随、室町時代全般にわたって、この文書に記された状態が続いたと思われる。

南隣の出土遺物として特色の一つは、備前焼の大甕—総点数は約20~22前後を数える—が遺物用コンテナー100箱以上に及ぶ膨大なものがある。報告書では「今回出土した大甕が酒屋に使用されたものかどうか断定は



図86 国「僧永舜・氏女日吉十禅師社燈油下地寄進状」1幅

大日本史料第六編之二十八、P856には  
近江国生源寺文書として所収。

できないが、調査地に酒屋をはじめ大甕を必要とする業種に対してそれを供給する業種の居住者がいたことはあながち無理な推測ではないだろう。」とある。この時期の出土した大甕等から、それを利用する商業を推定している。しかしそれに続く北側、今回の発掘した隣地では、そのような顯著なものは出土していない。

出土遺物から先の発掘地とは違った空閑領域を有していた。日吉十禅師社燈油料としてのこの地は、西側の南(B区)におおよそそ当ると思われる。東側の南(A区南側)も確実な文献・具体的な遺物がないので、断定はさしつかえるが、ほぼ日吉十禅師社にみえるような土地関係

があったのではなかろうか。

#### 第4節 桃山期以降

桃山期以降になると、天正18年(1590)の豊臣秀吉の洛中改造にともない西側に新しく道が整備され、慶長13年(1608)に銀座が伏見から移転したことにより、両替町通りができ、西に面して龍池町、東の烏丸通りに面して虎屋町となった。戦国期以降の洛中の町屋は、道に面した両側の町屋が一つの町を形成していた。発掘地も、東西真中から道に面して、龍池町と虎屋町に二分される。

龍池町は、通りの名のように金銀朱座関係者が多く住んでいた。また虎屋町には菫子所菊屋<sup>19)</sup>・両替屋<sup>20)</sup>・御城内用聞職人年寄和泉屋宗助<sup>21)</sup>などが住んでいた。両町とも町衆の中心的な居住地であった。

明治期以降の発掘地は、虎屋町4軒・龍池町5軒の町屋があった。庶民の町並である。現在は京都市の商業地として発展している。

#### 註

- 1) 秋山國三・仲村研『京都「町」の研究』(東京、昭和50年)第二章第一節。
- 2) 『大日本古紀錄』所収本によった。『小右記』も同日に伏識が書きされていることを記するが、略本のため詳細な内容は伝えていない。
- 3) 『小右記』長元3年6月28日条。
- 4) 同上、長元3年5月口4日条。諸印の前の官符の本文を収録している。
- 5) 註3)に同じ。
- 6) 『兵範記』同日条。
- 7) 『山桃記』・『玉葉』同日条。
- 8) 『本朝世紀』仁平3年9月8日条。
- 9) 『尊卑分脉』に「正五位下」と注記す。
- 10) 『日本後記』延暦16年正月25日条。
- 11) 『京都の歴史』(京都・昭和45年)第一巻第六章第二節の「送終の礼」に詳述する。
- 12) 『京都淨土宗院文書』(京都、昭和55年)所収。

- 13) 『康富記』享徳3年7月14日条。
- 14) 高橋康夫『京都中世都市研究』(京都、昭和58年)第三節参照。
- 15) 『京都大学所蔵文書』(『鎌倉道文』2188号文書・『大日本史料第四編之十三』、915頁)。
- 16) 『八坂神社文書』(『鎌倉道文』22151号文書)。
- 17) 『押小路文書見聞筆記(四十八)』(『鎌倉道文』15949号文書)。
- 18) 写真図版にした一編の文書は『弘文荘古文書目録』(東京、昭和48年)より転載したものである。『大日本史料 第六編之二十八』(東京、昭和16年)856頁には、『近江国生源寺文書』として、この文書を所収する。
- 19) 『京羽二重』
- 20) 『京羽二重鐵留』
- 21) 『京羽二重鐵留大全』
- 22) 明治35年法律第22号等による作製の『旧土地台帳』

## 第4章 まとめ

今回の調査では、平安時代以降各時期の造構・造物が発見されているが、その中でもA区東端で検出された門跡とその周辺の溝、そしてA区北部とC区で発見された墓域が最も注目すべき造構と言えよう。ここではこの2点について若干の考察を加えたい。

### 第1節 門跡とその周辺の造構

今回検出した門跡と考えられる一対の礎石は、花崗岩製で、相互の間隔は芯一芯で2.9mほどであった。

これを現存する平安～鎌倉時代の門と比較すると、奈良市新薬師東門(図版第12一上、現状は四脚門であるが元来は棟門で、日本最古の現存棟門という。平安末～鎌倉時代、重要文化財)の約4.5mには及ばないものの、法隆寺西園院上土門(図版第12一下、鎌倉時代、重要文化財)の約2.5mをやや上まわっている。また十輪院四脚門(図版第13一上、鎌倉時代、重要文化財)の3.2m、法隆寺宗源寺四脚門(同下、鎌倉時代、重要文化財)の3.3mをやや下まわる程度である。このことから門の規模としては、寺院と邸宅の門という相異はあるものの、平安時代後期の門として、ほぼ妥当なものと考えることが出来よう。平安京の発掘調査で、この時期の門跡と考えられる造構が検出された例が無いため、考古資料との比較検討は出来ないが、今後の検出例を待って検討してゆきたい。

また対応関係は確認できなかったものの、SB65-aの東側に位置する礎石、SB69、SB68、SB66の下部で検出されたSB186など、門柱の礎石またはその根石と考えられる礎を置く造構が周辺で発見されており、この位置が平安時代において永く門を置く位置として定着していたことをうかがわせるのである。

このことは、礎石の周辺に穿たれていた溝(SD98, 99, 130, 66等)がいずれもこの部分で途切れていることからも言えるのではあるまいか。

ところで、この門の位置をこれまでの発掘調査例から復元した条坊の位置と比較してみると<sup>1)</sup>、調査地である左京三条坊条十一町の北側に位置する三条坊門小路と、南側の姉小路の丁度中間からやや(約6m)北に位置することがわかる(付図6参照)。この一町の中に占める位置も、邸宅の東門として妥当なものと考えられるのである。

このように、今回発見された門跡の造構は、きわめて貴重な史料であると言えるのであるが、反面、これまでの調査例と矛盾する点が2つ存在する。

1つは、造構の方位の問題である。

これまで平安京内の多くの調査で検出された条坊関係の造構は、いずれもほぼ東北を基準に

して溝が掘られていたと考えられ、それらの検出例を集成した京都市埋文研の条坊復元モデルでも、大きな矛盾なく全ての検出例を括している（実際には15分ほど西にふれているようであるが、ほぼ真北とみてよいであろう。）

ところが、今回発見した礎石の芯一芯は、東に5度振っており、これまでの検出例による方位と大きく違った見せるのである。単に礎石だけではなく、礎石の周辺で発見されている数本の溝についてみても、いずれも約5度東にふっており、少くともこの門から北側、三条坊門小路に至るまでは、東に5度傾いた条坊復元を考えねばならないことになる。

これまで、このように極端に方位のふれた調査例が無いため、解釈に苦しむ問題である。

もう一点の矛盾は、溝と礎石の位置の問題である。

これまでの周辺（隣接する南側敷地の2ヶ所、十町にあたる三条西殿跡の計3ヶ所）で調査が行われ、烏丸小路の側溝と考えられる溝が発見されている（付図6参照）での調査と京都市埋文研による平安京条坊復元によれば左京三条三坊十一町の西側の築地の芯は、ほぼ $y = -21,697$ mを通る。ところが今回検出された門跡の位置は $y = -21,694$ mと3m東へ突出することになる。通常、門は築地より宅地内に入り込むものとされているが、築地にそのまま直進にとりつくものとしても、前記の復元モデルの許容誤差3mぎりぎりの位置にあることになる。また、先に述べた南接する2ヶ所の調査例、及び三条西殿の溝を、烏丸小路の西側側溝とすれば、門が道路面に突出していたとしか考えようがない状況である。また、この礎石の更に東側にも溝を検出しており、これを前述の3つの調査例の溝と結ぶとすればこの部分が、ほぼ2.5m道路に突出していたことになる。

一方、SD98、SD130の両溝を南に延長するとこれまでに検出した溝とほぼ一直線上にならぶ。SD98・130を、門跡との位置関係から見れば、築地の内側の溝と考えることも出来、その南への延長ラインに乗る溝も、同様に内側の溝と考えることも出来るわけである。

今回検出した門跡とその周辺の造構は、これまでの調査成果による条坊復元と比較して、位置と方位が大きく異なる。条坊復元が基本的には動かないものとすれば、今回の調査例が三条坊門一烏丸小路付近の特殊な事情によるものと考えるべきなのであろうか。今後の検討課題として残されたものと言えよう。

## 第2節 墓域

墓域については第3章の文献学的考察でも触れているが、若干の私見を述べてみたい。

今回の調査では、再堆積の人骨も含めて約80体分の人骨が発見され、このうち原位置をとどめていたものも多數にのぼっている。通常、平安京城内で明らかに墓と推定される集石墓や木棺墓でも、人骨が残ることは極めて稀で、今回のように、相当腐食が進行し、もろい状態になっているといえ、一応全骨格が崩つて残った例はきわめて少い。地質的に見ても骨の遺存に良好な土とは考えられず何故この地で、このように大量の遺骨が残ったか不明であるが、墓地と

してきわめて多数の遺体が集中的に埋葬されていたことが、遺存のための条件を形成したものとも考えられよう。

墓地の年代については、全ての墓壙、遺骨について、年代の手がかりとなる遺物が皆無であるため、決定的なことは言えないが、副葬されていた六文銭と、C区で発見された五輪石が年代推定の一つの手がかりとなろう。

今回の調査で発見された古銭(墓壙内に6枚重なった状態で発見されたものを主とするが、単独出土のものも含む)は27種で、最も古いものが開元通宝(8枚)で、最も新しいものは一枚ではあるが永楽通宝(永楽六年(1408)初鋳)である。この永楽通宝は墓壙(S X 324)内で6枚が重なった状態で発見されたうちの一枚であり、この墓の時期は少くとも15世紀初頭までは下げるなくてはならない。

またC区墓域南側で発見された五輪石には

永禄元年  
キャカラバア道春禅門  
(梵字) 十二月廿八日

とあり、永禄元年(1558年)には、この地は墓地として機能していたことが理解されるのである。またA区の近世の井戸中で発見された板碑についても、その様式から見て、五輪石とほぼ同時期かやや古い年代を与えることが出来よう。

墓壙内からごく細片でわずかに出土する土師皿片(勿論副葬品ではない)には鎌倉時代~室町時代前半の年代を与えることができるようである。とすればこの墓域が営まれた大まかな時期としては室町時代、そのうちでも応仁の乱を境として、15世紀後半から16世紀代をあてることが出来るのではないだろうか。もっとも、数多く発見された一般庶民の墓と思われる土壙墓と、五輪石が必ずしも同一時期のものとは考えられず、階層も異なるものと考えざるを得ないが、C区の北壁の断面観察によても、14世紀代の土層を掘り込んで墓壙が作られており、15~16世紀という墓域の年代はほぼ動かないであろうと考えている。

応仁の乱以降天正年間までの京都の様子を描いたといふ『中昔京師地図』<sup>2)</sup>によれば、姉小路以北、大炊御門大路以南の一帯は、若干の寺域を除いてほぼ荒地となっているようである。この一帯のこれまでの発掘調査でも、この時期の遺構・遺物が比較的少ないといふ<sup>3)</sup>。これらの諸要素を考えあわせれば、応仁の乱以降、上京の間に残された荒地を利用して、半ば自生的に墓域が形成されたと考えるのもあながち無理とは言えないであろう。

文献学的考察の項でも述べられているように、調査地の西隣は現在も『円福寺町』という地名が残っているように、室町期のある時期に円福寺が存在した。この寺と今回発見した墓地との関係については更に調査研究する必要があると思われるが、本報告では時間的な関係もあり「円福寺」という寺院の存在を指連するにとどめておきたい。

## 註

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所の復元モデルNo.32を使わせていただいた。
- 2)『大内裏図考証』付図。
- 3) 京都市埋蔵文化財研究所永田信一氏の御教示による。

## お わ り に

リクルートセンター・明治生命新築敷地の発掘調査は、昭和58年9月から翌59年2月上旬まではば4か月にわたって実施された。調査の結果、平安時代の門跡とその関連遺構、室町時代と考えられる広大な墓域など、大きな成果を得ることが出来た。

この大きな成果を報告するためには本書はあまりにも粗末な内容である。特に、墓域と門跡以外には、ほとんどふれることが出来なかつたのは心残りとなるところである。諸般の事情から、整理期間がほぼ2ヶ月という短期間に限られたこともあるが一重に編者の責任に帰すべきことである。ただし、遺物等の実測図については可能なかぎり掲載することに始めた。大方の御寛恕をお願いする次第である。

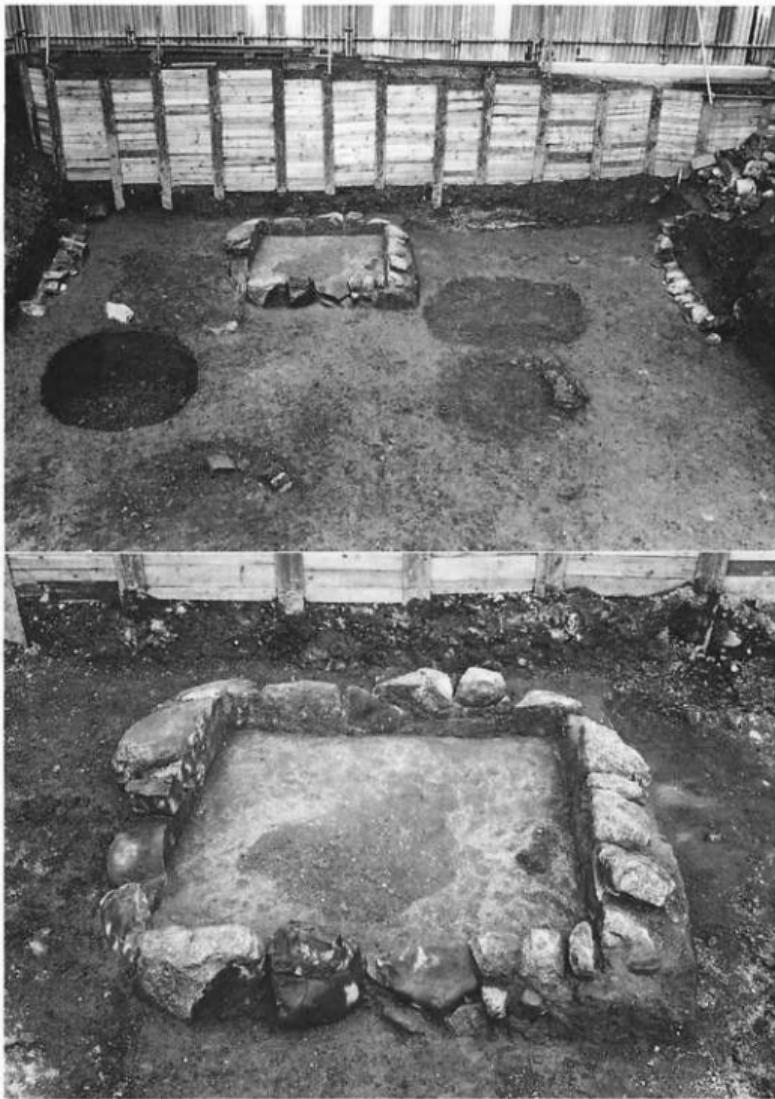
尚、発掘期間中から本書刊行に致るまで多数の方の御教示、協力を得た。特に京都大学理学部池田次郎教授には、御多忙の中、人骨の鑑定を引きうけていただいた。また京都大学名誉教授上田健夫先生には、墓域出土の玉の材質鑑定の労をとっていただいた。ここに厚く謝意を表わすものである。

# 図 版

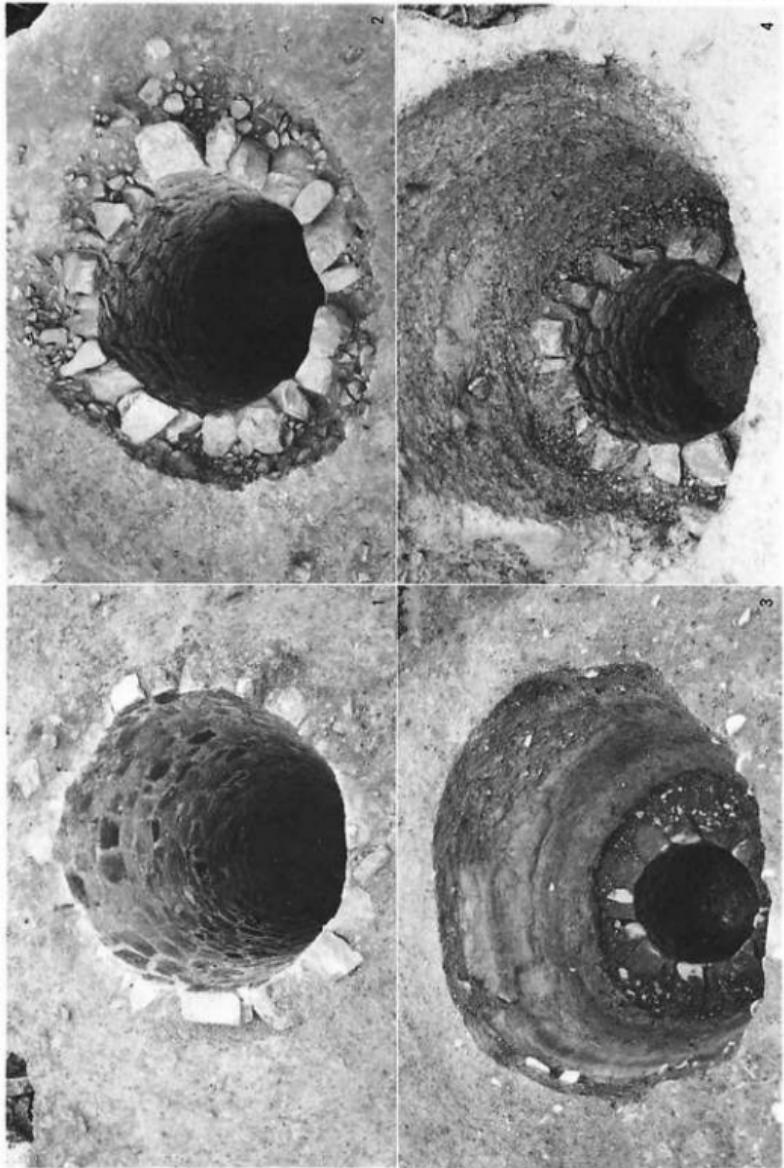


上：調査地遠景(烏丸御池交叉点北東から) 下：A区第1検出面全景

图版第2



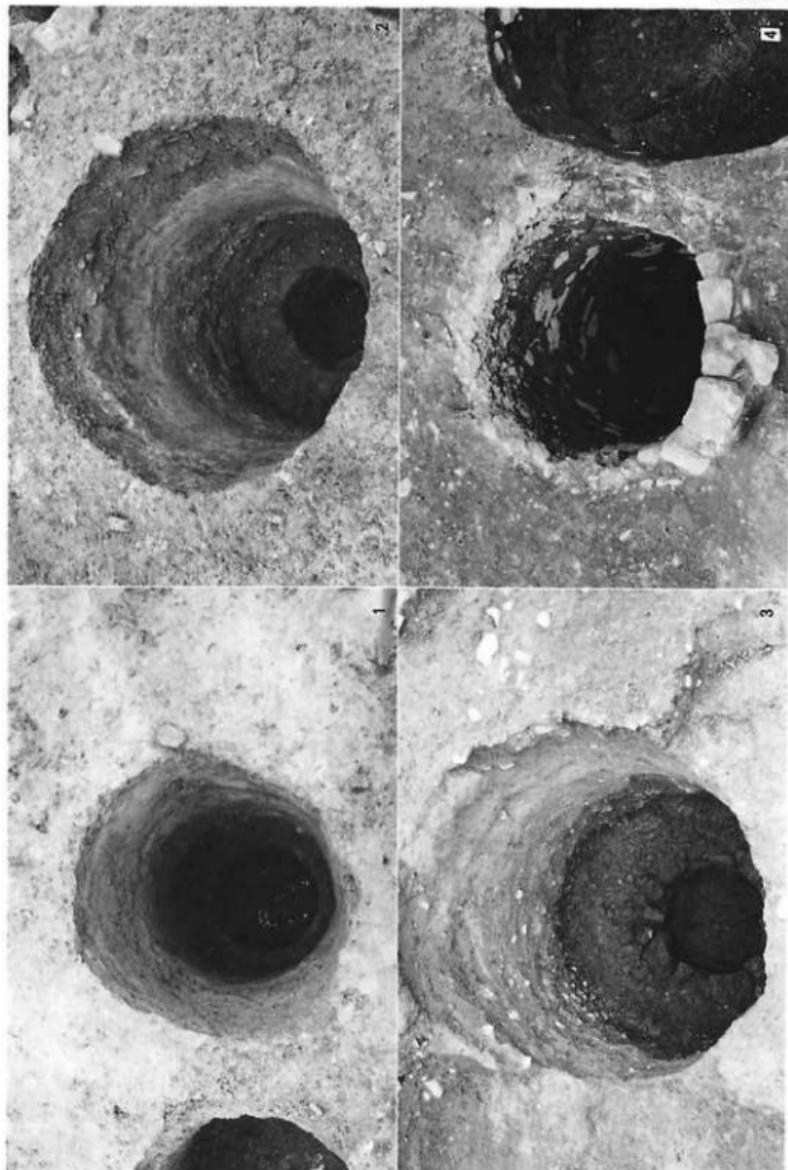
上：S B26・27・28 下：S B27



図版第4

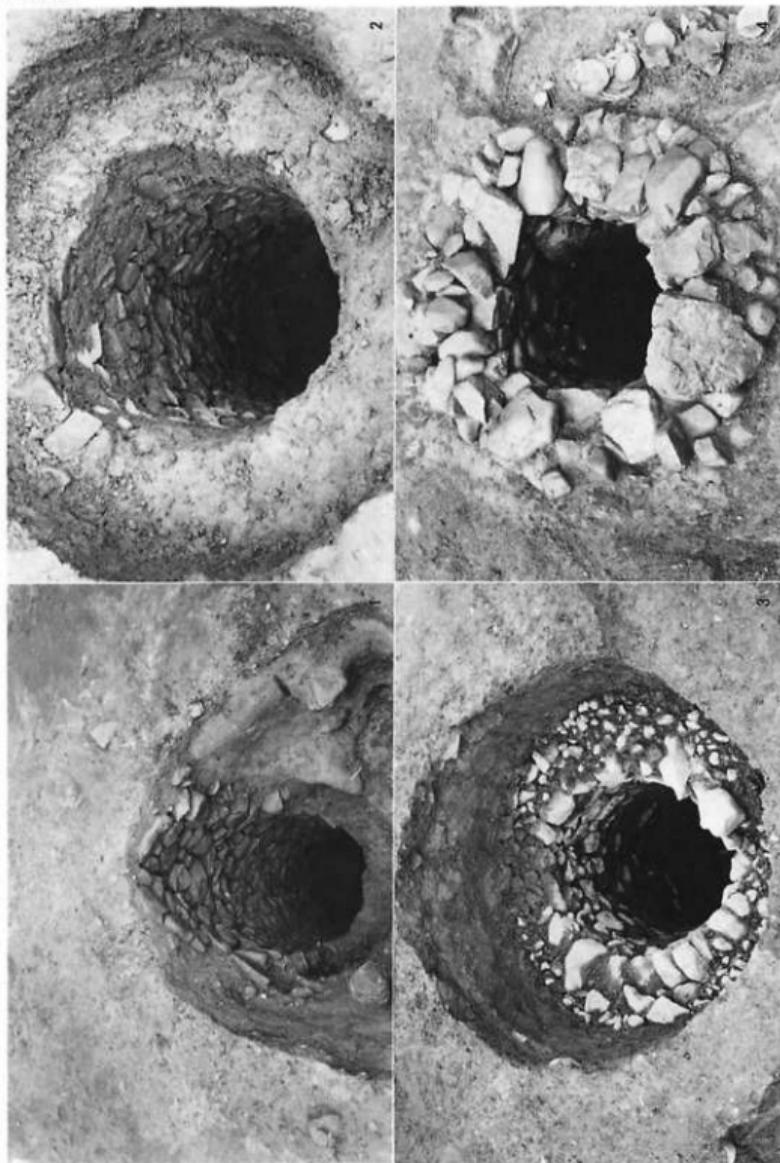


E 6 2 : SE36 3 : SE41 4 : SE33



1 : SE48 2 : SE24 3 : SE40 4 : SE29

図版第6



1 : SE39 2 : SE47 3 : SE43 4 : SE50

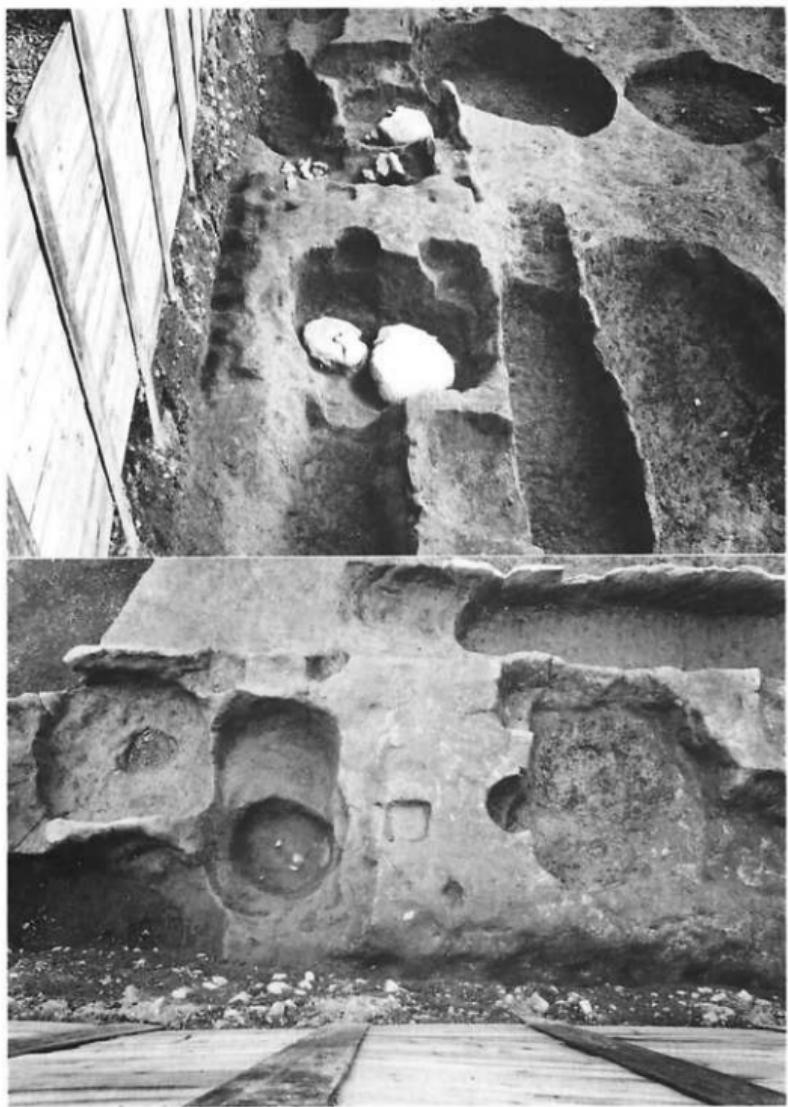


上：A区第2検出面全景 下：S E 196

図版第8

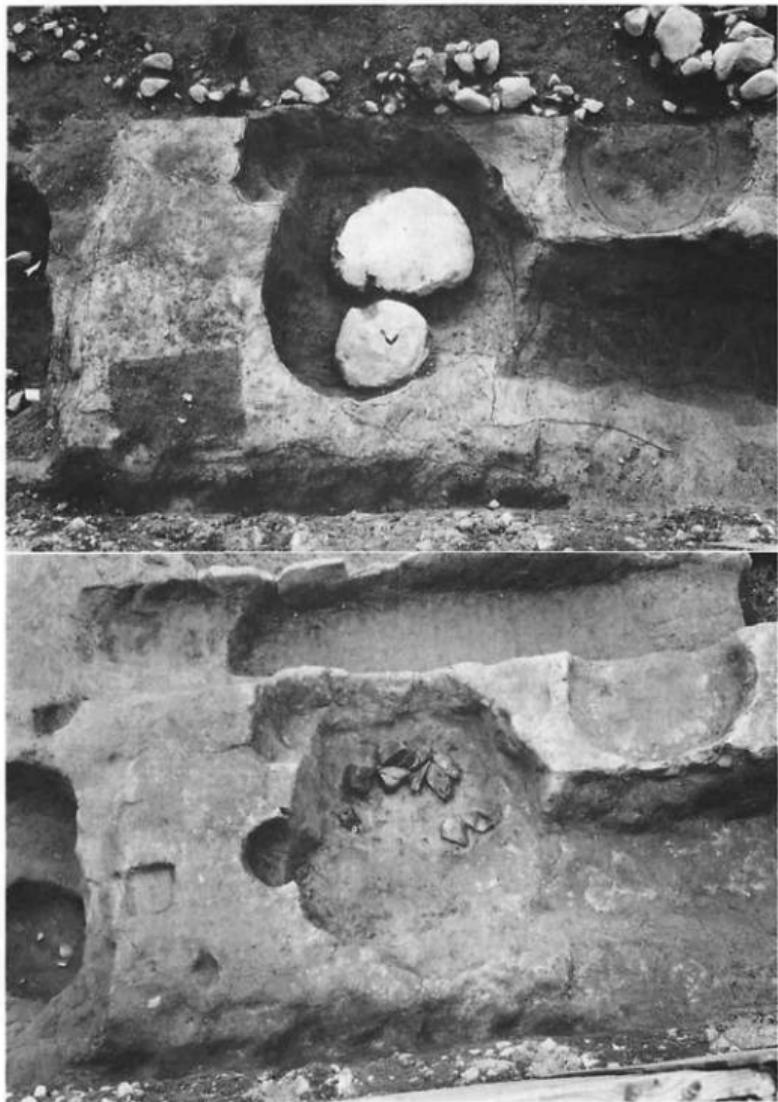


上：門跡検出状態(東から) 下：同 磚石露出状況

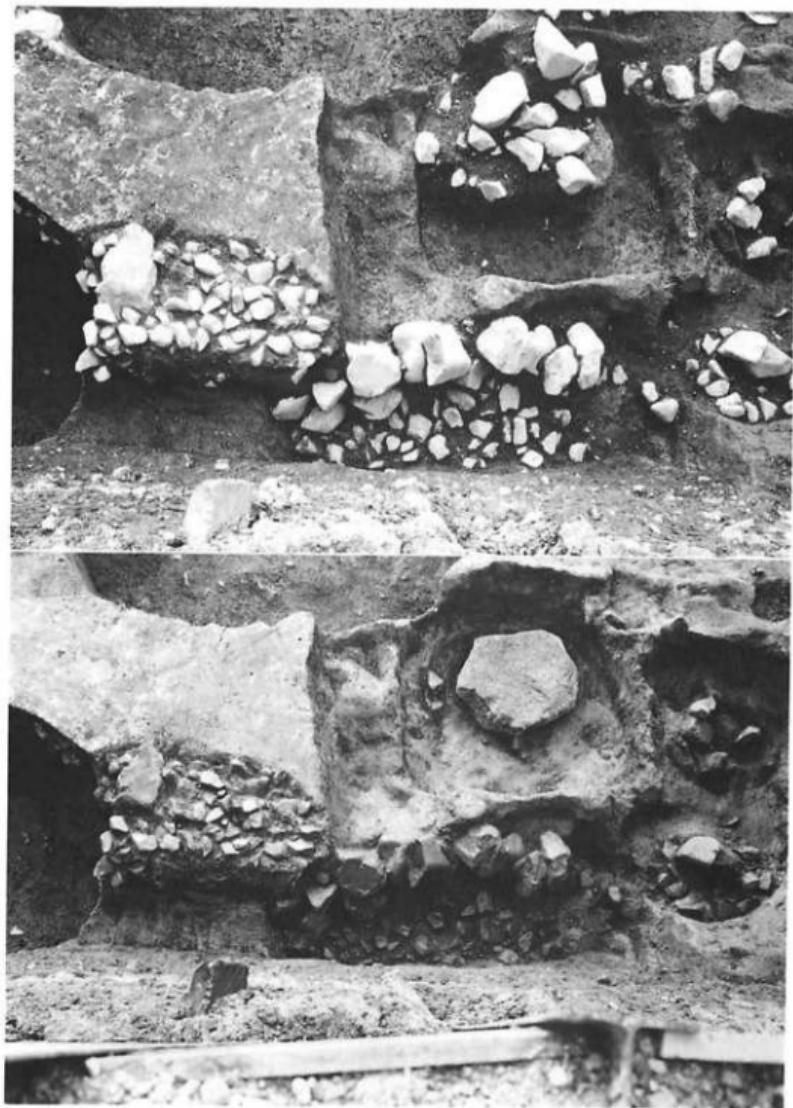


上：門跡検出状況(北から) 下：同 確石取り外し後

図版第10



上：門跡(S B65-a)礎石検出状態 下：同 根石検出状態



上：門跡(S-B65-b)礎石検出状態 下：同 磚石露出状態

図版第12

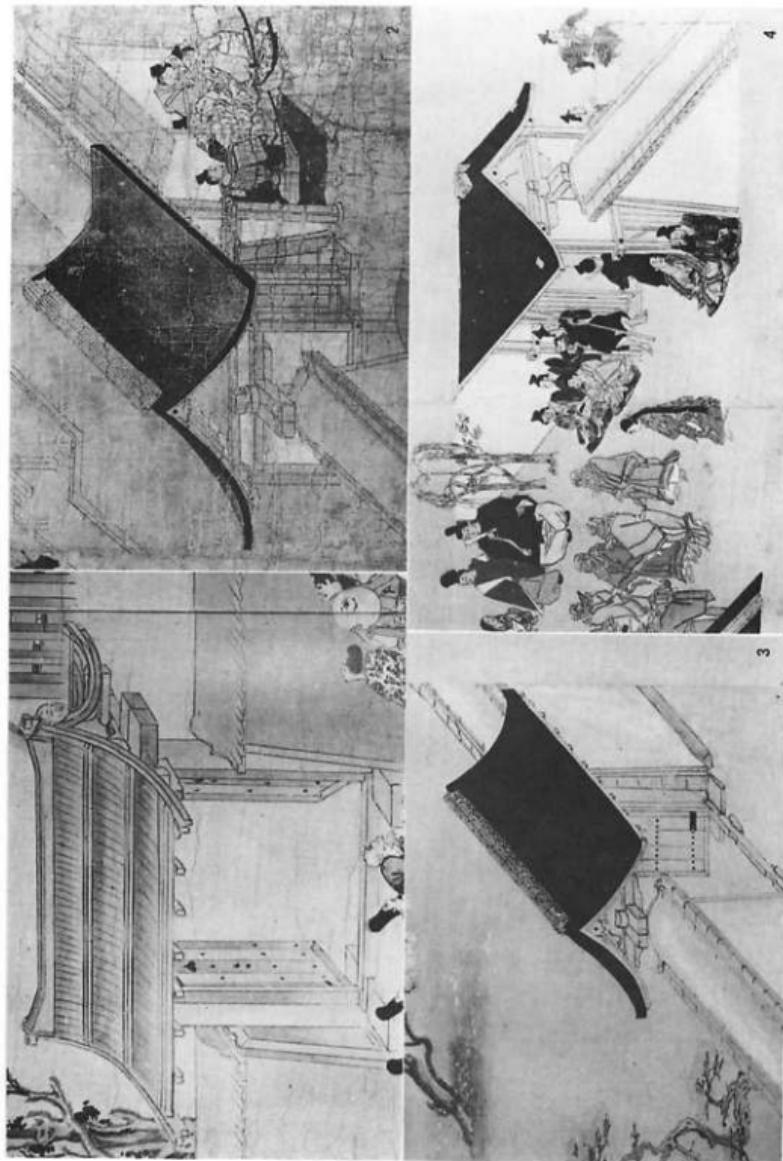


上：新薬師寺東門 下：法隆寺西園院上土門



上：十輪院四脚門 下：法隆寺宗源寺四脚門

図版第14



1.西銀閣「平治物語絵詞(信西巻)静嘉堂蔵・国宝  
3.大宮内府天宗邸「法然上人絵詞(巻二)知恩院蔵・国宝  
2.鳥羽殿「西行物語絵詞(伊勢川)黎明会蔵・重文  
4.押小路御所「法然上人絵詞(巻九)知恩院蔵・国宝

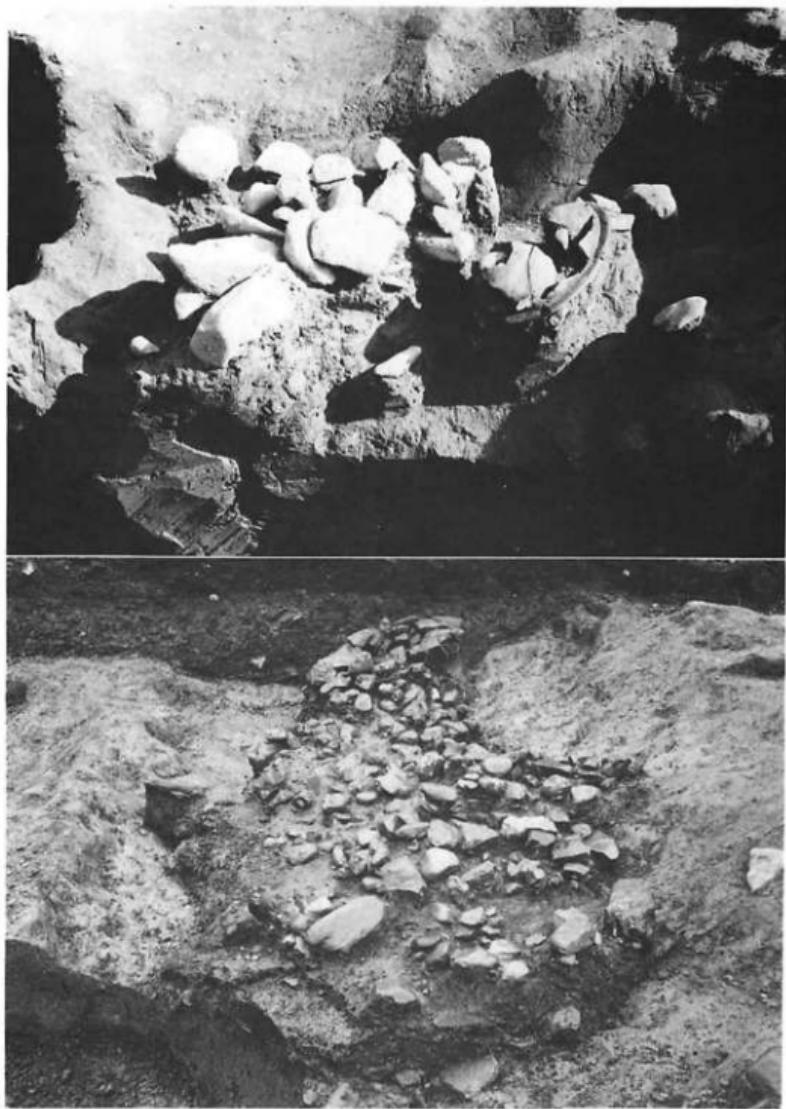


上：SK79遺物検出状態 下：SK114遺物検出状態

図版第16



上：SK70上層遺物検出状態 下：同 下層遺物検出状態

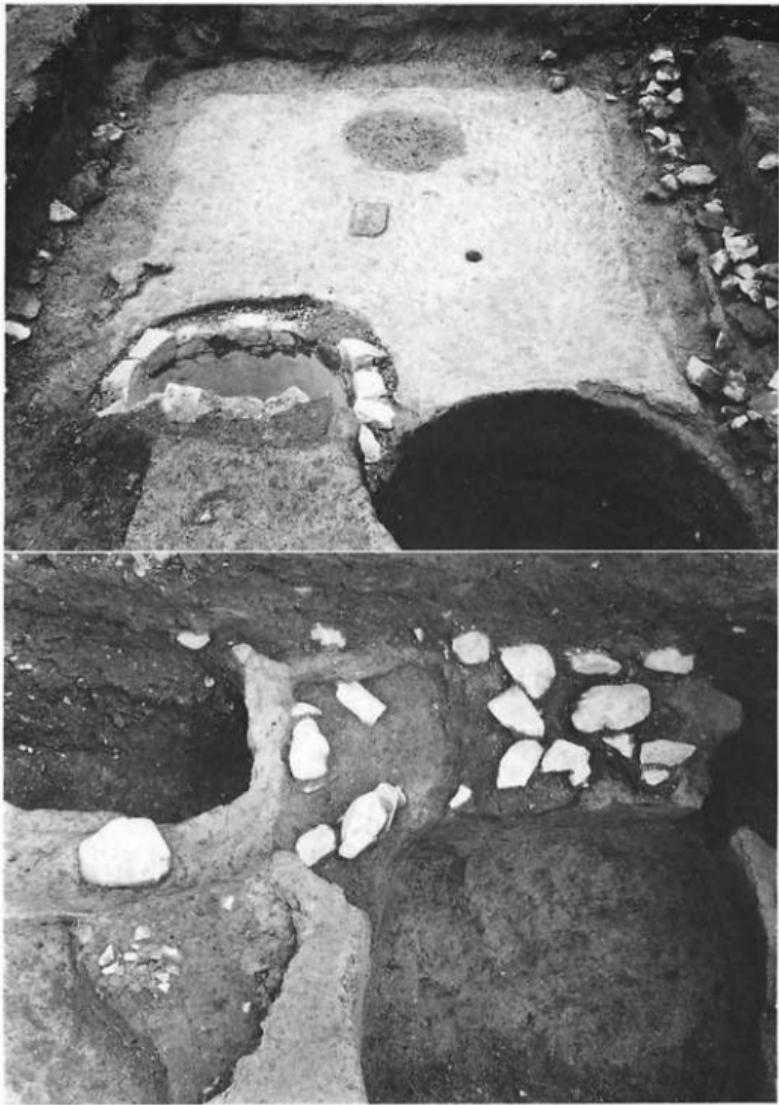


上：SK175遺物検出状態 下：SX118集石検出状態

図版第18

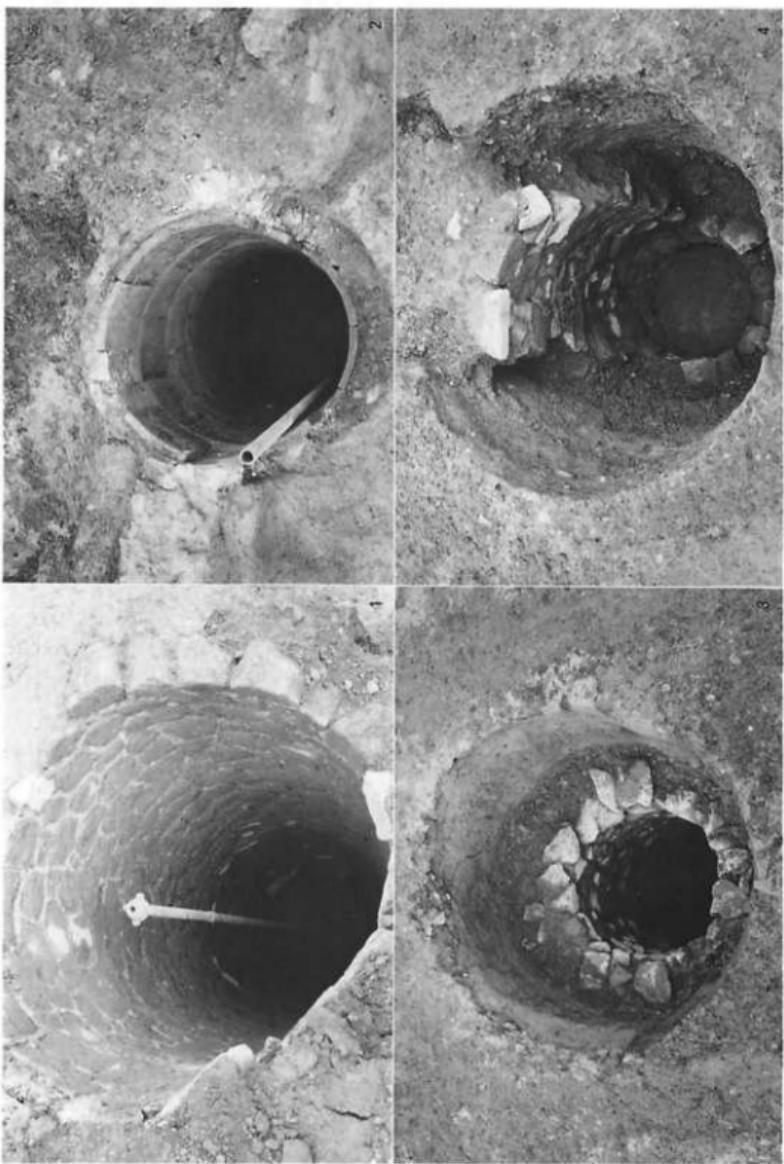


上：B区全景 東から 下：B区全景 西から

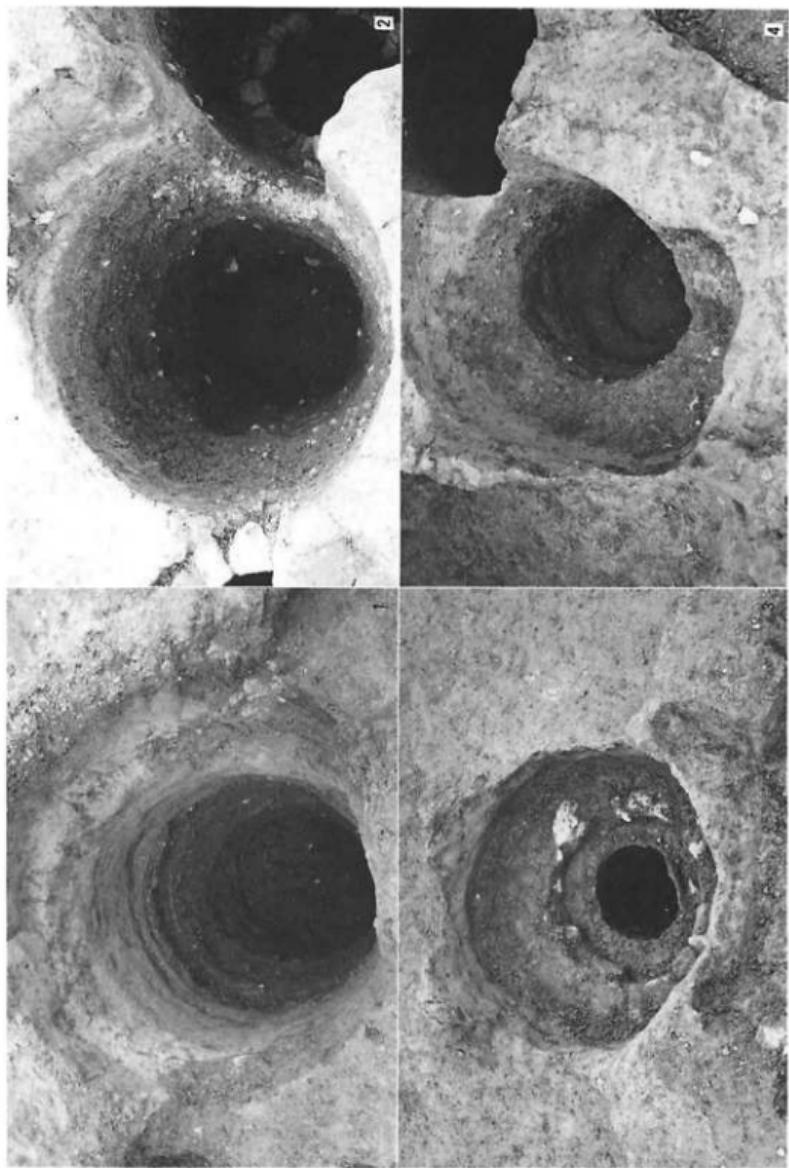


上：S B207 下：S K256

図版第20

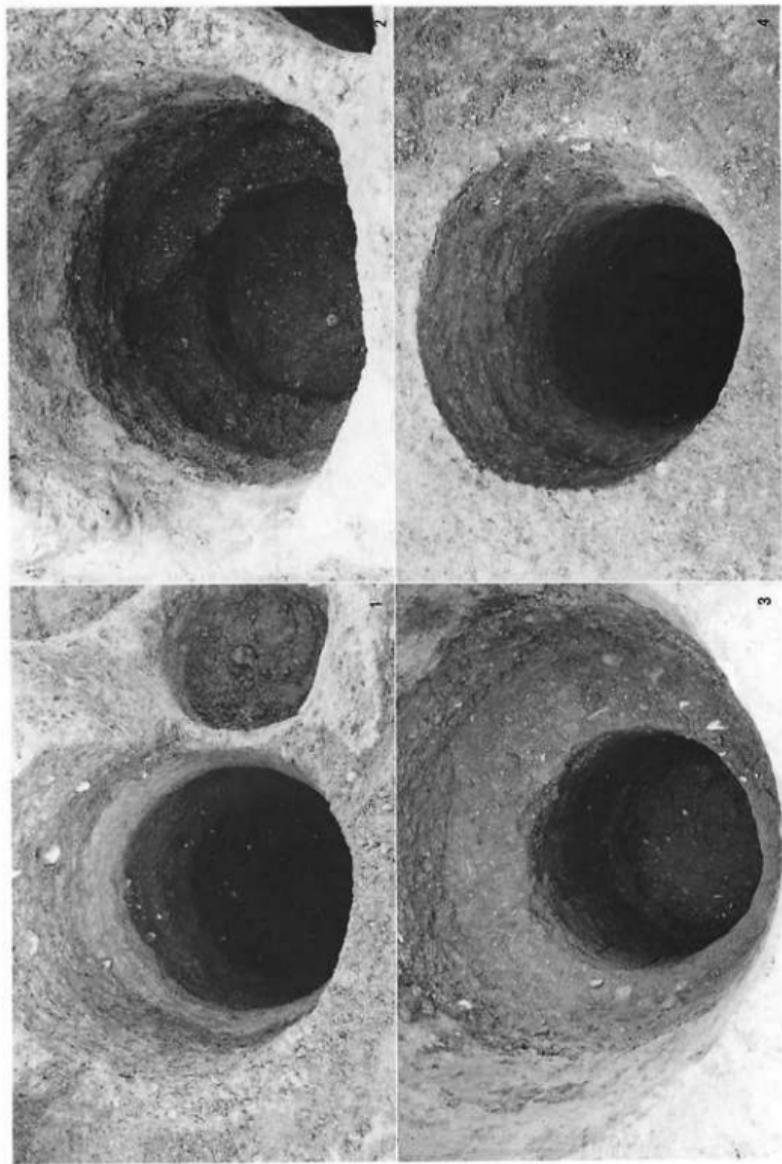


1 : SE230 2 : SE204 3 : SE205 4 : SE206

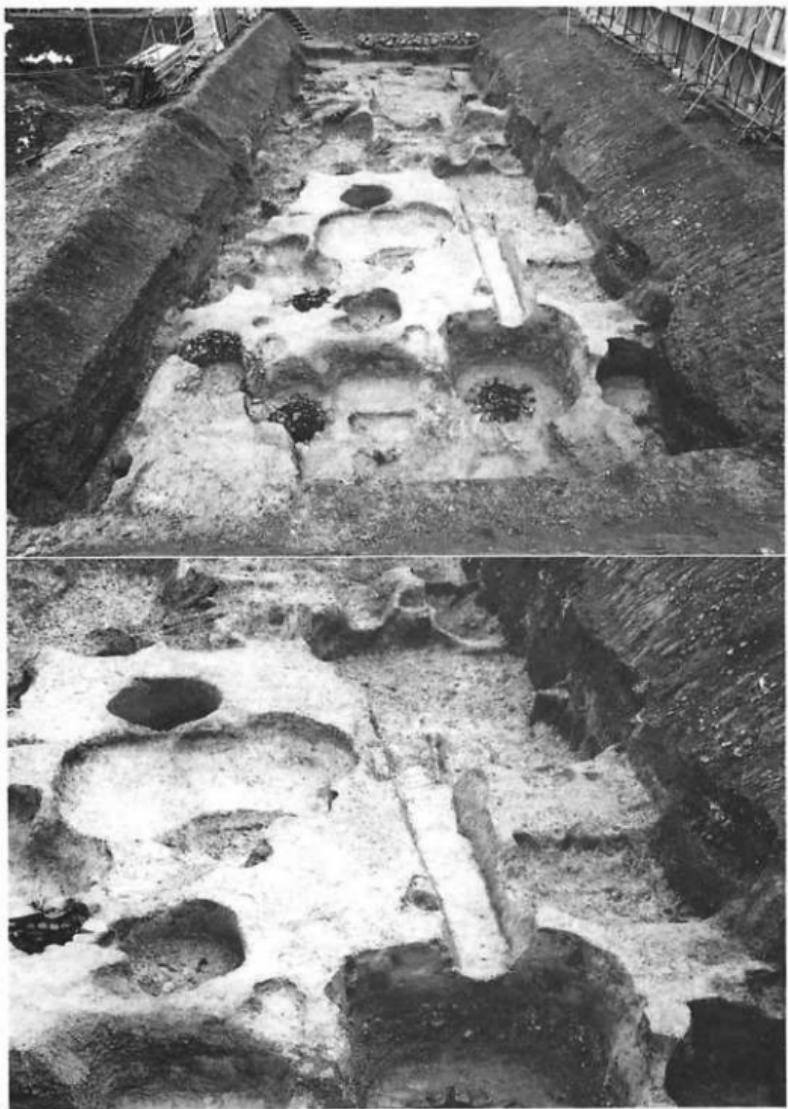


1 : SE255 2 : SE203 3 : SE222 4 : SE254

図版第22

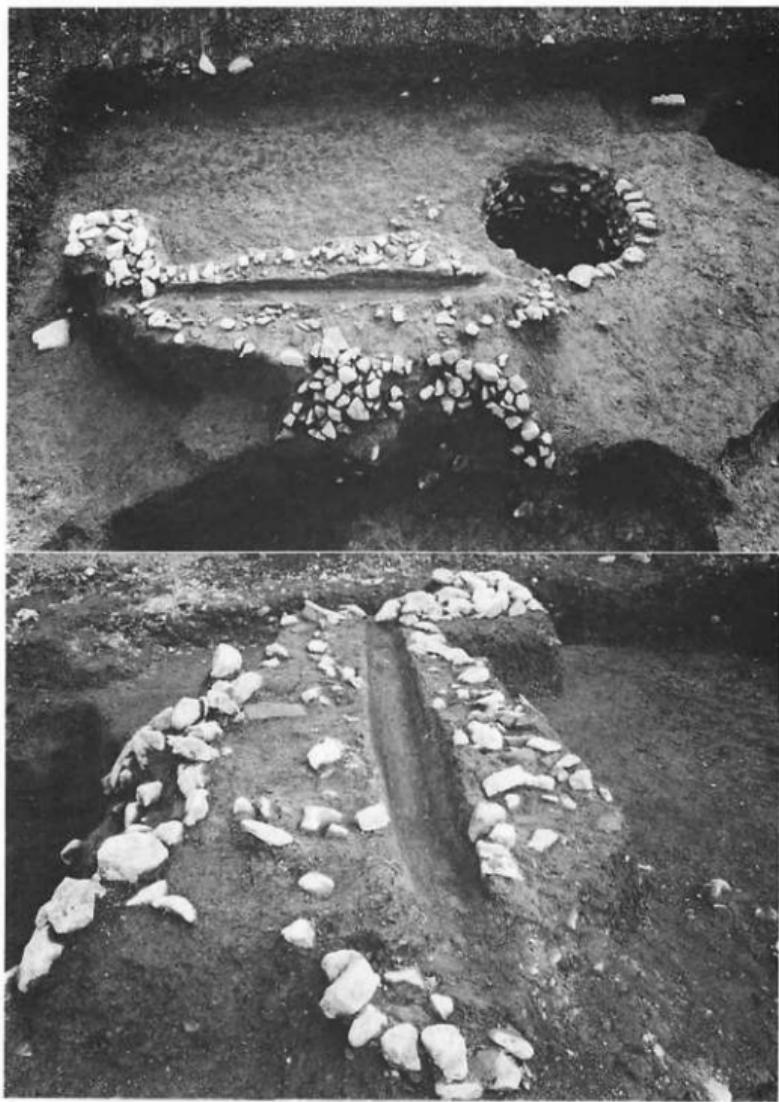


1 : SE209 2 : SE214 3 : SE262 4 : SE204

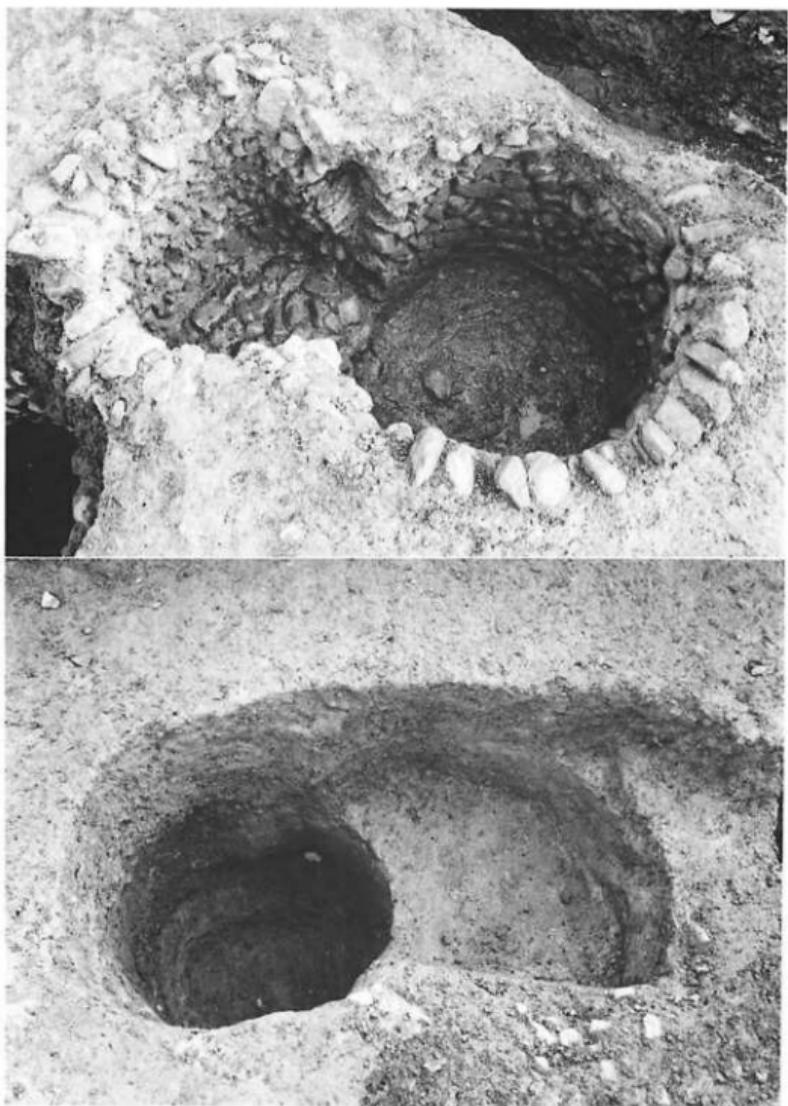


上：C区全景(東から) 下：S D 382(東から)

図版第24

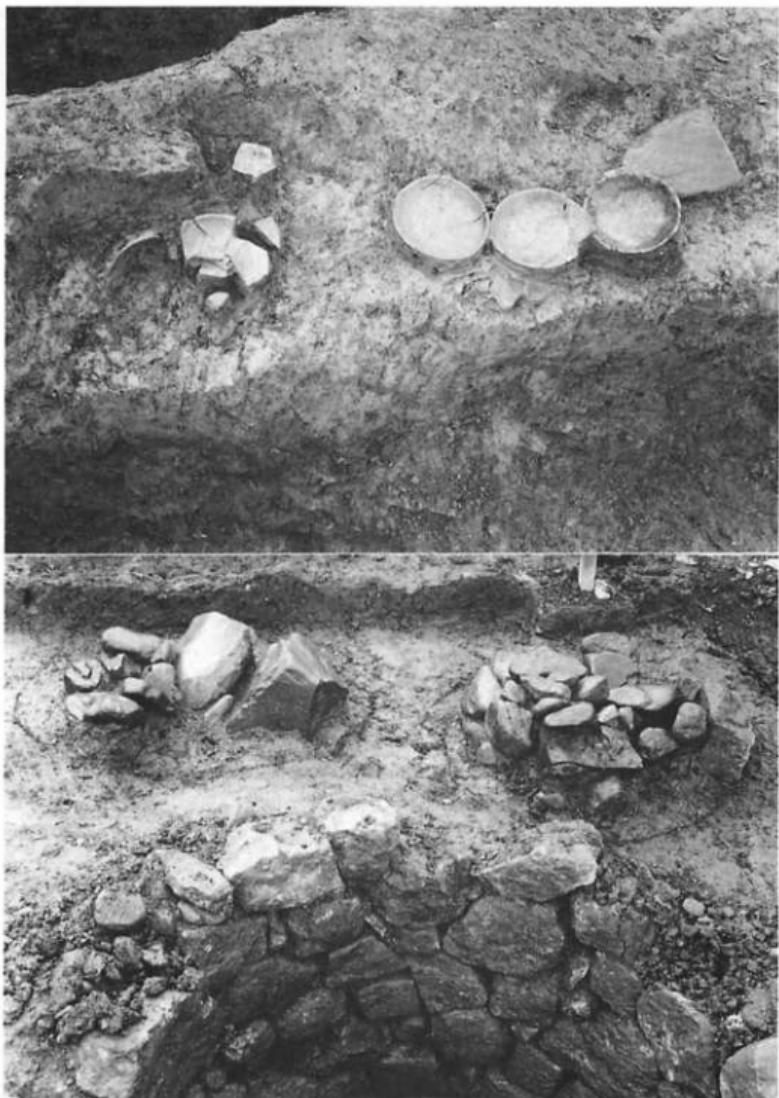


溝状造構(S X 339)集石

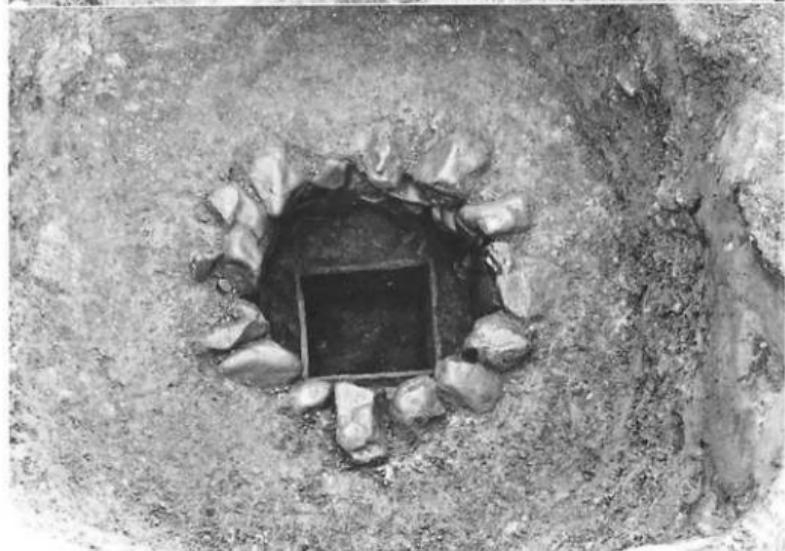


上 : SK 347・364 下 : SK 363

図版第26

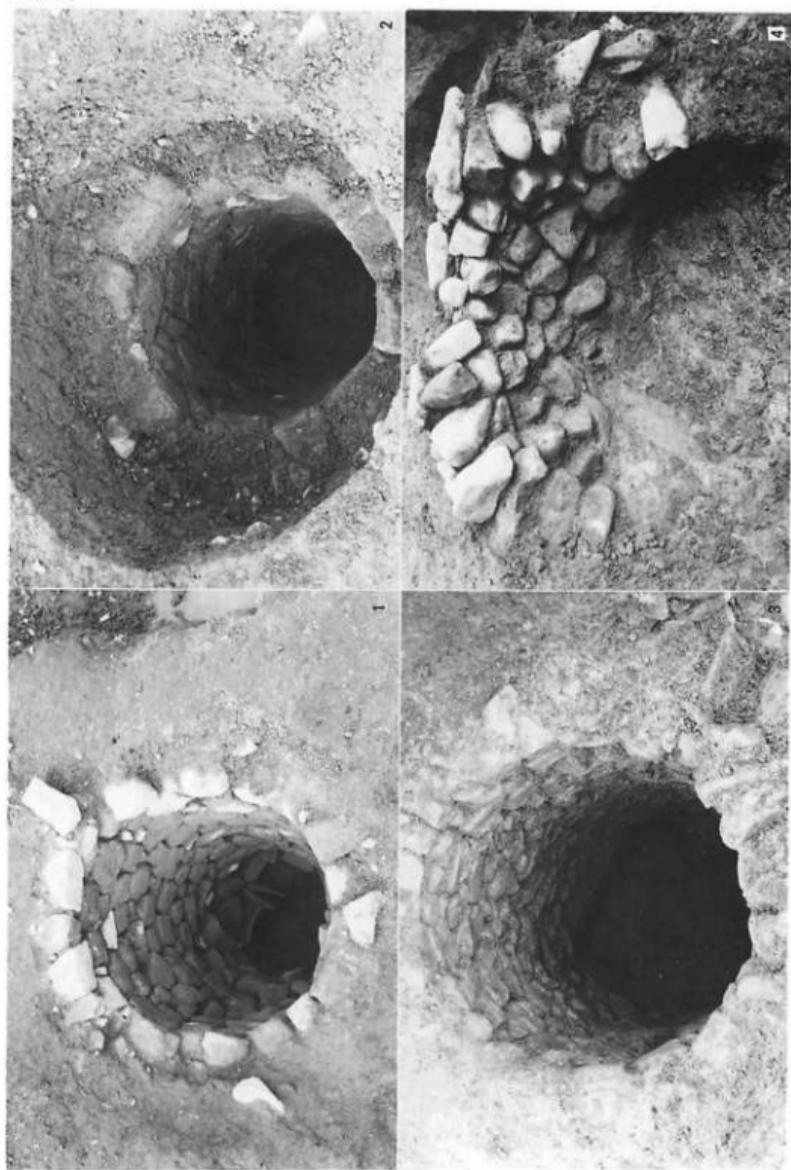


上 : SK 396 下 : SK 353・354

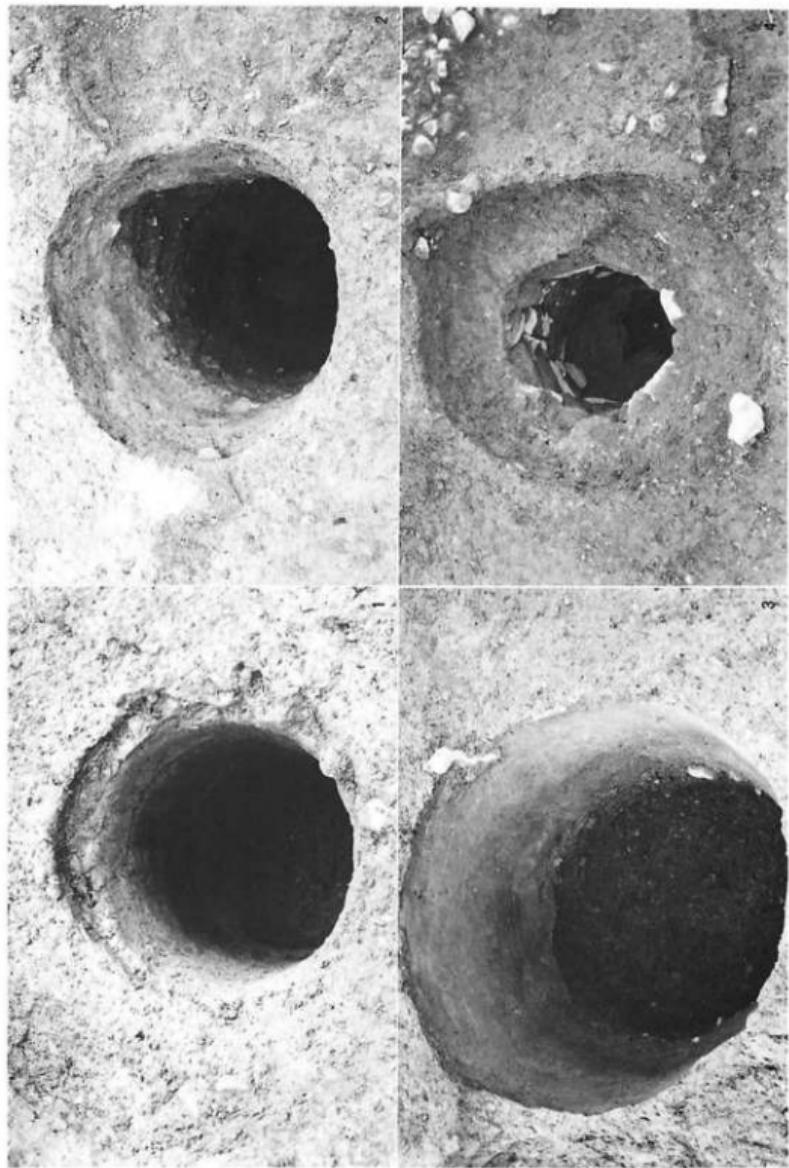


S E 347 上：全景(東から) 下：細部

图版第28



1 : SE 309 2 : SE 365 3 : SE 306 4 : SK 375



1 : SE401 2 : SE330 3 : SE371 4 : SE305

図版第30

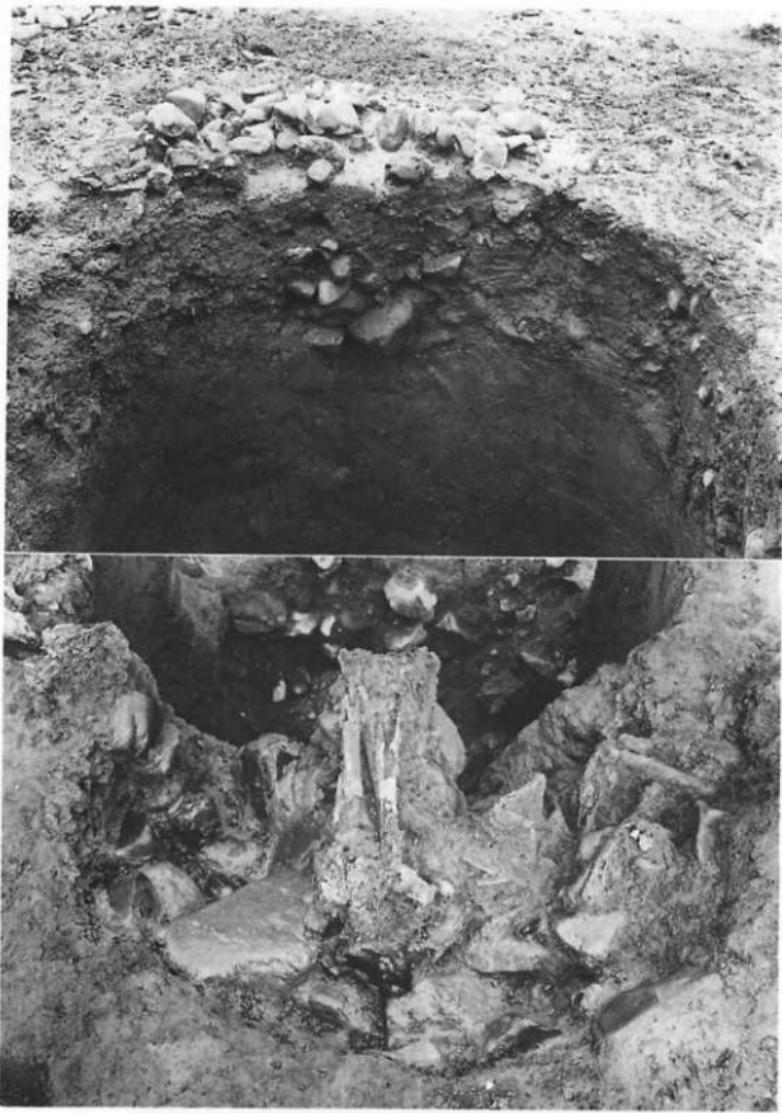


上：A区墓域全景(西から) 下：SD45溝(西から)

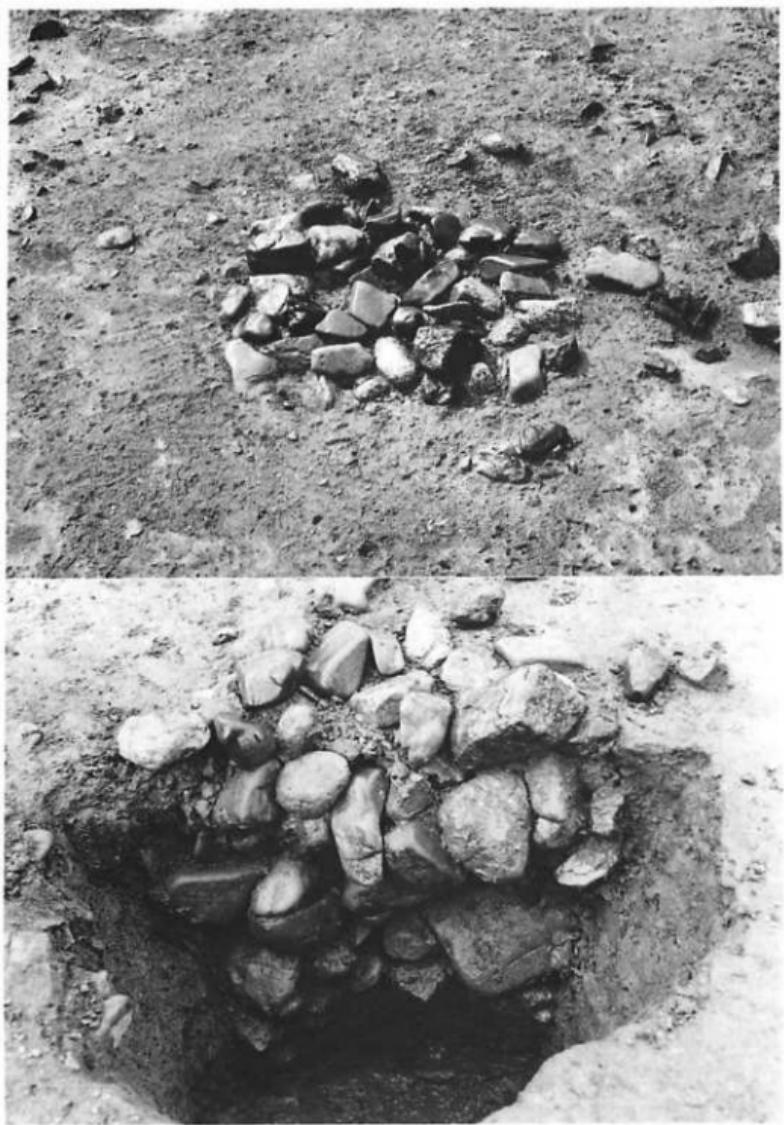


集石墓 上：S X13 下：S X14

图版第32

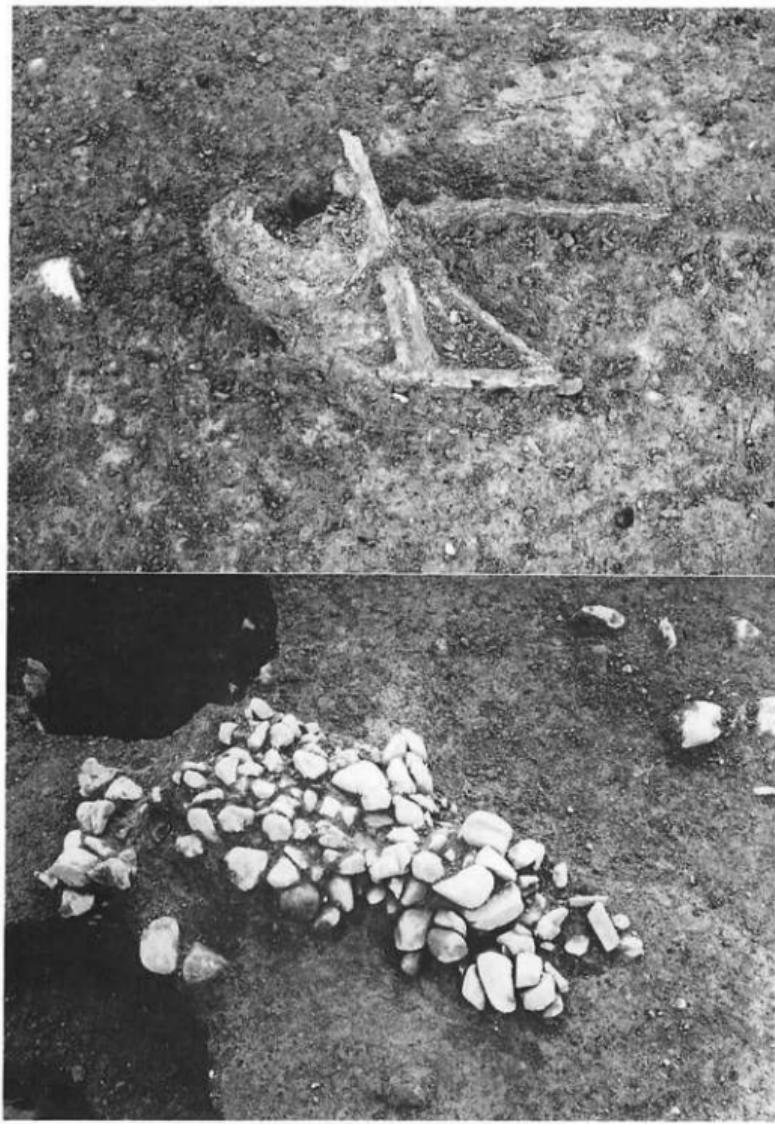


集石墓 上：S X19断面 下：S X19人骨



集石墓 上：S X15平面 下：S X15断面

図版第34



集石墓 上：S X322 下：S X337



土墳墓 S X54

図版第36



土壤墓 上：S X80 下：S X82



土壤墓 上：S X88 下：S X90

図版第38



土壤墓 上：S X131 下：S X138

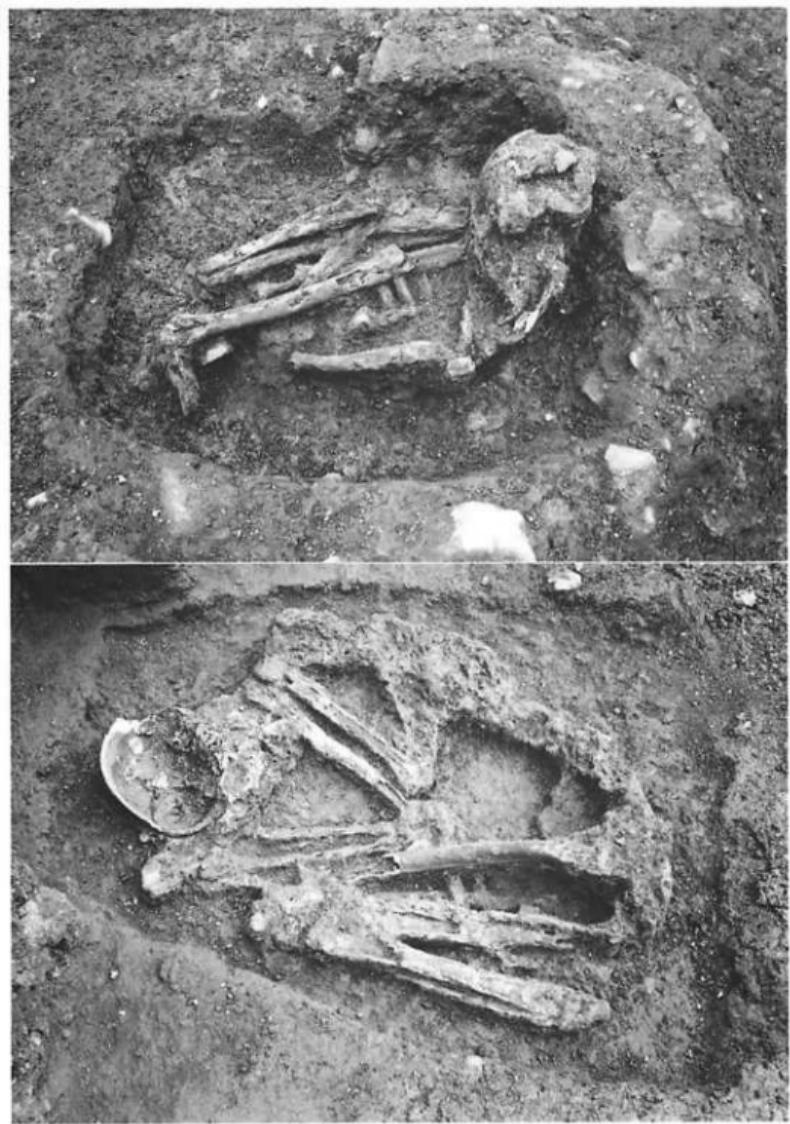


土壤墓 上：S X183 下：竹製散物 矢印は珠数玉

図版第40



土壙墓 上 : S X140 下 : S X311

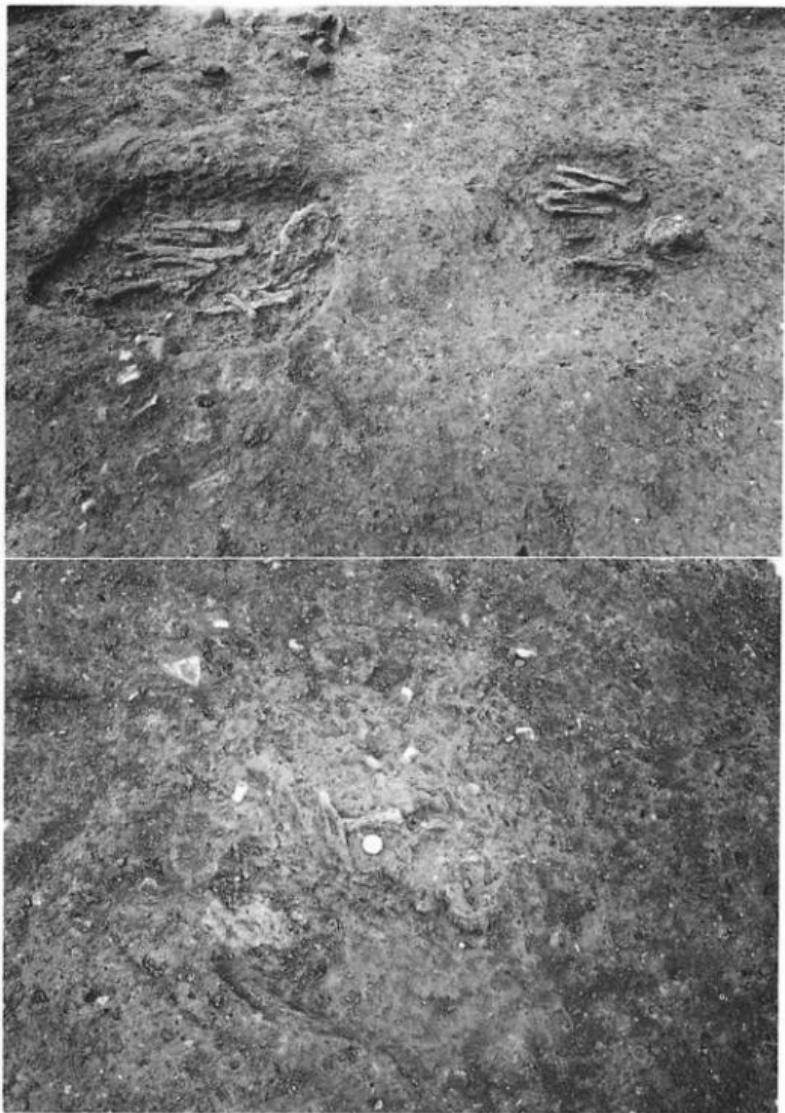


土壤墓 上：S X312 下：S X315

図版第42

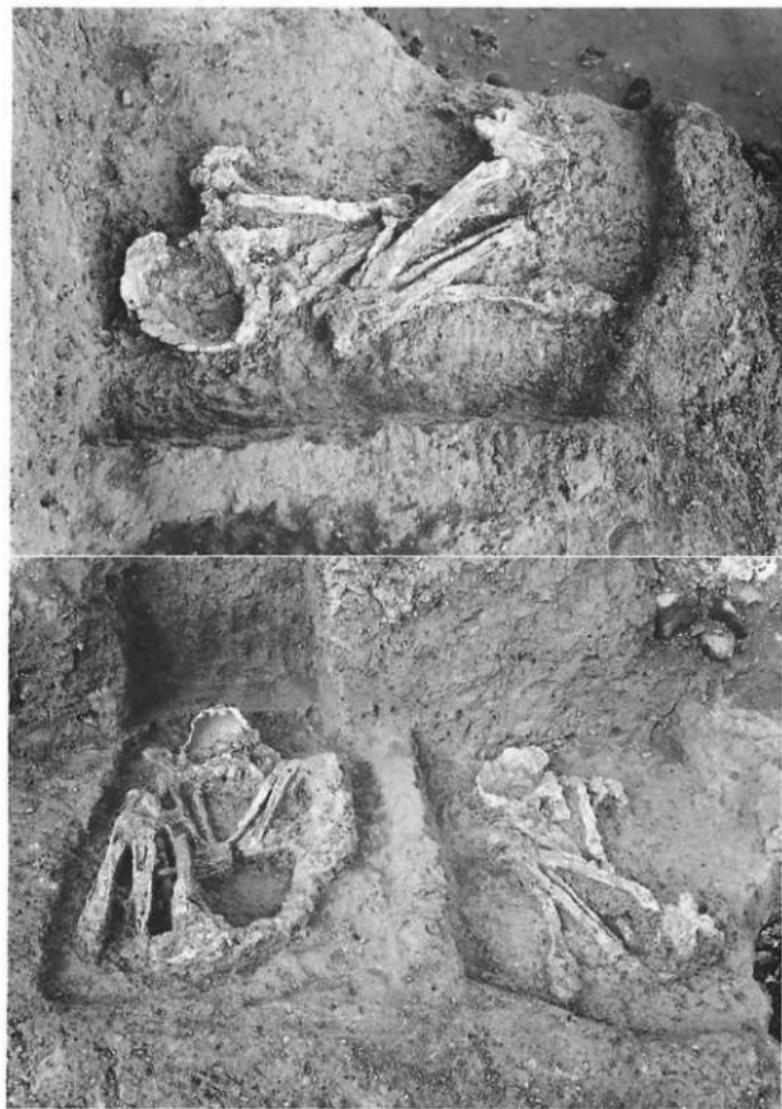


土壤墓 上：S X319 下：S X321



土壙墓 上 : S X 319 + 321 下 : S X 324

図版第44



土壤墓 上：S X 325 下：S X 315・325



土壤墓 上 : S X 326 下 : S X 332

图版第46



土壤墓 上：S X 356 下：S X 359



土墳墓 上 : S X 360 下 : S X 315・360

圖版第48



土壤墓 上：S X 370 下：S X 384

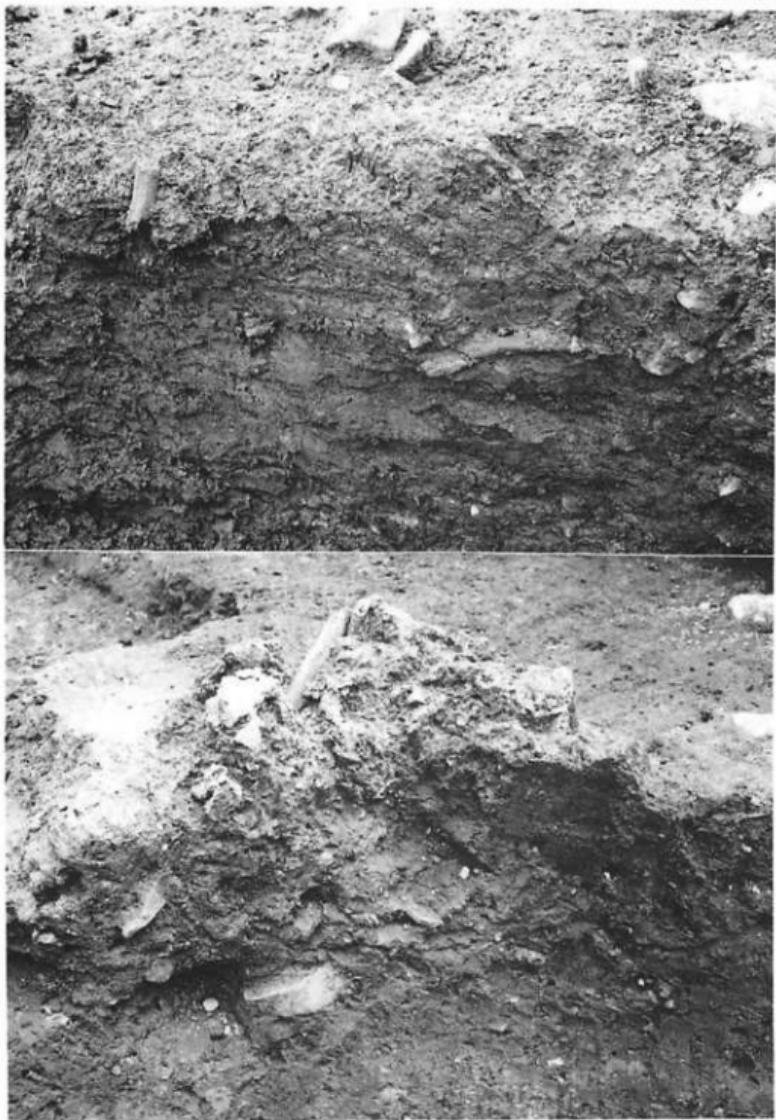


土壤墓 上：S X 387 下：S X 399

図版第50



上：火葬墓 S X372 下：二次堆積の人骨 S D45中



二次堆積の骨　上：S X336　下：S X81

図版第52

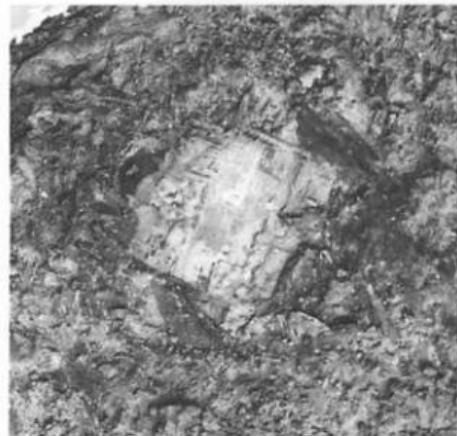


上：二次堆積の人骨 S X 334 下：犬の骨 S X 188



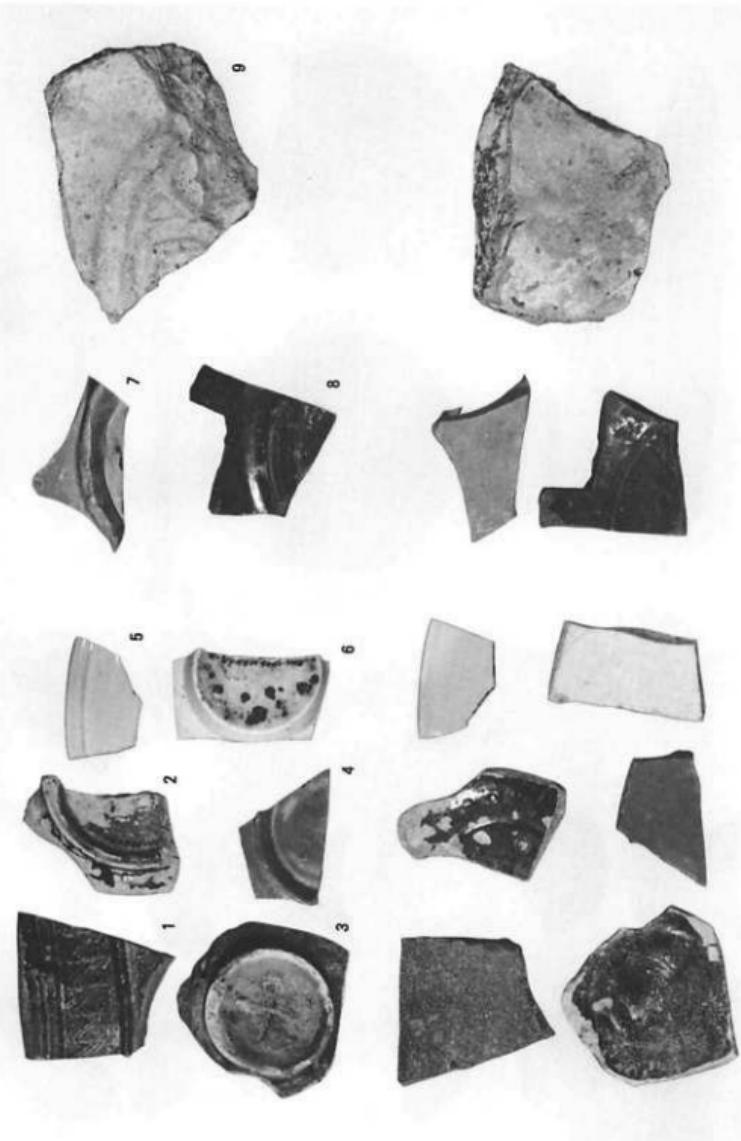
SX54 人骨取上げ作業

図版第54



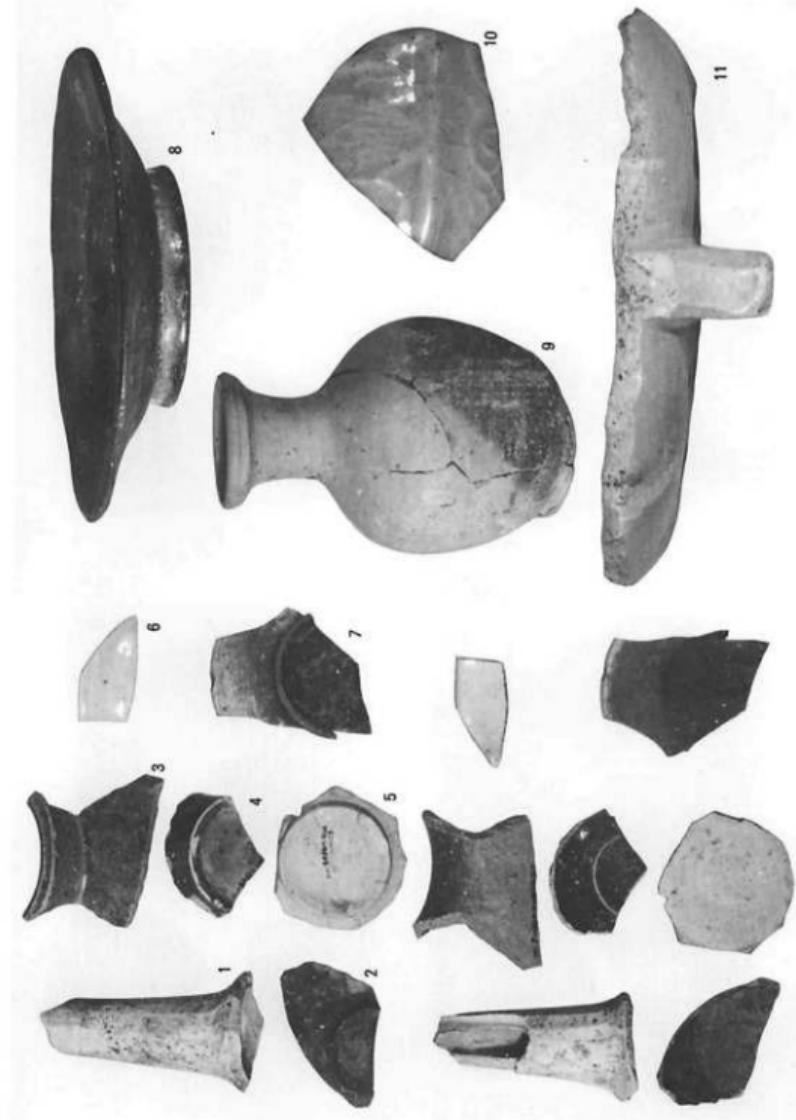
1

上：五輪石出土状態 1・2：S X399出土竹製敷物 3：S X183出土珠数玉  
4：S X356出土ビーズ玉

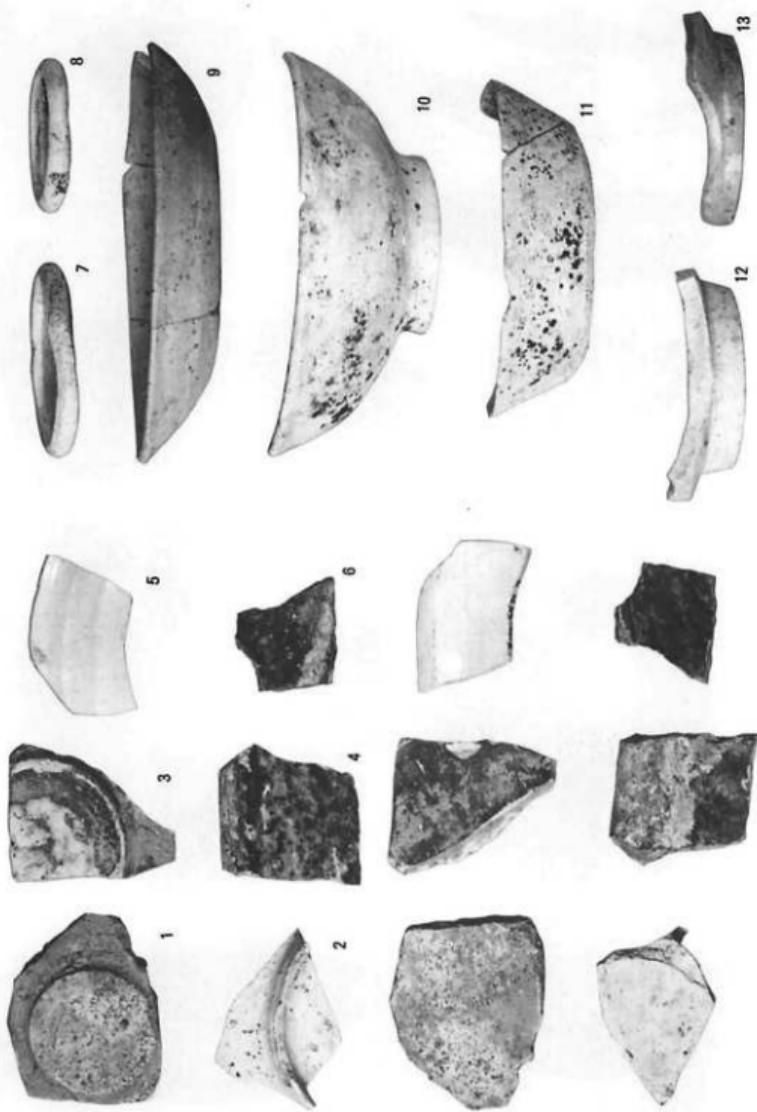


S B68・69(1～6), S B65-b(7～9)出土遺物

圖版第56



左：SX171出土遺物 右：絲織物器・須惠器・青白磁

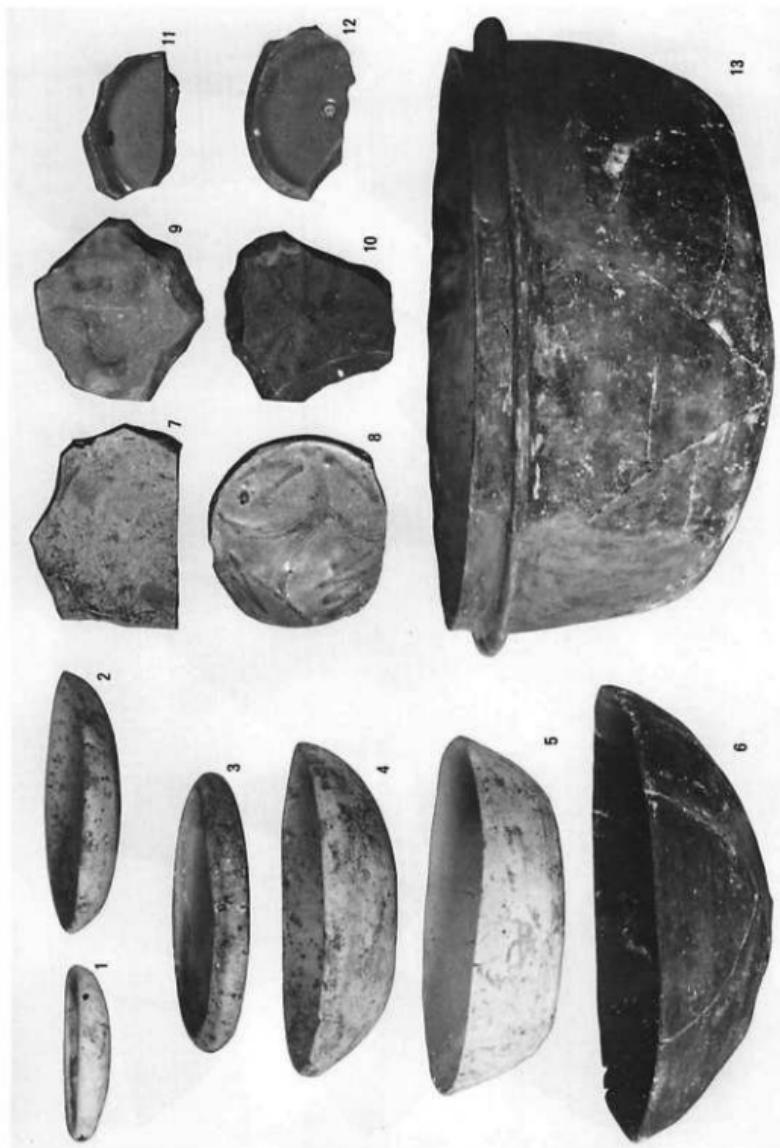


SK71(1~6)・SK79(7~13)出土遺物

图版第58

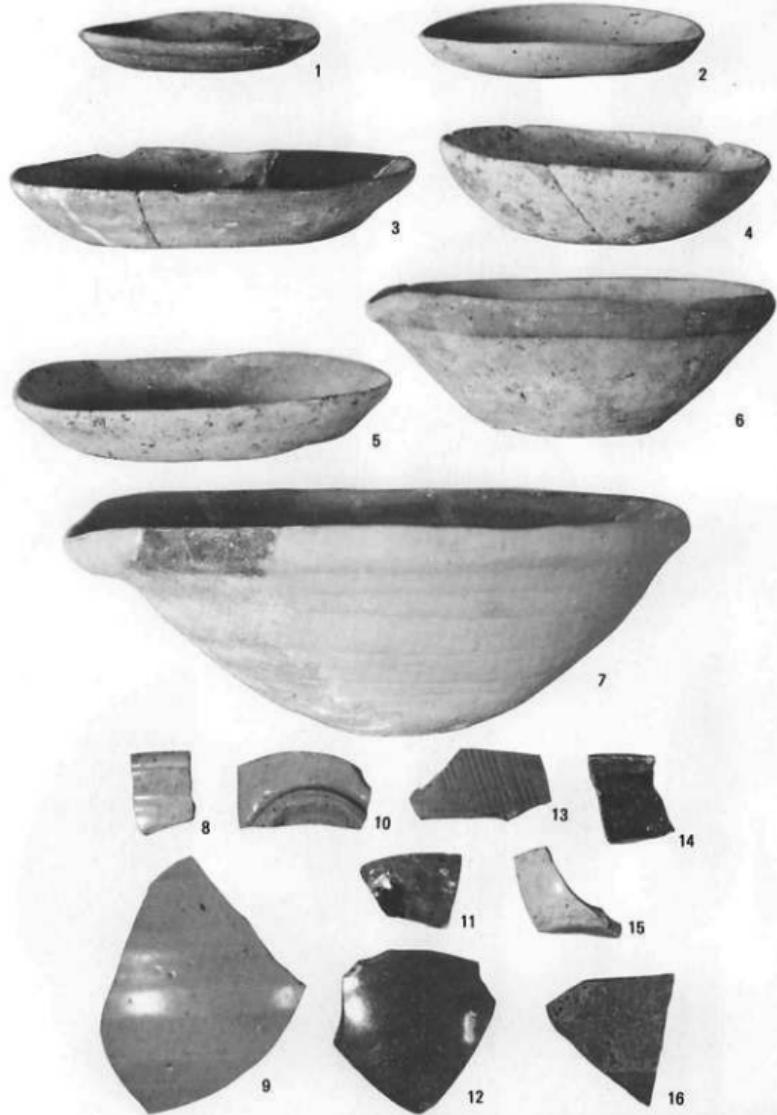


S K71出土遗物

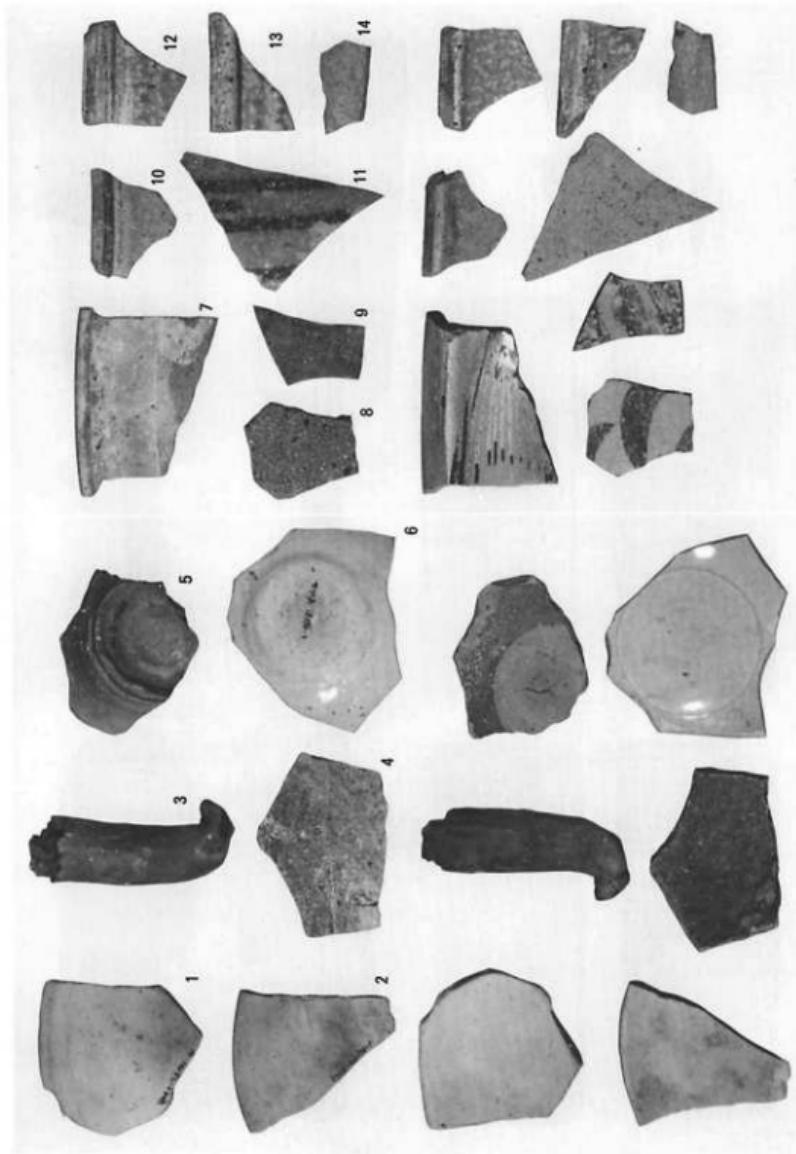


SK 101出土遺物(1~6)・SX 188出土遺物(7~13)

図版第60

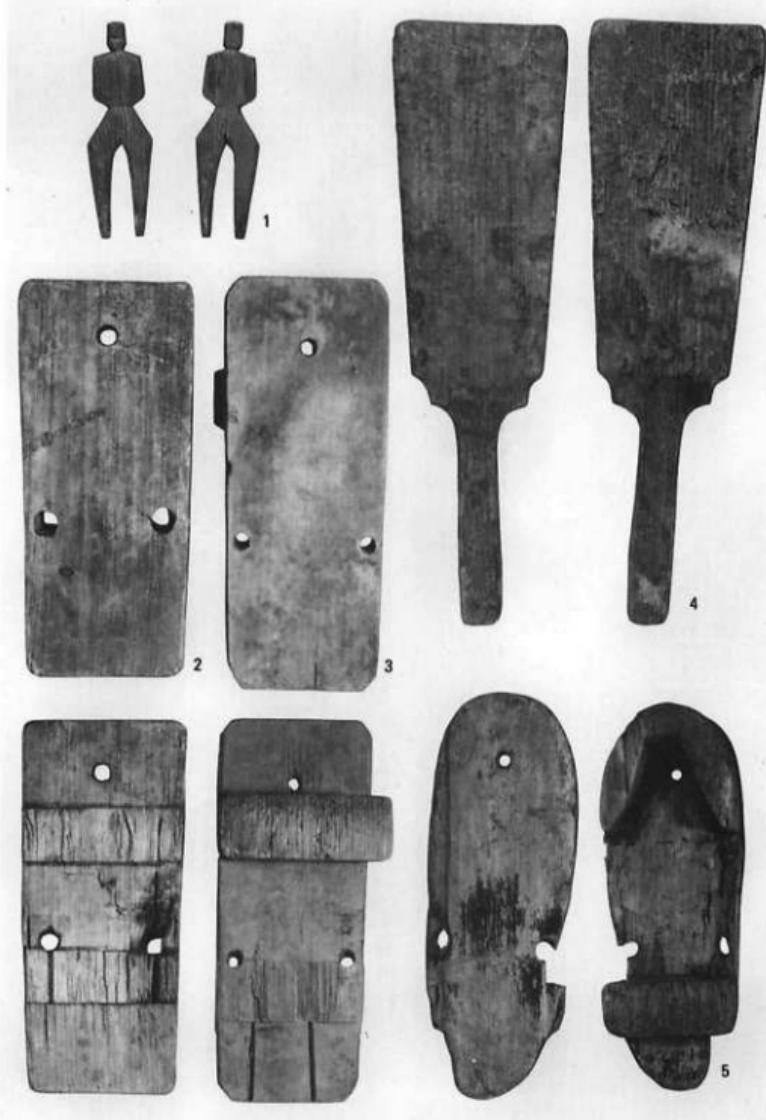


SK70出土遺物

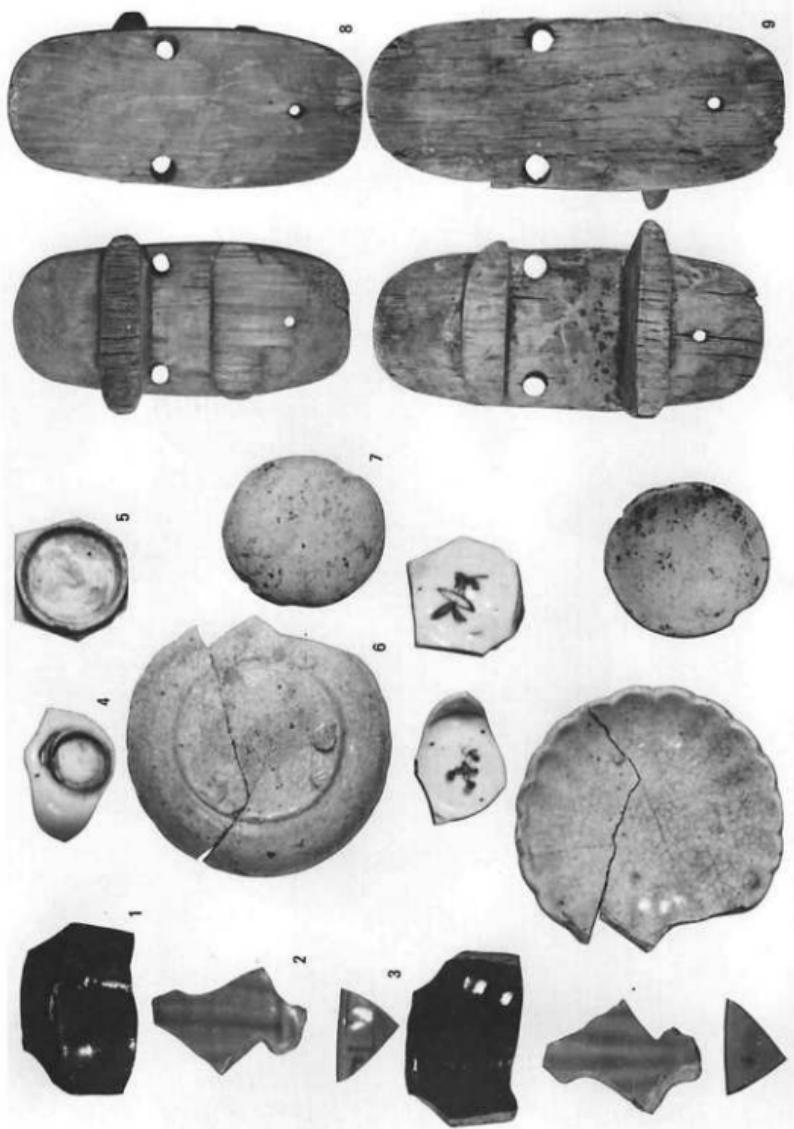


SE 196出土物(1~6)・磁社窯陶器(7~14)

図版第62



S K 327出土木製品



SE374出土木製品・陶器

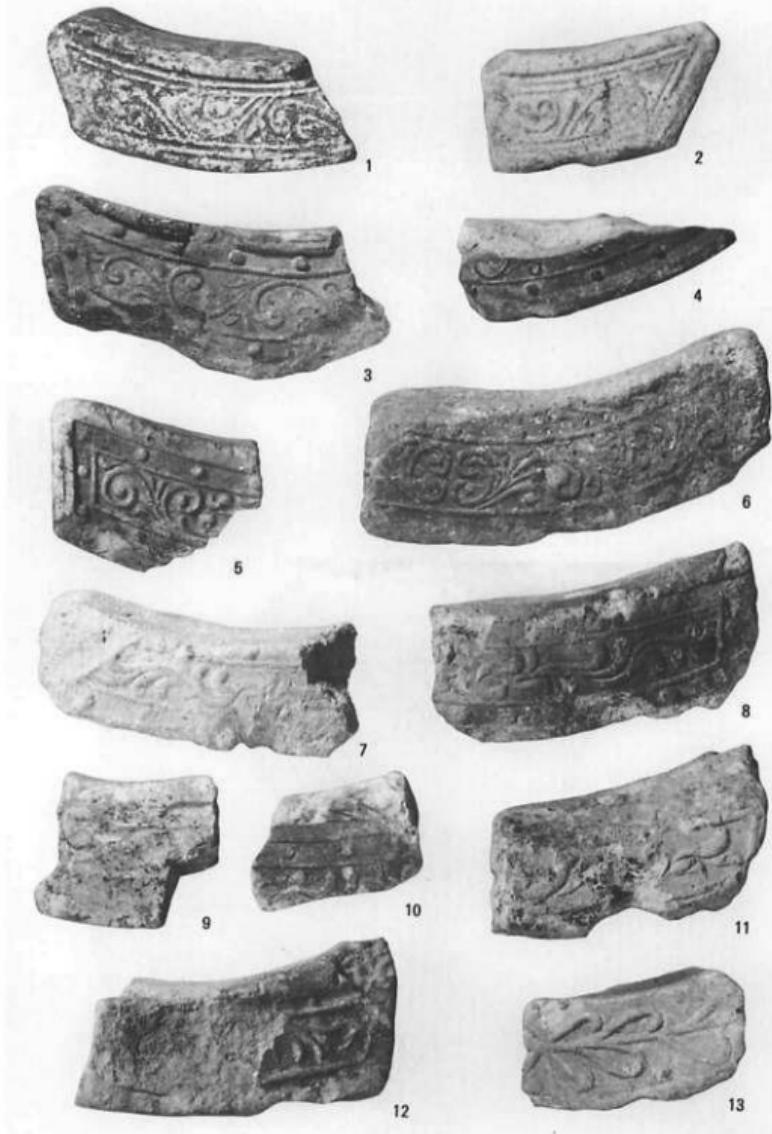


出土軒瓦(1)

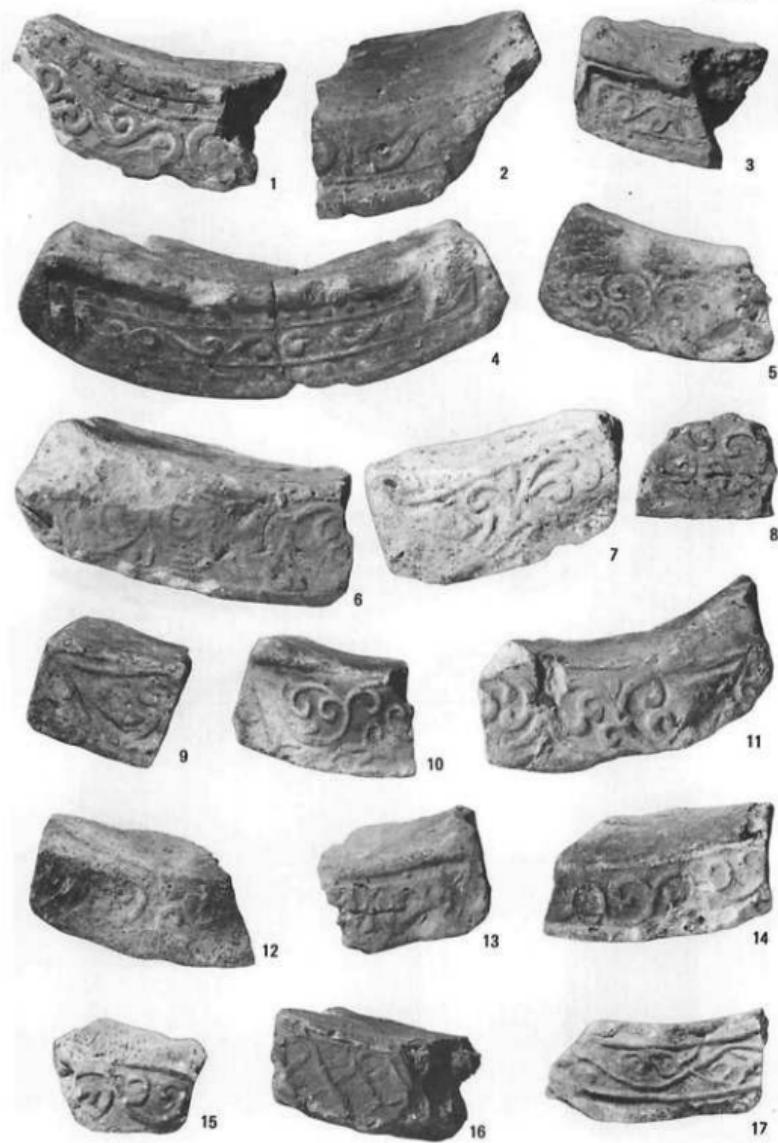


出土軒丸瓦(2)・SK85出土軒瓦

図版第66

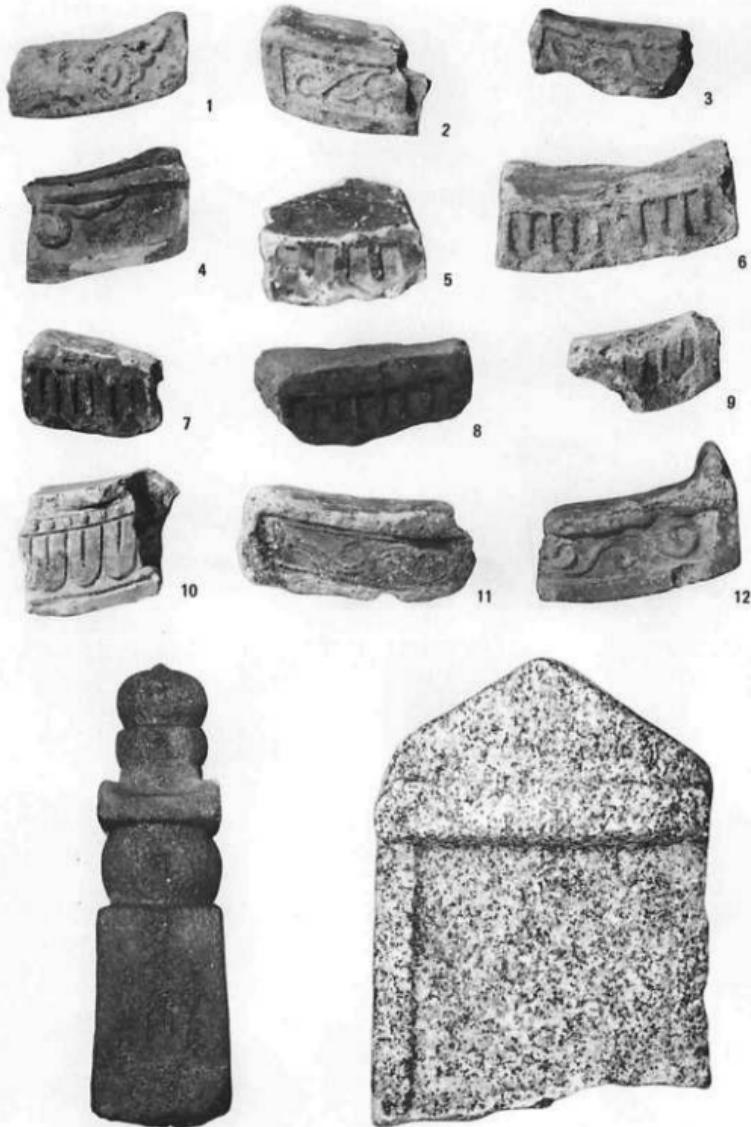


出土軒平瓦(1)

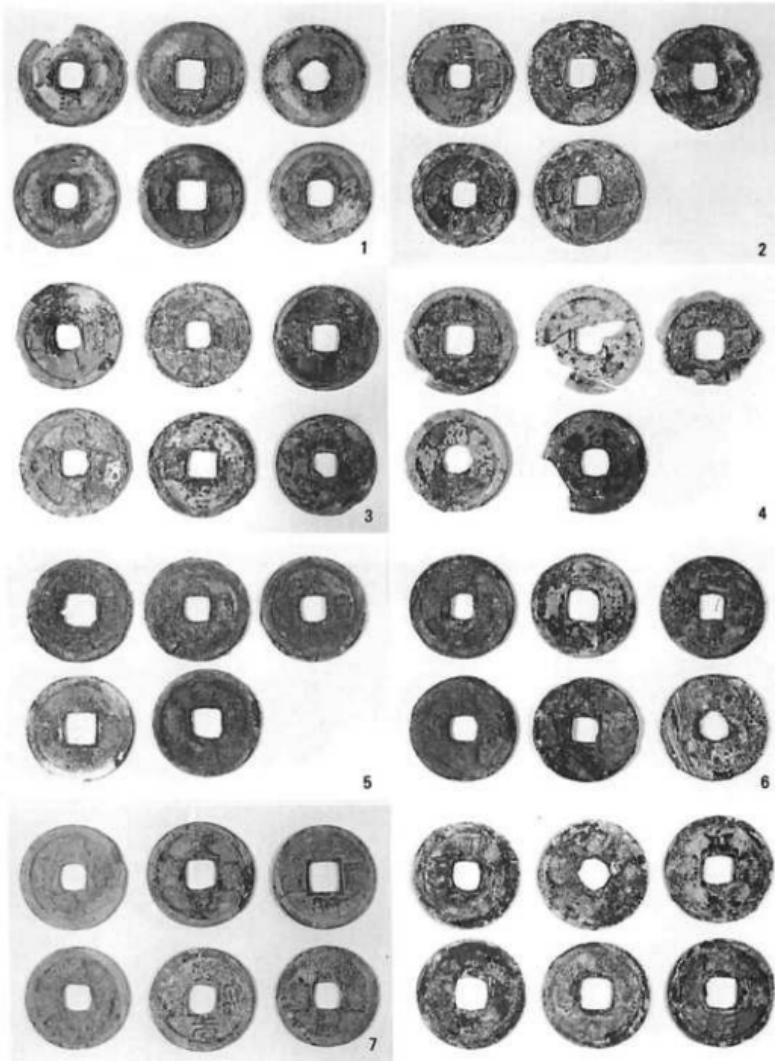


出土軒平瓦(2)

图版第68

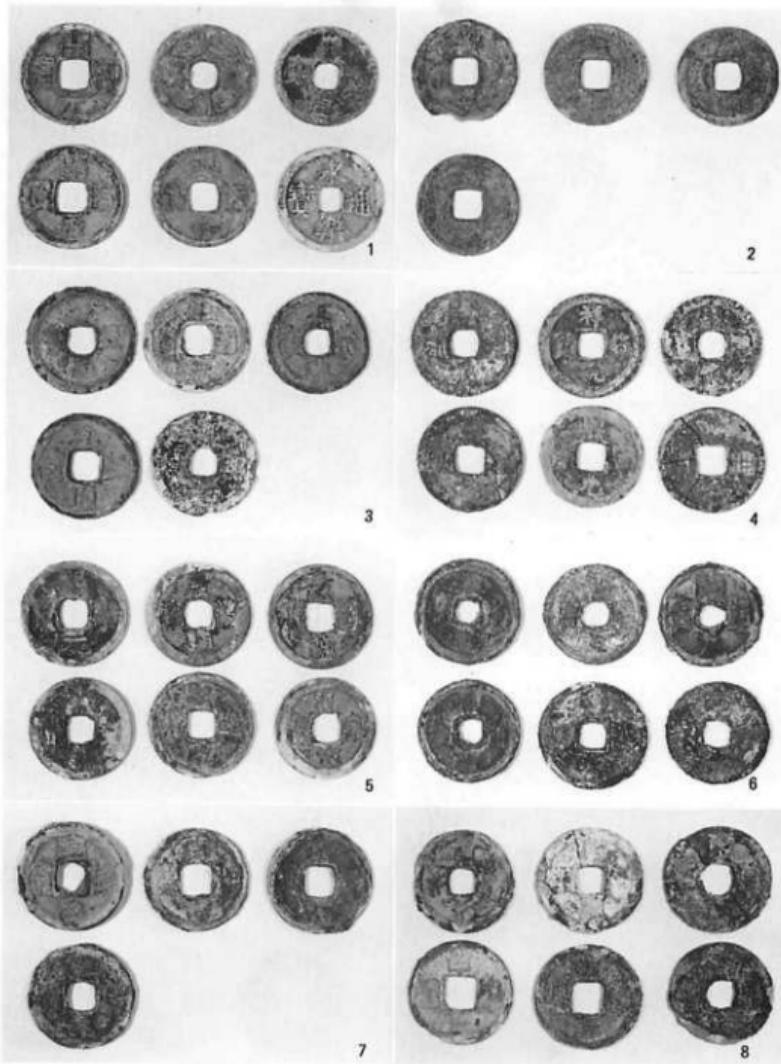


出土軒平瓦(2)・五輪石・板碑



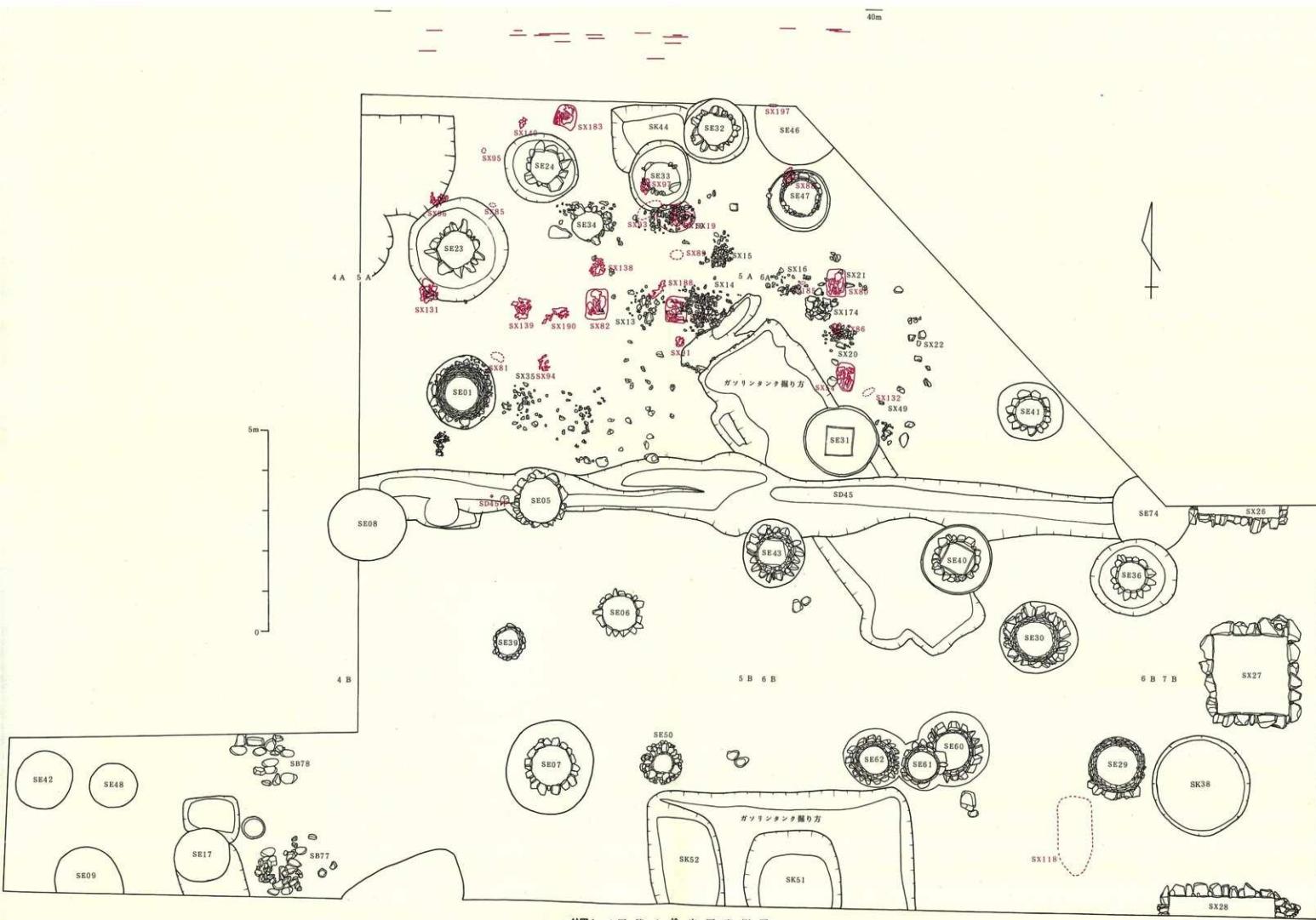
出土六文錢

1 : S X90    2 : S X97    3 : S X131    4 : S X140  
5 : S X311    6 : S X313    7 : S X315    8 : S X320



出土六文錢

1 : S X 324 2 : S X 336 3 : S X 356 4 : S X 359  
5 : S X 362 6 : S X 376 7 : S X 387 8 : 3 A 15区



付図1. A区 第1検出面実測図

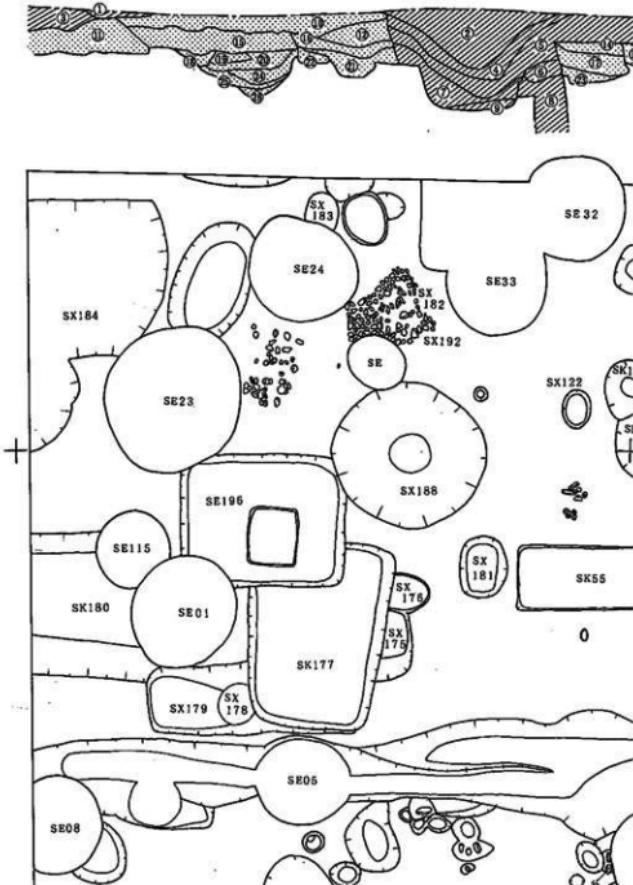
A区南壁土層

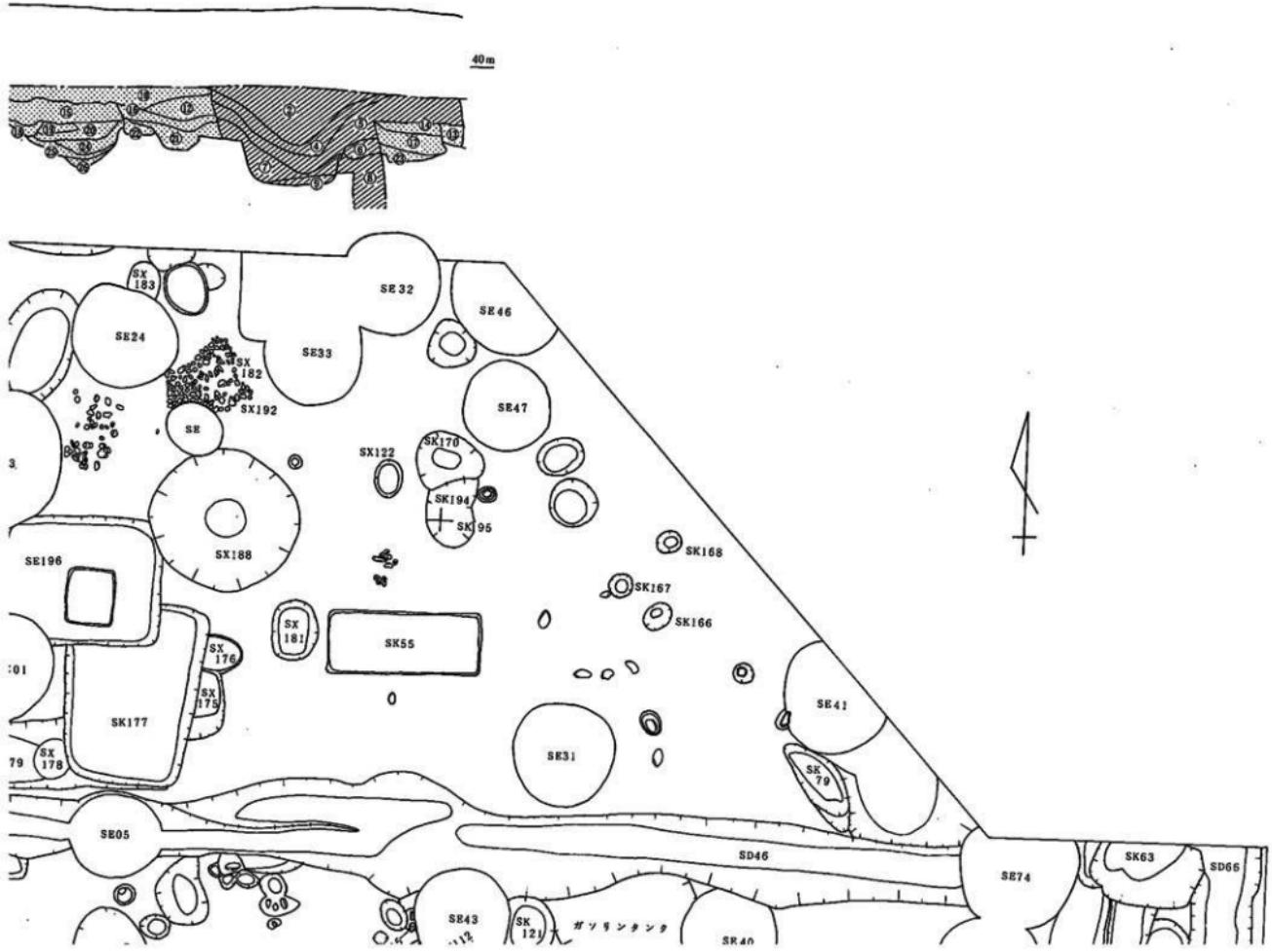
- ① 暗灰褐色土
- ② 黄褐色粘質土
- ③ 井 戸 (S E62)
- ④ 炭混り暗灰色粘質土
- ⑤ 井 戸 (S E09)
- ⑥ 灰 褐 色 土
- ⑦ 浅 褐 色 土 (磚, 土師器含む)
- ⑧ 插 り 方
- ⑨ 茶褐色土 (地山粘質土ブロック含む)
- ⑩ 灰 褐 色 土
- ⑪ 灰褐色土
- ⑫ 燃土, 炭互層
- ⑬ 茶褐色粘質土
- ⑭ 暗茶褐色土
- ⑮ 暗灰褐色粘質土
- ⑯ 炭混り暗灰色土
- ⑰ 炭, 暗灰色砂質土互層
- ⑱ 暗灰褐色土 (土師器含む)
- ⑲ 茶褐色土
- ⑳ 暗灰色粘質土
- ㉑ 灰褐色土 (燃土の混入あり)
- ㉒ 暗茶褐色土 (石, 黄色粘質土ブロック含む)
- ㉓ 暗茶褐色粘質土 (土師器多く含む)
- ㉔ 灰 色 土
- ㉕ 暗灰褐色土
- ㉖ 暗灰色粘質土
- ㉗ 暗褐色土 (黄色土ブロック含む)
- ㉘ 明茶褐色土 (土師器の小片含む)
- ㉙ 茶褐色粘質土
- ㉚ 炭 層
- ㉛ 黑褐色土
- ㉜ 暗褐色土
- ㉝ 暗灰褐色土 (地山粘質土ブロック含む)
- ㉞ 暗褐色粘質土
- ㉟ 背褐色粘質土
- ㉟ 暗灰色粘質土
- ㉟ 暗灰色粘質土
- ㉟ 暗灰色土
- ㉟ 茶褐色土
- ㉟ 灰褐色土
- ㉟ 黄褐色土
- ㉟ 暗灰褐色粘質土

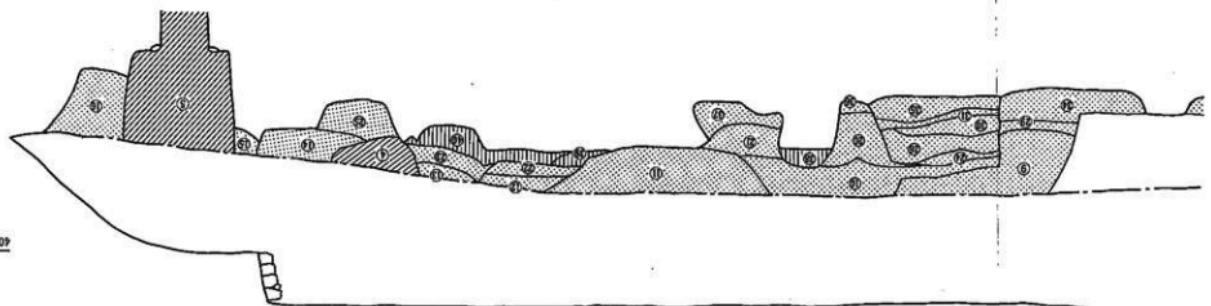
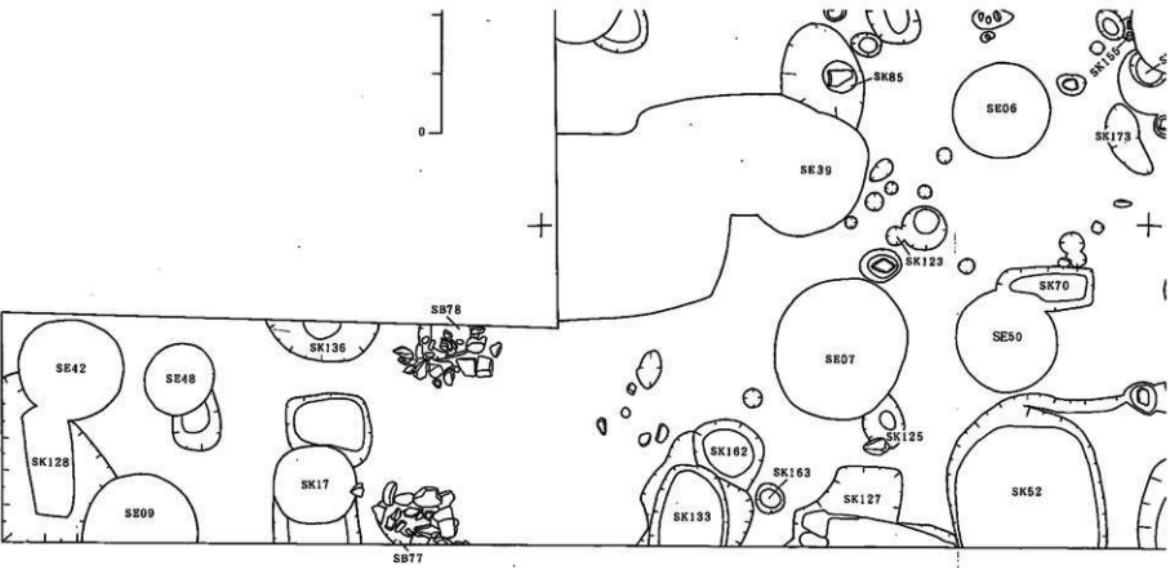
A区北壁土層

- ① 灰褐色粘質土
- ② 黄褐色砂質土 (礫を多く含む)
- ③ 灰褐色土 (土師器含む)
- ④ 暗灰褐色土 (炭を含む)
- ⑤ 暗茶褐色土 (茶色に腐食した有機物を多く含む)
- ⑥ 暗黄褐色土
- ⑦ 暗青灰色粘質土
- ⑧ 井 戸 (S E32)
- ㉙ 暗青灰色粘質土 (有機物を多く含む)
- ㉚ 茶褐色土
- ㉛ 暗灰褐色土 (土師器含む)
- ㉜ 明褐色土 (小砾を含む)
- ㉝ 暗黃褐色土
- ㉞ 茶褐色土
- ㉟ 暗茶褐色土 (磚, 土師器含む)
- ㉟ 暗茶褐色土
- ㉟ 暗黃褐色土 (磚, 燃土を含む)
- ㉟ 暗灰色土
- ㉟ 暗灰褐色土 (鉄分含む)
- ㉟ 暗黃褐色土 (鉄分含む)
- ㉟ 暗灰褐色土 (茶色に腐食した有機物を多く含む)
- ㉟ 暗黃褐色土
- ㉟ 黄褐色粘質土
- ㉟ 暗灰色砂質土 (鉄分含む)
- ㉟ 炭 磚 (土師器含む)
- ㉟ 灰色砂質土

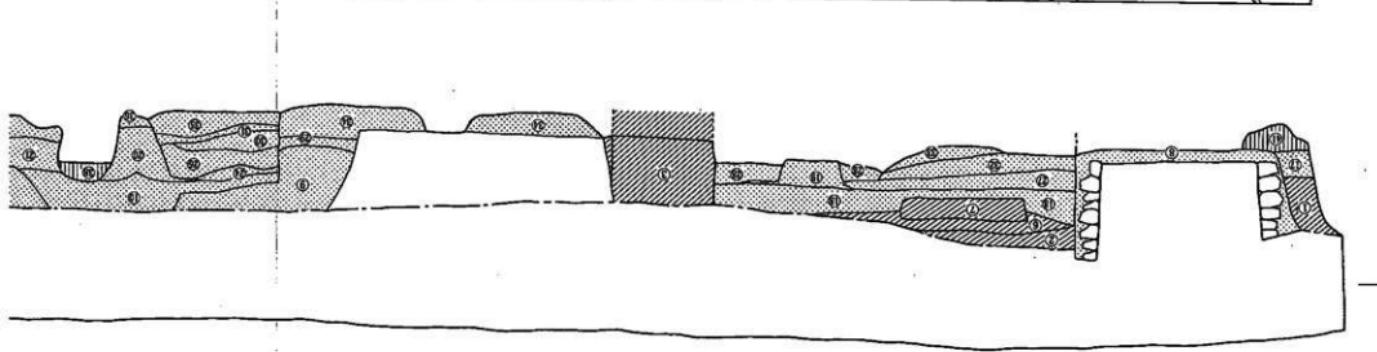
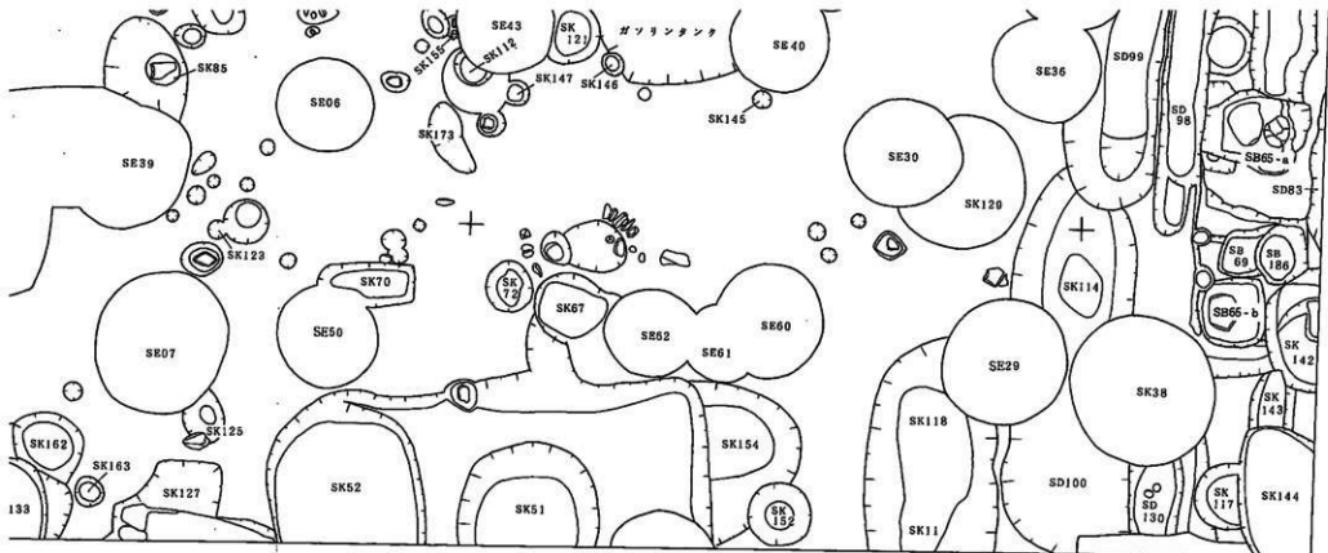
5m





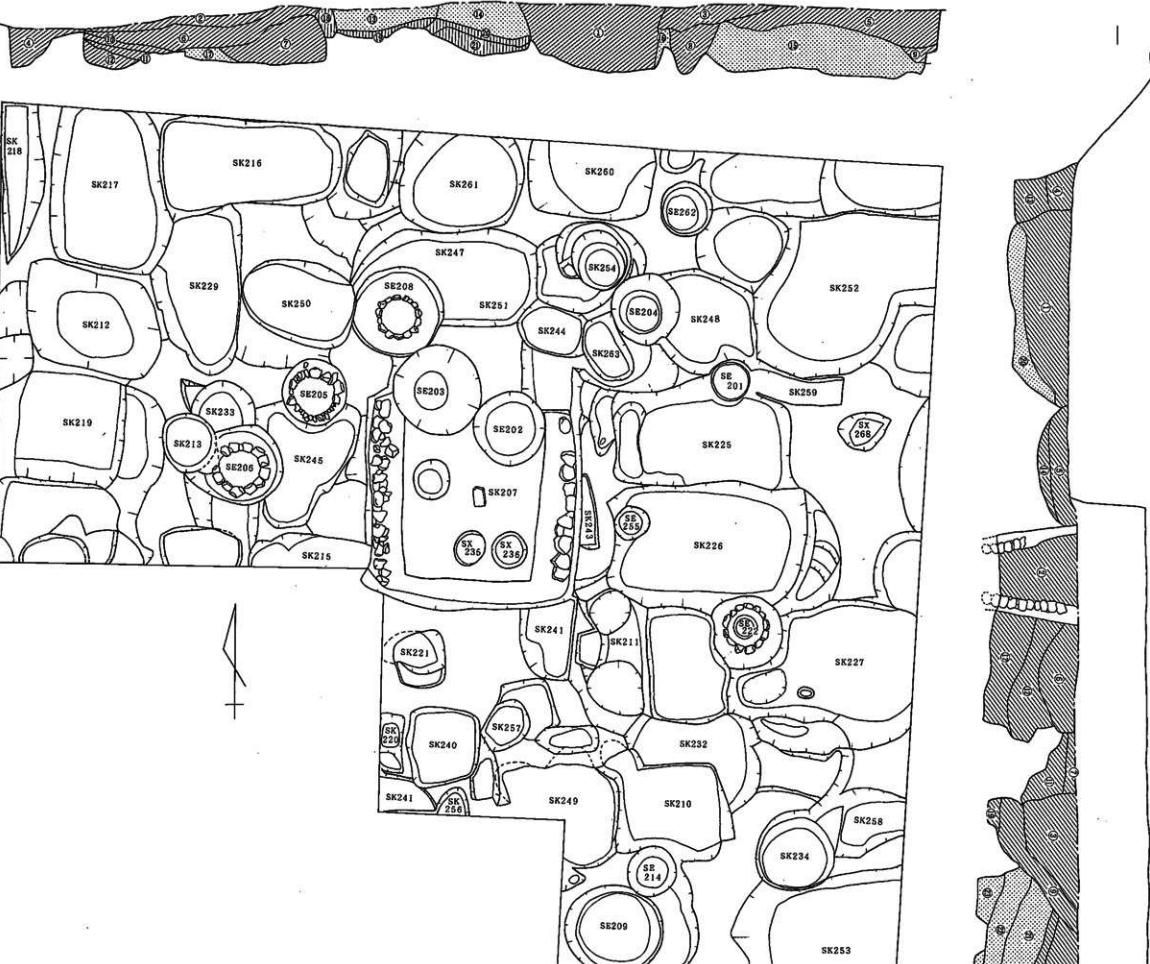


付図2. A区第2換出面実測図・断面図



付图2 A区第2検出面実測図・断面図

40m

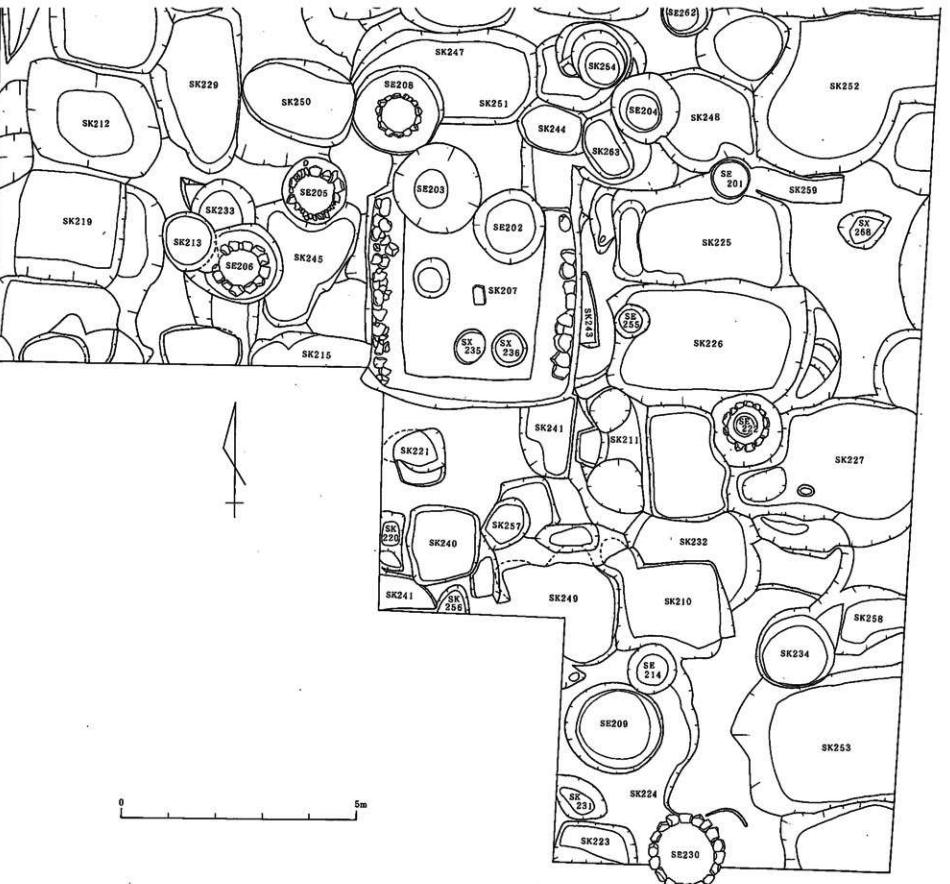


B区北壁土層

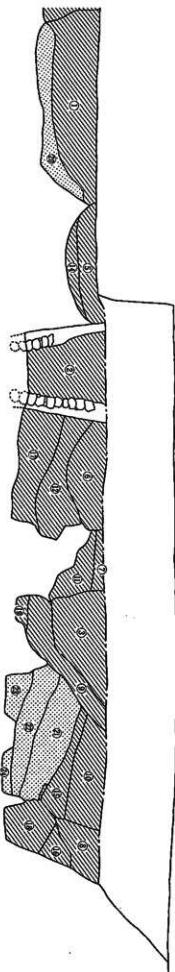
- ① 瓦 潟 (焼土を多く含む)
- ② 瓦 潟 (焼土を多く含む)
- ③ 褐 色 土 (焼土を含む)
- ④ 灰褐色土 (焼土、灰を含む)
- ⑤ 灰褐色土 (焼土、灰を含む)
- ⑥ 灰褐色土 (土師器を含む)
- ⑦ 茶褐色土 (焼土を含む)
- ⑧ 灰褐色土 (焼土を含む)
- ⑨ 灰褐色土 (焼土を含む)
- ⑩ 灰褐色土 (灰を多く含む)
- ⑪ 灰黄色粘質土
- ⑫ 灰褐色土 (焼土、炭を含む)
- ⑬ 黄灰褐色土 (焼土、瓦を含む)
- ⑭ 煙灰褐色土 (土師器含む)
- ⑮ 黄褐色土 (土師器を少量含む)
- ⑯ 灰褐色土 (土師器を含む)
- ⑰ 灰褐色土 (燒土、灰を含む)
- ⑱ 黄褐色砂質土
- ⑲ 黄褐色粘質土 (少數の土師器を含む)
- ⑳ 灰灰色土 (土師器、灰を含む)

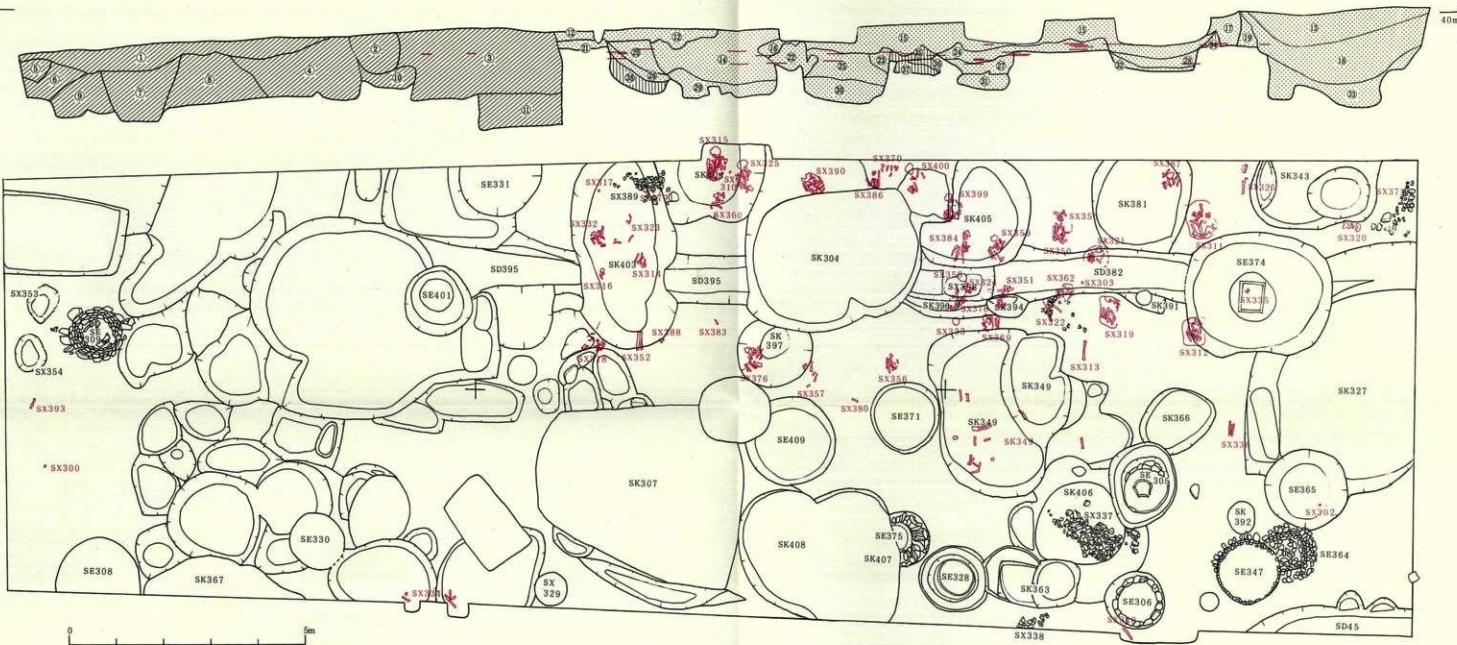
B区東壁土層

- ① 灰灰色粘質土 (木片、貝を多く含む)
- ② 井 戸 壁
- ③ 瓦 潟 (焼土を多く含む)
- ④ 瓦 潟
- ⑤ 灰褐色粘質土 (焼土、灰を含む)
- ⑥ 灰褐色土 (焼土を含む)
- ⑦ 灰 色 土 (灰、土師器を含む)
- ⑧ 灰褐色土 (灰、貝、瓦、灰を含む)
- ⑨ 灰褐色土 (焼土、灰を含む)
- ⑩ 灰 色 土 (海螺、燒土、燒罐を含む)
- ⑪ 灰褐色土 (海螺、燒土、瓦を含む)
- ⑫ 瓦 潟 (焼土、礁を含む)
- ⑬ 灰褐色土 (灰を多く含む)
- ⑭ 灰褐色粘質土 (灰を含む)
- ⑮ 灰褐色土 (灰、土師器を含む)
- ⑯ 灰褐色土 (燒土、灰を含む)
- ⑰ 灰褐色土 (燒土、灰を含む)
- ⑱ 灰褐色土 (燒土、灰を含む)
- ⑲ 灰褐色土 (燒土を多く含む)
- ⑳ 瓦 潟
- ㉑ 灰色粘質土 (木片を含む)
- ㉒ 灰褐色土 (海螺、灰、燒土、瓦を含む)
- ㉓ 灰灰色土 (燒土、瓦を含む)
- ㉔ 灰褐色砂質土 (海螺、貝を含む)
- ㉕ 灰褐色土 (灰を含む)



付図3. B区 平面実測図



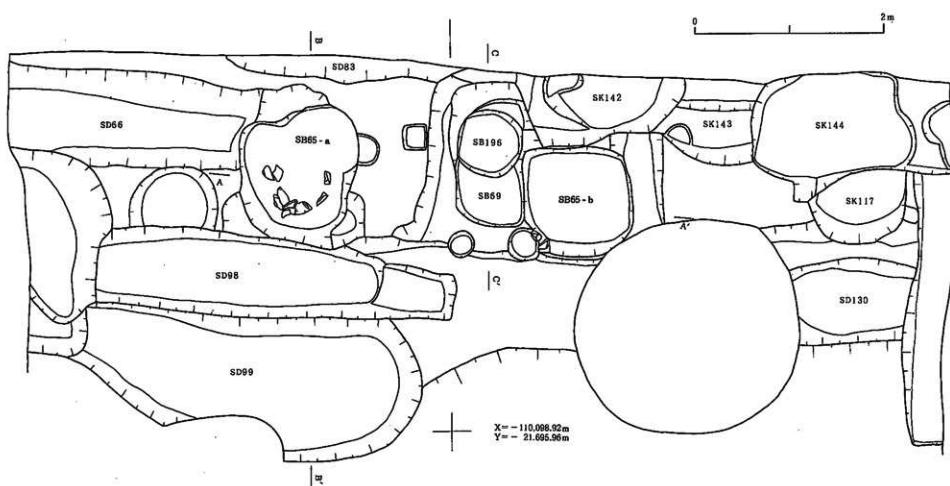
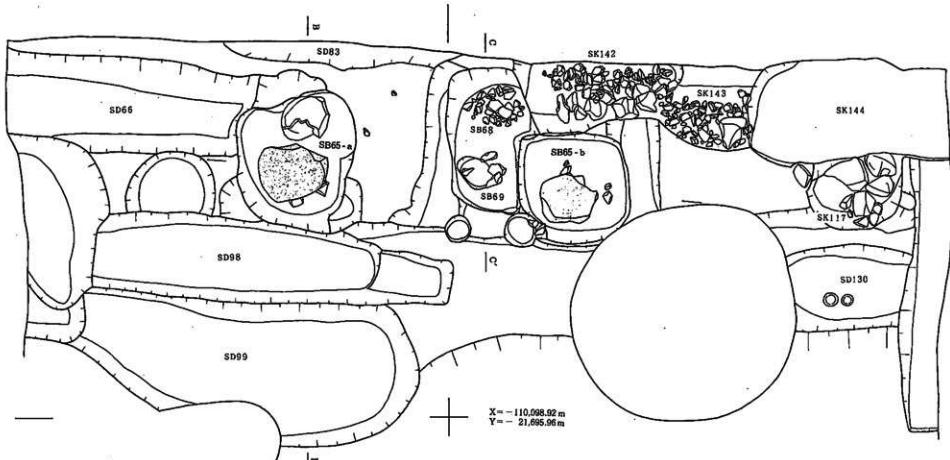
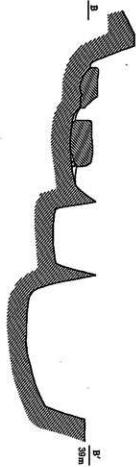


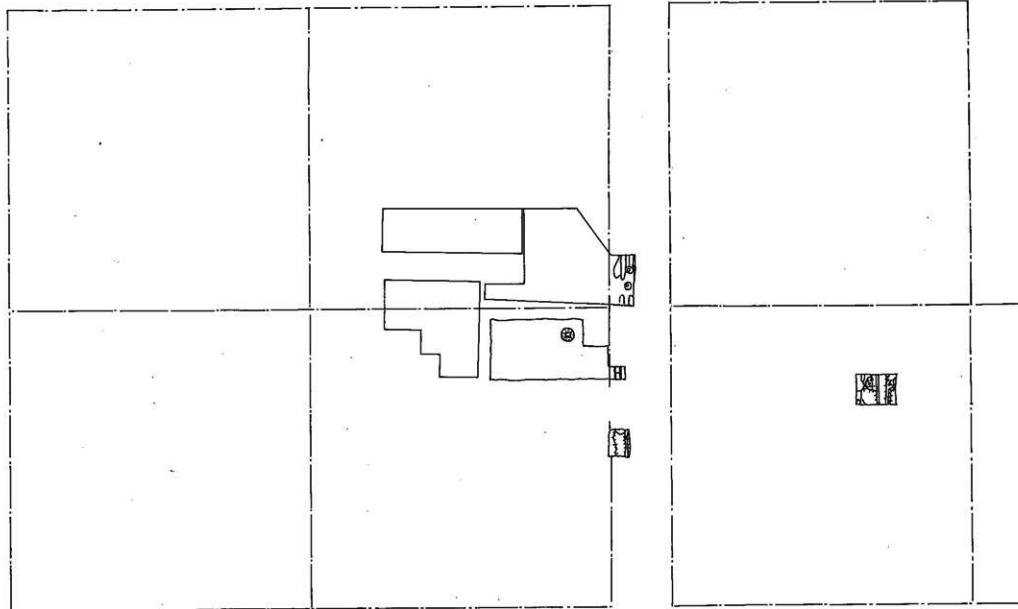
C区北壁土層

- ① 茶褐色土（焼土、コンクリート含む）
- ② 磚
- ③ 褐色土（漆喰、瓦、礫を多く含む）
- ④ 暗灰褐色土（炭を含む）
- ⑤ 晴茶褐色土
- ⑥ 灰褐色土（礫を含む）
- ⑦ 晴茶褐色土（漆喰、炭を含む）
- ⑧ 晴茶褐色土（磚、土師器小片を含む）
- ⑨ 灰褐色土（地山、ブロック混じり）
- ⑩ 晴灰褐色土
- ⑪ 井戸（SE331）
- ⑫ 暗灰褐色土
- ⑬ 灰褐色粘土質土
- ⑭ 晴灰褐色土（小礫を含む）
- ⑮ 暗灰褐色土
- ⑯ 晴灰褐色土
- ⑰ 暗灰褐色土
- ⑱ 晴灰褐色土
- ⑲ 黄褐色土
- ⑳ 暗茶褐色土
- ㉑ 晴茶褐色土（木片、著等有機物を多量に含む）
- ㉒ 黄褐色粘土質土
- ㉓ 暗灰褐色土（炭、土師器を含む）

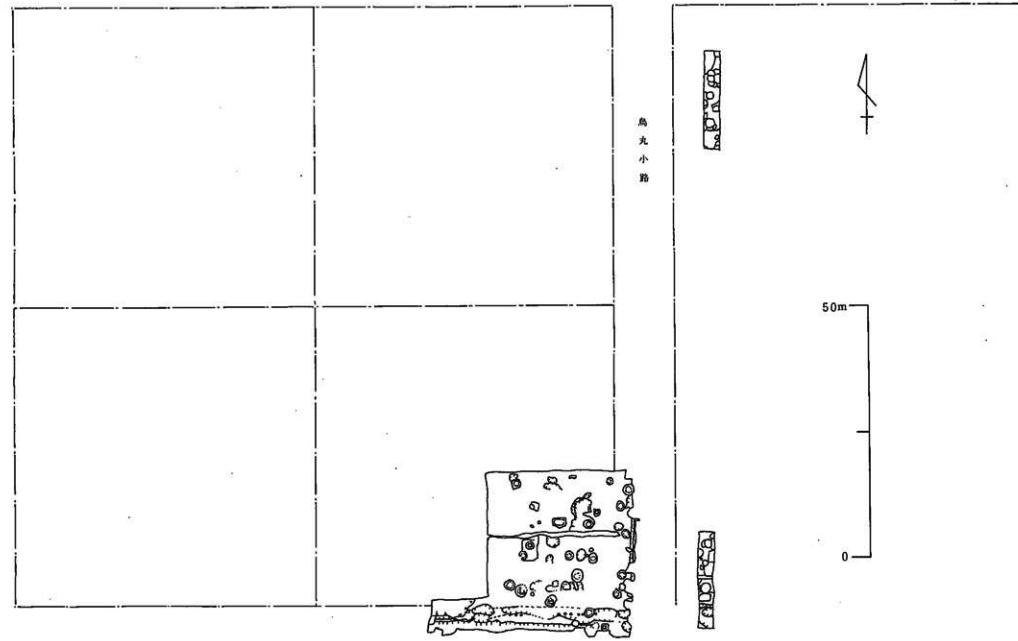
- ㉔ 暗灰褐色土（炭を含む）
- ㉕ 黄褐色土
- ㉖ 暗茶褐色土
- ㉗ 晴茶褐色土
- ㉘ 暗灰褐色土
- ㉙ 暗茶褐色土
- ㉚ 暗茶褐色土（土片、著等有機物を多量に含む）
- ㉛ 黄褐色粘土質土
- ㉜ 晴灰褐色土（炭、土師器を含む）
- ㉝ 晴灰褐色土（炭、土師器を含む）
- ㉞ 晴灰褐色土質土
- ㉟ 晴茶褐色土（土師器、地山ブロックを含む）
- ㉟ 晴灰褐色土（炭、土師器を含む）
- ㉟ 晴灰褐色土（炭、土師器を含む）

付図4. C区平面実測図・断面図





鶴小路



付図6. 調査地周辺の道路状況

---

平安京跡研究調査報告 第14輯

平安京左京三条三坊十一町

発行日 昭和59年3月31日  
編集 平安博物館考古学第4研究室  
寺島 孝一  
発行 財團法人 古代學協會  
604 京都市中京区三条高倉  
TEL.075(222)0888  
振替京都58-850番  
制作 ピクトリー社  
604 京都市中京区油小路通鶴上ル  
TEL.075(221)1420

---

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XIV

EXCAVATIONS AT THE ELEVENTH  
INSULA, REGIO III, DECUMANUS III  
IN THE PARS ORIENTALIS OF  
THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXIV